２００文字小説集「風のささやき」

河　美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２００文字小説集「風のささやき」

【Ｎコード】
Ｎ４６４１Ｌ

【作者名】
河　美子

【あらすじ】
いろいろなつぶやきが風に乗って聞こえます。

第1話「僕の声聞こえる？」

お腹が空いた。
ビールよりご飯作って。
明日はゴミの日だ。
僕が出すよ、袋はどこ。
ねえ、連絡帳に返事を書いて。
返事がないのは僕だけなんだ。
分かってるよ、忙しいのは。
先生にもそう話したよ。
ごめんなさい。

でも、ママ、パパは死んだんだよ。
空のお星様になったんだよ。
僕では頼りないだろうね。
僕はずっとママを守るつもりだよ。
僕のこと嫌い？
僕が一緒に乗っていたのに、僕だけが生き残ったから？

ママ、僕はどうすればいいの。

第2話「僕は黒子」

あのレンタルビデオ店にはもう行けない。
何であんなことしたのか。
一度だけ、やってみたかった。
みんなの前で俺も悪ぶって見せたかった。
仲間に入れてほしかった。
でも、俺の膨らんだカバンに自分がつまずいて転んでしまった。
慌てて出てきたがみんなに蹴られた。
「お前なんか仲間じゃねえよ」
「馬鹿野郎！　カメラにはっきり顔が残っちまったよ」
「もう、俺たちまであぶねえよ」

残ったカバンから足がついた。

今後誰とも会いません。

第3話「さよなら三角」

「さよなら三角　またきて四角　四角は豆腐　豆腐は白い　白いはうさぎ　うさぎは跳ねる　跳ねるはカエル　カエルは青い　青いはおばけ　おばけは消える　消えるは電気　電気は光る　光るは親父のはげ頭ー！」

学校の帰りに友達と叫んで歩いてたら、近所のおっちゃんにえらい叱られたわ。

あれから５０年。

俺も悪友もなぜかツルツルになった。

「あのときにあんなに大声でからかったから、バチが当たったのかもしれんわな」

二人で飲むといつもその話題になる。

第４話「女の黒髪」

彼と別れた。
「今日は髪を切りたいの」
「どれぐらいカットしますか」
「ショートに」
「それは、３０センチ程切ることになります」
「うん、いいの」
「いや、この髪もらっていいですか」
「はあ？」
「切った髪でかつらを作る活動しているんです」
「かつら？」
「ええ、抗ガン剤の副作用で髪が抜けた人のために」
「どうぞどうぞ。私の髪でいいなら」
「綺麗な黒髪ですよ」
「いいの、お役に立つなら嬉しいわ」
なんか厳粛な気持ちになった。

第5話「夏祭り」

「お母さん、早く浴衣を着せてよ」
「はいはい、でも、その汗を拭いて。先ずはお姉ちゃんから」
「やったー。そうよ、妹はあと」
「肌着を着けなさい。スリップを。パンツの線もブラジャーも興ざめよ」
「えーっ、暑い」
「少しベビーパウダーをはたきましょう」
「いい気持ち」
「襟元はキュッと締めて、胸元を開けると夜のお勤め風よ」
母はさっさと着せていく。
「帯は文庫に」
背中の帯をポンと叩かれ目が覚めた。

泣けてくる母の三回忌。

第6話「憎まれ口」

「お前なんか嫌いだ」
「あっちへ行けよ」
「うっとおしいんだよ」
これが保育園児の言葉。
「どのお口が言ってるの！」
「だって、お兄ちゃんが言ってるもん！」
「お黙り！　もうそんなことを言う子と先生は遊んであげません」
「あーん、ごめんなさーい」
「じゃ、ちゃんと謝りなさい」
「ごめんよ、もう言いません」
「アッカンベー」
「うわーん、謝ったのにアッカンベーだって」
先生は仁王立ちです。
「女の子と遊ぼうっと！」
「許してー」

第7話「可愛い彼女」

1つ、2つ、3つ…数えていくと、12枚。
何がって、俺は百円玉を貯金箱に入れていた。
つまり、1200円ってこと。
「あなた、五百円の弁当代で280円でしょ。後の220円は？」
「缶コーヒーと夕方食べるあんパンで、もうゼロ」
「あ、そう」
本当は嘘だった。
百円だけ残るのだ。
というか残していた。
空き缶に1枚ずつ入れていた。
今日は経理の真由美ちゃんの誕生日。
買おうプレゼント。

トイレ前で会った。
煙草の匂い。
決めた。

第8話「裏窓」

さあ、今日はお天気だから布団を干して。
おや、窓から見える三軒向こうの7階の給湯室。
あら、女の子と上司かな。
えっ、抱き合ってる？
わお、キスしてる。
ちょっと、見えないわ。
眼鏡とってこようっと。
よく見える。
あれ、あの娘、隣の家の圭子ちゃんじゃない？
そうよ、近くの支店に転属になったって奥さん言ってたもん。
えーっ、言うべきかな。
取引先の男かしら。
やあね。
圭子ちゃん、まだ２３歳よ。
あら？　あのネクタイ。
あなた…

第9話「リサイクル」

夜の新宿、高層ビルの立ち並ぶ中、俺は段ボールを運ぶ。
6枚あればどうにか暖は取れる。
やっと公園に着く。
「兄ちゃん、一杯飲もうよ」
「金なくて」
「うちのテントに来いよ」
「お邪魔します」
「熱燗だよ」
「うわー」
「ラーメンもあるよ」
「いただきます。空きっ腹にしみるなあ」
「そうだろ」
「ほら、羽根布団もあるよ」
「すごい」
「資源ごみの収集前に行くとね、揃うよ」
「あら、お客さん?」
女の人だ。
「あれも拾ったの」
すごい！

第１０話「老後の生きがい」

「そこのリップ取ってー」
「やだー、今から使うの、この色」
「ナルー、頬紅貸して」
「ルイ、マスカラがちょっと変よ」
「いいの、これで。どうせ夜だし見えない」
はい、ここは場末のストリップ劇場。
「ねえ、支配人。今日のお客は何人？」
「今日は８人！」
「あら、また一ケタ。しけてるわねえ」
「そんなこと言うなよ！　頑張ってよ」
「もう６８よ。もう頑張れないわ」
「ルイは７３よ」
客は近所のおじいちゃん。
「おーい、眼鏡忘れた」

第１１話「パパのゲーム」

石けりしながら帰ってると、その石が大切なものに思えてポケットに入れる。
「ただいまー」
元気よく言ってはみたものの、パパもママも仕事。
僕は小学３年生。
さっきの石を持って遊びに行こうかな。
でも、みんな高いゲーム持っていて、僕とは遊んでくれない。
僕の家はパパもママも高校の先生。
「あんなものは体に悪い」
と買ってはくれない。お年玉で買おうとしたら、それもだめって。
つまんないな。
だから、パパのＦＸ僕がやってる。

第１２話「リコーダー」

リコーダーの二重奏。
あの子とやるんだ。
「そこの二人うまいから、歌の始まりを二人で演奏をして」
突然言われた音楽の時間。
確かに僕もあの子もリコーダーが得意だ。
でも、５００人以上は来るよ、うちの小学校の音楽会。
高いソを出すのは勇気がいるんだ。
一気に吹かないと、音が割れて下手くそになる。
先生が今日は二人で練習すると言った。
音楽室から聞こえるリコーダー。
「あいつだ」
慌てて走る。
高いソが上手い！
「負けないぞ」

第13話「言葉にすると」

「暑いねえ」
『うん』
「こう暑いと、あなたも大変ね」
『ああ、ほんとに暑過ぎて寝たきりだからたまらんよ』
「お風呂でも浴びる？」
『いや、それより冷にしてくれないか』
「少し熱い？」
『バカ野郎。この暑いときにこんな生温かいものをくれやがって』
「いやなの？」
『嫌に決まってるだろうが！』
「じゃ、少し外してあげましょうか？」
『何を外すんだい？』
「おむつを外しましょう」
『よせよ、みんなが見てるよ』
「生まれて半年ね」

第１４話「親切な人」

ここは今時珍しい共同トイレに共同の台所。
「おはようございます」
「あ、おはよう」
隣の部屋の夏樹さんだ。この掃き溜めにツルって感じの綺麗な人だ。
「今日は早いんですね」
「ええ、仕事で奈良まで」
「僕は今日は宝ヶ池まで」
「よかったら、私の作ったみそ汁食べませんか」
「ありがとうございます。今日は何にもなくて腹が減ってたんです」
「まあ、じゃ、おにぎりもあるわよ」
「すみません」
僕は彼女の勧誘する生命保険に入った。

第１５話「遠い思い出」

参道に立ち並ぶ露天商。
今日は夏祭り。
この高台にある神社の境内に立つ戦没者の慰霊塔からの景色は爽快だ。
神社の隣にある幼稚園に通っていたのは半世紀前。
あの頃はここに地下鉄が通るという話で、突貫工事の真っ最中。
東京五輪の前の年だった。
石段下には戦後のバラックがなぜか残っていた。
傷痍軍人のアコーディオンが物哀しく歌っていたっけ。
息子の戦死の知らせに甕に頭を突っ込んで泣いた祖母の話。
昭和は遠くになりにけり。

第１６話「ひまわり」

ちぎり絵を製作するようになり３３年。
雲竜紙の扱いも糊の付け方も慣れたもの。
晴れ渡った今日は夏の景色を描く。
ひまわりにジョロで水をやる幼き娘の姿。
可愛い手つきを思い出しながら、和紙でちぎって貼っていく。
「母さん、来月来るから」
「旦那さんによろしくね」
「母さんもガスの消し忘れ気をつけて」
「はいはい」
「１週間分の食事、冷凍庫に入れてるよ。チンして食べて」
「ありがとう」

娘が家を出ると、母の命が消えました。

第17話「似たもの親子」

「そんなに水をはねて歩いたら、長靴にも入るわよ」
「いいもん！」
「あーあ、レインコートを着ても、ズボンがビチョビチョ」
「いいもん！」
「幼稚園の先生がびっくりするわよ」
「いいもん！」
「傘は上にしないと、下向けたら、あーあー」
「いいもん！」

そこへトラックが通る！
思い切り水溜りの水を跳ね飛ばす。
バッシャーン！
「ひどいわねえ。ママまでずぶぬれになっちゃった」
「ぼくとおんなじだね！」
先生の前に水玉模様の親子。

第１８話「うそつき」

町の図書館。
この前から予約していた本が入荷したという連絡を受けた。
今日のカウンターはイケメン星野さん。
ダンディーな彼が来て、主婦がたくさん活用するようになった。
「あのう、電話をいただいたのですが」
パソコンで確認する彼。
「お待ちください。これですね」
「はい」
「では、下の書庫から取ってきます」
「はい」
「お待たせしました。『男の口説き方』『魅力的な女』『幼な妻』この３冊でよろしいですか」
「主人のです！」

第１９話「演劇人」

「お前がここにいること自体が気に入らないんだ」
「何でよ」
「ここは俺の部屋だろ」
「出ていくのはあんたでしょ、私が働いてるんだから」
「ここの敷金払ったの俺だぜ」
「悪いけど、クビになってからは私の稼ぎで食べてるのよ。出ていきなよ」
「くそっ、後で縋りついても知らねえからな」
「ふん、どこの誰がそんな真似するのよ。早く出ていきなよ」
「バカヤロー！」
娘の演劇部の練習が毎日響く。
父は稽古だと近所に大声で言いたい。

第二十話「操縦法」

「ママ、今日は飲み会で五千円頂戴」
「パパ、使い過ぎ！」
朝からさんざん叱られてる。
「ママ、何してるの」
「お肌コロコロよ」
「ふーん、僕にも貸して」
「お肌がたるんできた人がするの」
「ママ、たるんでないのに」
「そう？」
「うん」
「今日は何が食べたい？」
「ステーキがいいなあ」
「いいわよ。たまにはそうしましょう」
僕は九歳。最近、ママの操縦法を覚えてしまった。
九歳でも覚えるのに四十歳のパパは今でもわからないのね。

第二十一話「女の噂」

「ほら男子が洗ってるよ、プール」
「寒すぎー」
「小学校は楽しかったけど」
「わあ、みんな唇が紫になってる」
「寒いよねえ」
「それに1年ぶりのプールって、汚いよねえ」
「だから、ああやって洗うのよねえ、男子可哀そう」
「スクール水着はダサい」
「今日からムダ毛を処理しないと」
「あーん、面倒くさいな」
「選手の袖あり水着に長パンにしてくれたらいいのに」
「欠かさず水泳に出るとAだって」
「ハイレグなら特Aだって」
「H」

第二十二話「魔法です」

「折紙は白が見えるように置いて、半分に折って広げます」
「真ん中の線に付き合うように折ります。これが観音折り」
「ひっくり返して、縦長に置いて。爪の長さくらいを上から折り下げます」
「またひっくり返して、先程折った両端同士がチョンと付くように折ります。小鳥のキスね」
「下側はお嫁さんの裾のように広げます」
「魚のようね」
「その裾をぐっと持ち上げて、小鳥のキスの下に入れるとポロシャツ」
この魔法に一年生は感激！

第二十三話「お願いします！」

風鈴の音がする。
今日は風が強い。
少し開けた玄関の入り口を閉めようと立った。
ノブに伸ばした手、握られた！
えーっ！
「僕です。山下です！」
「放してください！」
「困るんです！」
「いや、やめて！」
「お願いです。一度でいいから」
「いや、絶対いや！」
「では、これでお願いします」
「何なのよ」
「アタック1箱付けます」
「いや、絶対いや！」
「じゃあ、バスタオルも付けます」
「そんなのいや！」
「いつ払ってくれるの、新聞代」

第二十四話「機内にて」

「ママ、この飛行機、空を飛ぶの？」
可愛い子供の問いかけに、客たちも笑みがこぼれる。
「そうよ」
「でも、この前、同じ型の飛行機落ちてたよ」
客がぴくっとする。
「な、何言うの。大丈夫よ」
母親は周りを気にして小さく答える。
「あの鳥が、エンジンの中に入ってしまうと墜落するんだって！」
えっ？
妙に専門的な話に、客たちも不安な気持ち。
「ママ、第二エンジンの音がおかしくない？」
えーーっ！

到着すると客はみんな拍手した。

第二十五話「許してください！」

お姉ちゃんとお兄ちゃんとお母さんと僕、四人でスーパーへ。
「これが欲しい」
「ダメ、家にあるでしょう」
「いやだいやだ、これが欲しい、欲しいんだー！」
床に寝て泣き叫ぶ僕。
その間に小麦粉、ソーメン、砂糖、味噌を盗むお姉ちゃんとお兄ちゃん。
お母さんは僕を怒って、そして店の外へ連れていく。
視線は僕に注がれる。
「わかった、ごめんなさい」
うなだれてお母さんと入る。
使えるのは千円だけ。
許して神様、お金が無いんです。

第二十六話「痛くしないで」

「お願い、痛いのはイヤよ」
「大丈夫、絶対痛くしないから」
「ホント？　」
「わかってるって。目をつぶって」
「ねえ、前に使った透明なゴムのがよかったわ。あれにして。」
「あれは薄くて着け心地がいいからね」
「着けてる感じがしないのがいいわ」
「でも、どう？」
「い、いいわ。とても」
「では、もう一度くわえてみて。もっと口を開けて」
「いやーん」
「奥さん、歯ぎしり対策のマウスガードなんだから、もっと口を大きく開けて！」

第二十七話「糟糠の妻？」

「どこへ行くの？」
「ちょっとバーゲンへ」
「僕の礼服買ってよ。もうウエストもぴちぴちで息もできないよ」
「えーっ、礼服なんて1万ぐらいかかるわ」
「随分安いじゃないか。じゃあ買ってよ」
「分かったわ。貴方のはいつも青〇の定価よ」
「何が？」
「貴方の服を買う時はいつもバーゲンでないのを買ってるの」
「そうか」
「そうよ。私なんかバーゲン品ばかり」
「悪いな」
「いいのよ」
翌日、妻はブランドのバーゲンで8万使いました。

第二十八話「愛していたのに」

妊娠中の妻。
異食症になった。
夫は知らない。
「壁土が美味しいの」
前の家は砂が混ざっていて歯ごたえが無く美味しくなかった。
「古いのが美味しいの」
昭和の初めの民家が最高。
「味が違うの」
少し香ばしくて、いつまでも口の中で溶けあう感じ。
見えない場所をあちこち噛みついて食べていく。
妻が検診に出かけてる間に、白アリ駆除をした。
その夜、食器棚の後ろで妻が死んだ。
「俺は何もしていない！」
夫は愛する妻の殺人で逮捕に。

第二十九話「人身事故」

朝からお腹が。
だけど、もう家を出ないと電車に間に合わない。
ちょっと痛くなりそうだけど、出発するしか仕方がない。
無事に電車には乗れた。
ギュルギュルルー。
「おーとっとっと」
他のこと考えよう。
えーと、今日のプレゼンは俺がずっと考えてきたんだから。
ギュルルルルー。
あ、油汗が……。
お尻に思い切り力を入れる。
ギュルルルルッルー。
「や、やばい」
アナウンスが。
「ただいま人身事故で停車中」
…俺も…人身事故…で…す。

第三十話「ドライブ」

夫はドライブに行くと、人間性が変わる。
普段はあんなに温和で、物静かな学者肌の夫が……。
「馬鹿野郎！　はやくどけって言ってんだろー！」
「轢き殺すぞー！　トロトロ通りやがって！」
「くっそー！　トンネルで無灯火だと？　下りてきやがれ！」
「自転車なんかに乗るんじゃねえ！　邪魔だー！」
「ばばあ！　信号が変わる頃に渡るんじゃねえ！　ぶち殺すぞ！」

「ねえ、あなた」
「何だよ！」
「悪いけど窓開けて言ってよ。聞こえてるの私だけよ」

第三十一話「女性の品格」

パチンコに夢中。
夫と子供を送ると、いつもの店が新装開店だって。
店頭で立っていると。
「あら、奥さん」
この人は確かＰＴＡの奥様。
「パチンコやるんですの？」
「いいえ。ここの掃除をしてるんです」
「まあ、バイト？」
「はい！」
口から出まかせだけど、我ながらいい考え。
「では、ごめんあそばせ」
翌日、別の店に。
パチンコ玉がコロコロと女性の足元に。
「ちょっとすみません」
「あら」
「あら」
奥様、箱の上に足を置いてざます。

第三十二話「僕は恥ずかしい」

「写生をします」
「先生、画板くださーい」
「並んで」
見知らぬ男がやって来た。
「画板ください」
「あ、あのう、これは子どもだけに配ってるんです」
「私も３８歳で加納代五郎の子供です」
「いえ、あの、クラスの子供です」
「ええ、私も中産階級のクラスです」
「違うんです。３年１組です」
「僕も平成３年入社組です」
「だから違うんです。○小学校の児童数しかないです」
「差別ですね」
「ばーかばーかばーか！」

「せんせ…い……」

第三十三話「若さの秘訣」

メモ帳と電話を手元に置いて、夜中の零時を待つ。
テレビからいつもの声。
「皆様、ショッピングタイムの一番お得な時間が参りました」
そうよ、だから、起きてるのよ。
「本日の一番のお安い商品は、お肌が十歳若返るクリームです」
なるほど。でも、モデルが若いんじゃない？
「モデルの方に年齢を聞いてみましょう。六十歳だそうです」
ふーん、見えないわ。
でも、あのモデル見たことがあるわ。
姉と同級の木村さん？
姉はまだ五十歳よ。

第三十四話「蛍」

久しぶりに母から手紙が届いた。
メールしてと言っても、母は電話機能しか使わない。
「お元気ですか」
一月前にも電話したでしょ。
「ごめんね、店を閉めることにしたの」
聞いてないよ。割烹で有名な店だったのに。
「借金も返せなくなりました」
えっ！
「あなたが困らないように手続きしました」
まさか…やめてよ、母さん。
「元気でね。見守っているわ」
アパートを飛び出し夜行バスに。
「母さん」
呟くと、蛍が光の輪を描いて夜の闇へ。

第三十五話「誓いの指輪」

主人から指輪を貰ったの。
「君のことをこれからもずっと愛していくよ」
「えっ？　本当？　嬉しいわ、ありがとう」
「嵌めてあげよう」
「お願いするわ」
あら？　入らないんだけど。
そう言えば小さすぎるわよ、その指輪。
十一号？　私は十五号よ。
「ねえ、貴方、サイズが小さすぎよ」
「そうみたいだね」
ピンポーン。宝石店の主。
「申し訳ございません、こちらのリングでした」
「やっぱり」
「二つ買われたので、間違えました」
「えっ？　貴方！」

第三十六話「家庭訪問」

今日は家庭訪問。
「お母さん、家庭訪問になるといつも大掃除するね」
「そうよ、先生が部屋を見るでしょ」
「でも、ここしか見ないよ」
「ううん、前の先生は勉強部屋を見せてって言ったし」
「そうか」
「それにトイレは家の顔って言うでしょ。磨かなきゃ」
「えーっ、トイレなんか見ないよ」
「ううん、みんなの家を回ったらトイレも行くわよ。お茶出されるし」
ピンポーン。
「先生だ」
「こんにちわ」
「先生、トイレ綺麗よ。行く？　ねえ」

第三十七話「待っていたよ」

あいつが来るのをずっと待った。
いつもは三時に来るのに、今日は五時まで来なかった。
おかげで二時間もアパートの前で待っていた。
傘も持っているけど、横殴りの雨だったからずぶぬれになった。
部屋にいると聞こえないんだ、君の声が。
どうしても会いたかったんだ。
だって、やっと金が手に入ったんだ。
俺は温かく金色に輝く君が好きなんだ。
両手にいっぱい抱き締めたかった。
「芋ー焼き芋ー、石焼き芋ー」
「大きいのくださーい！」

第三十八話「夢物語」

「ママ、歯磨きしたよ」
「じゃあ、ママが寝るまで本を読んであげる」
「僕はね、トーマスがいいなあ」
「そう、わかったわ。そうしましょ」
手をつないで僕のベッドまで。
ママは優しい声で、僕が寝るまで読んでくれる。

テレビの音がうるさくて、ここで目が覚めた。
「ちょっと、太郎、早く寝な」
「じゃ、テレビ消してよ」
「嫌よ、これ面白いんだから」
「タバコが煙たいよ」
「うるさい子だね、あっち向いて寝な」
もう一回夢見ようっと。

第三十九話「母の日」

赤いカーネーションを買った。
あまり長持ちしない花だけど、今日は母の日だから。
テレビでやたらと連呼するからついつい買った。
そうよ、子どもはきっと忘れてる。

忘れてた。
慌てて実家に電話する。
「母さん、私」
「どうしたの」
「あの母の日だから長生きしてねって」
「それはどうもありがとう。お迎えが来るまではね」
「また、そんなこと」
電話を切ると、メールが来た。
「母の日、いつもありがとう」
子どもはやっぱり親に似るね。

第四十話「理科室」

今日はお楽しみ会。
先生が各班で出し物を考えてって。
私たちは理科室で、宝探しをしようって決めた。
宝は番号札。
持ってきた人にはシールを上げるの。
クラスは二十三人。
私の班は六人。
だから、十七枚番号札を作ったの。
みんなにあげられるようにしたの。
そうしたら、最後の美奈ちゃんが帰ってこないから、私が迎えに行ったの。
そんなに難しい場所には隠さなかったのに。
「美奈ちゃん」
内臓模型の人体が…美奈ちゃん…瞬きをした。

第四十一話「魅惑の粉」

「やめて！　やめてったら」
「何言ってるんだよ。これが欲しくはないのかい」
「いや、いやだったら」
目の前に出される白い粉。
これを今、手にするとまたやり直さないといけなくなる。
「別にいいんだぜ」
「待って、待って頂戴」
「やっぱり欲しいだろう」
悔しいけど事実。まぎれもない事実。
「この中に入れたら、確かに変わってくる」
「だから、言ってるだろ。入れろって」
「わかったわ」
「ぜんざいに砂糖を入れたら、最後に塩一さじ」

第四十二話「気にしない」（前書き）

第四十二話「気にしない」

「お、おか、おかあさん」
「うん？」
「ぼ、ぼく、よ、ようちえん、す、すき」
「そう、よかった」
「き、き、今日、ダ、ダンス習った」
「ふーん。踊って見せてよ」
「や、やだ」
「そんなこと言わずにやってよ」
「じ、じゃ、ちょ、ちょっとだけ」
レッド隊員のダンスとやらを見せてくれる。
なかなかカッコいい。
パチパチ。
嬉しそうにピースサインする息子。
吃音だからって、気にしちゃダメ。

２０年後。
「母さん、ごはんある？」
ほらね。

第四十二話「気にしない」（後書き）

「ゆっくり話して」とか、言いなおしをさせると、よけいにひどくなります。
気にしないのが一番。

第四十三話「音楽会までに」

木琴を演奏することになった。
トレモロが難しい。
少しずつだけど出来るようになってきた。
目指すは奴だ。
奴は運動神経も抜群の野球少年。
先生が
「運動神経がいいから、木琴も上手ね」
そうなんだ。
僕は運動音痴。
僕が十六分音符を叩くと、ギッコンバッタンになる。
奴がやると、ダダダダダって感じ。
家でも机で練習。
今日も練習してると奴が来た。
「肩の力を抜いて、マレットを指二本で持てよ」
すごい！
本当だ！

二人の音が揃った！

第四十四話「自分のことは自分で」

初めてのデート。
彼女はお洒落な籠の蓋を開けた。
「えーと、お手ふきをどうぞ」
「ありがとう」
「次はジェルで消毒よ」
「はい」
「それから、水筒とコップ」
「はい」
「これがバナナ」
「はい」
「そしてゆで卵」
「はい」
「お菓子が三百円分」
「はあ？」
「それから、食後に遊ぼうと思ってバレーボール」
「えっ？　そんな物まで持ってきたんですか」
「ええ、私几帳面なの」
「あのーお弁当は」
「私の分はあるけど。あなたは？」
「そんな…」

第四十五話「将来の夢」

一年生の教室で。
「大きくなったら何になりたいかなあ」
「はい！」
「タカちゃん」
「僕は大きくなったら総理大臣になる！」
「あら、すごいわねえ」
「はーい！」
「ようくん」
「僕は、将来、事業仕分けをして立派な幹事長になる！」
「あ、あらそう」
「はい！」
「れんちゃん」
「私は、消費税を値上げして、借金王国にならないようにします」
「そ、そう」
「はい！」
「まあくん」
「僕は円谷プロのウルトラマン！」
先生はため息をついた。

第四十六話「ありがとう」

歴史の年号も人物も、どうしても覚えられない。
鉛筆削って書きこみ開始。
昨日の夜中から朝までかかった。
カンニング鉛筆。
いい感じだ。
紙なんかは開くとすぐバレる。
これなら大丈夫。
いよいよ始まった歴史テスト。
緊張して手が震える。
「井伊直弼は…」
すると、コロコロと落ちてしまった。
「ま、まずい」
その音に気付いて、先生が立つ。
素早く前の席の陽介が拾った。
「ありがとう」
ち、違う、これは俺のじゃない。
陽介！　くそーっ！

第四十七話「ブログ公開」

「これと、その唐揚げ交換しようよ」
「ああ、いいよ」
「おい、卵焼きと、お前のそのエビグラタン替えようぜ」
「どうぞ」
「うまそうなおにぎりだな。一個替えて」
「ああ」
「俺のとも替えてよ」
「いいけど、お前の握り飯じゃないじゃん」
「うん、だから半分くらい」
「いいよ」
母親がブログで弁当公開始めてから、みんなにメニューがバレていつもこうなる。
でも、みんな一回交換すると、もう言ってこない。

要するに、味は悪いんだな。

第四十八話「達成感！」

今日は布団シーツも洗おうっと。
ガタンガタン、ピー。
「洗濯機が壊れたー！　どうしよう。今日に限ってどっさりなのに」
「ママー、どうしたの」
「壊れちゃったの洗濯機」
「どうするの？」
「今から手洗いするしかないわ。コインランドリー近くにないもん」
「私もやるー。面白そー」
「ありがと、泣きそうよ」
浴槽内で、人相も変わるほどの勢いで踏みつける。
可愛い足と触れる。
手すりに巻き付けて絞る。
干して終了。
娘を抱き上げキス！

第四十九話「遺言」

「お父様、どちらへお出かけですの」
「ちょっと美術館に行ってくるよ」
「行ってらっしゃいませ」
娘の言葉遣いが丁寧になって、我が家も格式が感じられるようになった。
思えば妻を亡くし、会社が軌道に乗るまで、大変な道のりだった。
「あ、財布を忘れた」
あわてて家に戻る。
奥で婿と娘の声がする。
「親父さんの遺言、まだできないのかよ」
「だって、少し寄付するって言うんだもん」
「寄付？　バカらしい！」

二度と父は帰らなかった。

第五十話「ささやき」（前書き）

他の人に見られたらヤバいけど、やってみたい。

第五十話「ささやき」

朝の満員電車内で、俺の隣の奴から音漏れがする。
うるさいんだよ。
イヤホンが飾り程度って知らないのかよ。
朝からロックなんか聞きたくないのに。
睨むと、思い切り睨み返してきた。
腹立つなあ。
そうだ！
俺は口は思い切り笑って、寄り目をしてやった。
意外な展開に相手は普通じゃないと思ったみたいで、恐怖で顔がひきつった。
そこで、その顔のまま、
「う・る・さ・い」
と耳にささやいた。
彼は涙目で謝り、電源を切った。
よろしい。

第五十一話「新聞」

満員電車で、隣の男性が新聞を読んでいる。
今時、ケータイで読む奴が多いのに、広げて読むとは邪魔な奴だ。
『そういえば、昨夜の野球はどうだったかな』
『おう、そのページだ。ほう、やっぱり勝ったか』
『なかなかやるじゃないか。今年は優勝するかもしれんな』
私も男性と同じペースで読み進めていく。
一面スクープ記事がある。
『おう、噂の二人が結婚か』
『美人なのにできちゃった婚か』
読んでいる間に、首の筋を違えてしまった。

第五十二話「芸術は」

情熱のフラメンコ。
客は中年女性たちだ。
ギターを持って入って来た演奏家も、肩を落としてチューニングする。
そこへ、若い女性グループがやって来た。
途端に笑顔になる演奏家。
ダンサーの若者も、一度黒いスーツで控えていたが、若い女性を発見すると……白に着替えてくる。

ライトに映し出されるフラメンコ。
若い女性たちはろくに見ないでしきりと食べる。

夢見る瞳の中年女性たち。
ダンサーは拍手する彼女たちに投げキッスをした。

第五十三話「花嫁衣装」

「母さん、布頂戴」
「何を作るの？」
「人形の服」
「じゃ、そこのバスケットにあるわ」
「わ、こんなに？」
「ええ、端切ればかりだから」
十センチ四方の布は、人形にはちょうどだ。
裁縫セットを取り出し、手縫いで筒状に仕上げていく。
「子どもは型紙もなしに作るから大したもんね」
「母さん、ゴムもある？」
「どうするの？」
「胸にゴムを入れたら、ドレスができるよ」
五年の娘はカーテンでウエディングドレス作るって。
安上がりね。

第五十四話「天気予報」

天気予報では雨と言っていた。
でも、僕は傘が邪魔だから持って行かない。
ママは持って行けと怒ったけど。
すると、隣の家の真子ちゃんが長靴はいて傘を持って学校へ行ってる。
「新ちゃん、雨降るよ」
「フン、曇りと小雨で終わりさ。傘なんて邪魔さ」

給食が終わると大雨になった。
傘がないのは僕だけだった。
学校の傘を借りると、骨が折れてる。
「ちっ！」
ずぶぬれになって帰ると、
『ぬれたでしょ』
ママがタオルとメモを置いていた。

第五十五話「誕生日」

みんなの誕生日に呼ばれたから、僕も呼びたいって言った。
「そうか、今お金がないから、ご馳走は無理よ」
「うん」
ママは朝から近くの喫茶店でウエイトレスをしている。
その日、マスターにたくさんのパンの耳を貰って来た。
「パンの耳でおやつができるわ」
「ホント？」
「ええ、三人でしょ」
「うん」
ママと紙コップにポケモンを描く。
みんなが来た。
麦茶とおにぎり、揚げて砂糖をまぶしたパンの耳はおいしかった。
みんな大喜びだよ！

第五十六話「気持ち」

夏のボーナスが出るらしい。
だが、その話は社長からではない。
なぜか、平社員の小松さんからだ。
「何で、分かるんですか」
「いや、賞与の封筒を買って来いって」
「えっ？」
急にやる気が出た社員たち。
社長が部屋から出てきた
手にはあの封筒が握られてる。
「わしの気持ちだ。受け取ってくれ！」
「はい！」
声が揃う。
一人ずついただくが、薄い。
明細が入ってるのか。
開けると、ビル一階の喫茶店のモーニング券二枚だ。
「気持ちだ！」

第五十七話「つぶやき」

ついったー、夜中に呟く。
「小説読んでる、なう」
誰かが答えてくれる。
「誰の小説」
「僕の好きな東野圭吾」
「ふーん」
「貴方は何してるの？」
「ナイトフィーバーしてる」
「どこで」
「スポーツカフェ」
勝手に想像してる。二十代くらいの女性かな。
「仕事帰り？」
「そう、大きな契約取れたの」
やっぱりだ。
「一人ですか」
「みんなと祝杯あげてるの」
憧れるな。
のどが渇いたからちょっと台所。
母のケータイ？
「げっ、母とついったー」

第五十八話「餃子パーティー」

餃子パーティーだ。
豚のミンチ、ニラ、キャベツ、椎茸などをみじん切りにする。
塩、コショウ、だしの素、ごま油、醤油を入れて練る。
みんなで餃子の皮に包み入れる。
「うまそうだな」
「今日はたくさん出来そうですね」
「ああ、みんなで二百個はできるからな」
寄せ鍋と焼き餃子の両方だ。
下宿生は貧乏だからと、半年に一回開催してくれる大家さん。
「さあ、みんな食べろ！」

貴方が逝って三年。
「みんなで作った餃子、美味いですか」

第五十九話「おばあちゃん」

おばあちゃんの家に行った。
「おばあちゃん、僕だよ。ごはん食べに来たの」
「何も聞いてないよ」
「でも、おばあちゃんのご飯がおいしいもん」
「じゃ、食べて行きなさい」
「今日はなあに」
「おばあちゃんの家でできたカボチャの煮物だよ」
「僕、大好き」
「そうかい、あとはトマトのサラダとアジの干物だよ」
「全部好き」

ママが迎えに来た。
「ホテルへ食べに行くわよ。着替えなさい」
おばあちゃんは寂しそうだ。
僕はここがいいのに。

第六十話「思いやり」

ママは引っ越し疲れでぎっくり腰。
「腰大丈夫？」
「だめ、もう一歩も動けない」
「じゃ、みんなで食べてくるから、安心して寝てて」
「そう、悪いわね」

空腹のママは、みんなの帰りを待っている。
「ただいまー」
「お帰りなさい」
「あー、おいしかった」
「ねえ、私に何か買ってきてくれた？」
「えっ？　そんなこと頼まれてないよ」
「あなた、私は腰が痛いから寝てるのよ」
「うん、だから食べてきたんじゃないか」
「離婚よ！　もう離婚！」

第六十一話「視力検査」

一年生の視力検査です。
保健室の先生はドキドキしています。
「いいですか、みんなは前を向きます。右目を隠して左目でどこが開いてるかで教えてね。右か左か上か下か」
「はーい」
一番の男の子。
アルファベットのCの形。
「さて、どこが開いてるかな」
「そこだよ」
必死で前に指を出す。
「うーん、右？　左？」
「だから、そこ！」
先生は諦めてUの形へ。
「これは？」
「そこだよ」
毎年のことだけど、そこって言われても。
ああ疲れるわ。

第六十二話「対話って」

就職情報誌を見る。
勉強？　わからない。
親の顔も見たくない。
中退して半年。
こんな同級生は結構いる。
今はみんな学歴を欲しがってる。
「辞めなければよかった」
楽しかったのは初めだけだ。
どこも高校中退を簡単に雇ってくれはしない。
最近、卒業した中学校へ行っている。
あれほど嫌いだった中学校へ、大人の話が聞きたくて。
「先生、今日も来た」
「こんにちは」
「ねえ、そのプリントやらせて」
「〇入れてあげる」
「先生、肩揉むわ」

第六十三話「長靴」

雨が降ると、ついつい水溜りに吸い寄せられちゃう。
ママが汚れるから入っちゃダメって言うけど、僕は水溜りが大好き。
新築した家が汚れるから、長靴には水を入れないでって言っても、そんなこと知らないもん。
ジャブジャブ、気持ちいいなあ。
こんな履くことができるバケツって、長靴を考えた人は頭がいいなあ。
もう家の前に着いちゃった。
「ただいまー」
「お帰りー。長靴は？」
「玄関前だよ」
「なぜ」
「家が汚れるから」
「あーあ」

第六十四話「イメージが大事！」

ピアノのお稽古に行く。
「楽譜持ってる？」
「うん」
「行ってらっしゃい」
「行ってきまーす」
ちょっと寄り道しようっと。
ピアノよりもドッジボールが好きなの。
ママが指を痛めるからしちゃダメっていうけど、あの逃げる時間がたまらない。
「早くやろうよ」
「ごめんねー、お待たせ」
戦うこと四試合。
泥まみれになって突き指もした。
「何、その格好」
「うん、戦いの曲のイメージトレーニング」
「嘘ばっかり！　背中にボールの跡がある」

第六十五話「風鈴」

風鈴を買った。
ガラスでできた可愛い風鈴。
チリチリンと素敵な音がするー

となるはずが、ここは台風銀座だ。
鳴る鳴る、やかましいほどに。
「もう、外せよ。うるさくて勉強にならないよ」
「お兄ちゃん、どうせ勉強してないでしょう」
「もう外して！　ご近所迷惑よ」
「お母さん、風流と言う言葉を知らないの」
「それなら、キャミソールで臍出してないで、ちょっと肌を隠したら」
「もう味方はお父さんだけね」
振り返ると、父の耳に耳栓。

第六十六話「避暑地」

暑いからスーパーに行く。
「奥さん、安いよ。太刀魚の干物」
「美味しそうね」
「三袋千円。一袋だと三五六円」
「味見させて」
確かに美味しい。これはつまみには最適だけどおかずにはならないわね。
隣の売り場では、ソーセージを焼いている。
「奥さん、二袋で三八〇円」
「美味しい？」
「まあ一口どうぞ」
美味しいわ。
すると、そこに試飲ビールのお薦め。
「今日は新発売のビールです。奥さん飲んでみて」
「そう？」
さあ、帰ろうかな。

第六十七話「暇な二人」

好き、嫌い、好き、嫌い。
「嫌いかあ」
花占いってインチキ。
偶数の花弁なら嫌いから始めればいいし、奇数なら好きから始めれば願いは叶うんだから。
「分かってるなら、しなきゃいいだろう」
「嫌よ。私のこと好き？」
「ああ、好きだよ」
「即答が怪しいわ」
「なんで」
「心がこもってない気がする」
「そんなことないよ」
「どのくらい好き？」
「1リットルぐらい」
「どうしてその単位なの？」
「ちょっと変えてみたくて」
私たち暇です。

第六十八話「好きだよ」（前書き）

ケータイで書いてます。

第六十八話「好きだよ」

パパ、最近機嫌が悪い。
僕がニッコリ笑いながら話しているのに、顔を見ないで返事をするの。
必ず聞き返すのは
「だから？」
そんなに言われたら、僕が答えも用意しないとダメでしょ。会話になんかならないよ。
前みたいに
「それで、どうなったんだい」
って聞いてよ。話の続きは聞きたくないの？
僕、自転車乗れるようになったよ。おでこの傷気がつかないの？
擦りむいて、お風呂でしみるって泣いたの聞いてなかったの？

パパ、好きだよ。

第六十九話「僕次第なの？」

学期末の漢字テストがある。
なんと、五十問。
合格ラインは八十点って、そんなあんまりじゃない？
僕なんて、毎日十問の小テストでさえ三十点なのに。
「先生、僕なら三十点が合格ラインにしてよ」
「これは一学期全体の力を見るんだから、お前もやるしかないよ」
「そんな、僕の力なんて知ってるでしょう？」
「よーく知ってるよ。でも、ＡとＢの差がぎりぎりの奴は救いたいの」
「僕は？」
「赤点なら俺の夏休みも消える。分かってるか」

第七十話「気持ち」

「お母さん、夜は何が食べたいですか」
「そうねえ、焼肉」
「焼肉ですか」
「うん、食べたい」
台所でため息が出る。
田舎から義母が来たのだけれど、もう四日目だとメニューも困る。
安い肉と言うわけにもいかない。
ＡＴＭでお金を引き出して買いに行く。
「ありがとう。もう今日帰るから」
「でも、お肉買ってきたから食べてください」
義母は五万円を握らせてこう言った。
「たまには贅沢しなさい。頑張りすぎないでね」
「お母さん……」

第七十一話「時間」

あいつが転校してきてから、誰も俺の方を見なくなった気がする。
何だか韓国のスターみたいに笑顔が多い奴だ。
勉強は普通だと思う。
だが、あいつは臆することなく質問するんだ。
「先生、そこはどうしてですか」
「分からないので、もう一度説明してください」
先生方は、今までかったるい授業をしていたくせに、この転校生の出現で百八十度変わった。
みんなも
「よかった。質問って大事ね」
「時間がすぐ経つ」
フン、俺は教室の時計だ。

第七十二話「そうなのか」

高級天ぷら屋に一人で行く。
カウンターで食べるのが最高だ。
今日は何を揚げてもらおう。
隣のカップルは、
「あなたが決めてー」
「お前の好きなものにしろよ」
「いいの？」
「いいとも」
さっきから一つ揚げてもらうたびに、べたべたして何だか面白くない。
年齢は俺より若いのに、もう高級天ぷらをご馳走するのか。
「今日は結婚記念日ね」
「ああ、こんなところ初めてだね」
うん？　そうか、結婚記念日か。
いい奴だな。
うちも妻と来よう。

第七十三話「歯医者」

「あーん」
「いつから、痛いんですか」
「一昨日から」
「何がしみるんですか」
「はちみつが好きで、パンにたっぷりつけたら悲鳴が上がるほどしみました」
「なるほど。この歯ですか」
カンカンと奥歯を器具で少し叩く。
「痛ーい」
思わず医師の手を握る。
「おっと、手を出したら危ないですよ」
「だって先生、痛いもの」
「でも、削り始めてから、隣の歯だったら困るでしょう」
「そうですけど、触らないで治してほしい」
「そんな無茶な」

第七十四話「今日の献立」

今日の献立は鰹のたたき、芋のツルと筍の煮物、椎茸と豆腐とやっこネギの吸い物、キュウリの酢の物。

「今日は残業だよ。部長と飲みに行かないと」

「そんな、腕を揮ったのに」

「ごめん、この埋め合わせはきっとするから」

「わかった」

電話を切った途端に、腹が立つやら悲しいやら。

「こんばんわ、二軒隣の夕食、突撃取材です！」

テレビで見るあの顔が、玄関口に現れた。

「奥さんすごいですねえ、この料理」

一気に気持ちが上向いた。

第七十五話「秘密の抽斗」

朝からハサミがなくて、夫の机の中を探すことにする。
抽斗を開けても、どうってことない便せんや封筒があるだけ。
ふと、鍵のかかる小さな抽斗を開けてみると、
「あったわ」
ハサミの隣に見知らぬ名前の印鑑一つ。
夫は蒲田幸雄。私の旧姓は森野。印鑑は三池。誰のだろう。
そこに三池史郎の通帳も。
一千万円ある。
親戚にも三池はいない。
誰の？
その夜、夫にふざけて囁いた。
「三池さん」
「何だい？」

最近、蒲田夫人を見たことがない。

第七十六話「電話です！」

「もしもし、こちらはもみじ銀行ですが、奥様でいらっしゃいますか」
「ママはここにいないよ」
しまった、三歳くらいだ。
「あのう、ちょっと、ママに代ってもらえますか」
「ママは今、お二階よ」
「あ、じゃ、電話だよって呼んでくれるかな」
「ちょっと待ってて。ママー、何してるの？」
違うだろ、だから、電話口に呼べって。
「着替えてるって」
あーあ。
「電話だよってママを呼んでよ」
「うん」
よし。
「ママ、電話がある」
違うって！

第七十七話「七夕」

七夕の日。
保育園では恒例の短冊を子どもたちに書いてもらった。
「さあ、何をお願いしたのかな」
「はい、僕はね、ミニカーを買ってもらうの」
「ふーん」
「私はね、犬が欲しいの」
「どんな犬？」
「テレビに出る可愛い犬」
「はい！　僕はパパの歯を入れてもらうの」
「パパ、歯をどうしたの？」
「ママにアッパーカットされたら歯が飛んだの」
「すごいね」
「パパね、気の毒なお姉さんにご馳走したんだって」
「へえ」
「ママは黙れって！」

第七十八話「お手伝い」

今日の宿題は家の手伝いだって。
「ママ、私に手伝ってほしいことはなあい？」
「そうねえ、アイロンは危ないし、じゃあ、自分の靴を洗って」
「わかった」
そうよ、上履きは自分で洗ってるし、学校へ履いていく運動靴だって洗えるわ。
この大きなブラシで洗うの。
洗剤をつけてゴシゴシと気持ちいいなあ。
そうだ、みんなの靴も洗ってあげよう。
「ママのはヒール、パパのは大きな黒い靴」
「な、なんてこと！」
「ほら、これでお仕舞い！」

第七十九話「秘め事」

ダブルベッドで寝るって、疲れるぅ。
相手が動くたびに目が覚める。
「動くな！」
怒鳴りたくなる。
新婚なんだからそんなことできない。
でも、めくるめくような感動だってそうあるもんじゃないし。
冬はそれでもよかった。
今は暑くて、触れるとそこだけ四十度は越える。
べたつくし、男は体温が高いのか。
冷え症の私には夫は冷たくていいみたいだけど、
「何をひっついとるんじゃー、離れろ、ぼけー」

自分の声で目が覚めた。
夫の目が点！

第八十話「将来は…」

耳障りな蚊の飛ぶ音。
ぐっすり寝ていても、蚊が飛ぶと目が覚めるのはなぜだろうか。
「やっと、寝かしたところなのに」
三ヶ月の息子は夜泣きをする。
おかげで私は睡眠不足。
ときどき、よしよしと言いながら息子を起こしたいのかというほど、揺さぶってる自分がいる。
蚊取り線香をつけて、お腹にバスタオルを掛ける。
ガーゼの短着がたまらなくかわいい。
モミジの手に軽く頬ずりをする。

「たらいまー！」
三十年後はこうなっちゃうの。

第八十一話「静寂」

先生が辞書引きの課題を出す。
僕はこの時間が好きだ。
単元が新しいところに入ると、必ず行う。
「用意はいい？」
「はい」
「では、三段落の氷解という言葉」
「先生、今は言葉を囲むだけですか」
「ええ、まずは課題をチェックしてからね」
「五段落のさえずり……」
「はい」

「…以上。では、ノートに書いてね」
返事をする間もなく、一斉に始まる。
頁をめくる音と鉛筆を走らせる音。
静かなのに緊張感がある。
先生一人が眠そうに見える。

第八十二話「効果は？」

「奥様、今ならもう一つお付けして一万円でお釣りが来ちゃいます」

テレビ通販が私を誘う。

その言葉につらされて、いろいろな商品がダブルで我が家に届く。

このクリームも、このアイロンも、このダイエット食品も。

夫がテレビを見ながら

「僕もこのウォーキングマシンが欲しいな」

「買っても使わないでしょう」

「君もだろう」

「ううん、私はクリーム使ってる」

「効果あるのか」

「ほら、お肌ツルツルよ」

「それはぷよぷよと言うんだ」

第八十三話「間違い」

靴箱前で待っている。
来た。
同級生の信田みき。
可愛いんだよなあ。
相合傘用に親父のでっかいのを持ってきた。
いつかこんな日が来ると信じていた。
予報で昼から雨って言うから、慌ててこの傘にしたんだ。
「あら、松井君」
「あ、信田さん、傘持ってる？」
「持ってないの」
「じゃ、一緒に入らない？」
「わあ、大きな傘」
「間違えて親父の持ってきちゃって」
ワイワイガヤガヤと野球部が来た。
「松井。傘でかいね、入れてくれ！」
違う！

第八十四話「禁煙」

煙草の煙が部屋中にこもる。
トントントン、大家が来た。
「困るよ。禁煙だよ。」
「はい、すみません」
「今時の女性は…」
「どうも」
「体に毒だよ」
「はい、分かりました」
「もっと自分の体を大切にしないと…」
大家のしつこさに腹が立ってきた。
一度言えば分かるのに。
しかも、声の響く廊下でわざと言うんだから。

後日、大家の家の前を通ると、奥さんの声が響き渡る。
「あなた！　部屋で吸わないで！」
「分かってるよ。もっと小声で」

第八十五話「本当は…」

小学校の見守り隊に、おじいちゃんが入った。
「並んで歩きなさい」
「そんな急に走ったら危ないよ」
「傘を振り廻しちゃダメだ」
「黄色い帽子はかぶらないと」
すると、二年生のかーくんが
「お前のじいちゃん、うるさすぎ！」
「そんなこと言ったって」
三年生の良太くんまで、
「あんな口うるさいのに、お前はよく平気でいるなあ」
「おじいちゃんは…」
「もう勝手に行こうぜ！」
僕も置いて行かれちゃった。
本当はターミネーターなのに！

第八十六話「頭痛」

昨日から頭が割れそうに痛い。
原因は分かってる。
あいつのせいよ。
いつもいつも頭ごなしに怒鳴る上司。
パワハラもいいとこ。
満員電車に揺られていると、上司がいた。
『もう、朝から嫌なもの見ちゃった』
女の人が叫ぶ。
「やめてください！　触らないで！」
上司の手を掴んでる。
「何を言うんだ！　濡れ衣だ！」
何人もに押さえられて、上司が連れていかれた。
あまりのことに言葉が出ない。
でも、不思議なことに頭痛がピタッと止んでいる。

第八十七話「布団」

子どもたちの寝汗で重い布団をベランダに干す。
「重いったらないわ」
夏の日差しに干された布団はふかふかだ。
その夜。
「母さん！　暑過ぎて寝れないよ」
「何が？」
「布団だよ、布団！」
「だって、汗をかいてるから」
「だからって、この暑いときに干さないでよ」

あんなこと言うんじゃなかった。
都会で日の当らない部屋に下宿した。
布団はジメッと重たい。
昔、僕の布団はいつもふかふかだった。
懐かしい太陽の匂い。
天国でも干してる？

第八十八話「七夕」

七月七日。
彦星は来るだろうか。
いつまで経っても変わらない愛を誓ったのはいいけれど、私としては退屈よ。
そこへイケメン星人。
「ねえねえ、織姫さん、僕の星雲に乗って行かない」
「えっ、私？」
「僕、銀河系三番地に帰る途中なんだ」
「でも、今日は年に一度の彼が来る日」
「年に一回じゃつまんないだろ」
「そうよね」
彼の星雲に乗ったわ。
めくるめく官能の嵐。
疲れて帰宅。

彦星が来る。
「可愛いな。あどけない寝姿」
初心な彦星。

第八十九話「アリエッティ」

急に大雨が降るんだもの。
折角の白のワンピースが、車が水溜りをはね上げて、汚れちゃったじゃない。
頭からびっしょり。
仕方がないから、ここの息子の朝顔の支柱に干したの。
赤い靴は綿棒を入れて乾かしてるわ。
母さんはご飯粒を叩いて、ナンにしてるわ。
そう、私はアリエッティよ。
今から紙飛行機に乗って、遊覧飛行してくるわ。
この家の息子は折り紙がとても上手なの。
母さんはコットンを入れて布団を作ってるわ。
雨も上がった！

第九十話「小さな親切」

玄関前にピアスが片方だけ落ちている。
マンションの住人のだろう。
「ただいま」
「お帰り」
「あら、今日は残業じゃなかったの」
「ああ、早く帰って来たよ。君の誕生日だろう」
「ありがとう」
二人でワインを飲み、酔った私は風呂に入る。
風呂にはキッチンとつながるインターホン。
オンになってる。
「おい、ダメだよ。電話をしちゃ！」

「困るよ」

「今日はまずいよ」

「愛してるのは君だけだ」

サスペンスのテーマソングを歌ってあげた。

第九十一話「はるみ」

「うーん、はるみ」
「えっ、はるみって誰よ」
思わず寝言をつぶやく夫を起こした。
「あなた、はるみって誰のこと？」
「何だよ、いい気持ちで寝ているのに」
「だって、はるみって寝言で言うんだもん」
「違うよ、晴海埠頭で商談していたんだよ」
「あら、ほんと？」
「当たり前だよ。夢の中でくらい商談成立させてよ」
「ごめんなさい。ゆっくり休んで」
「ちょっと、トイレ」
夫はドキドキしながら
「晴海埠頭なんて出まかせよく出たなあ」

第九十二話「いいとも！」

「あなた、今日はうなぎにしましたよ」
「いいね、夏バテ気味だし」
「ええ、精力をたっぷりつけてね」
「えっ、いや、ちょっと疲れているから」
「だから、蒲焼と山芋の短冊切りよ」
「ほ、ほう」
「それに、うなぎの肝吸いも作ったわ」
「そ、そうなんだ」
「ええ」
妻はにっこり笑うと、いそいそと風呂の準備をする。
何だか異様に疲れを感じる。
「パパ。宿題手伝って」
可愛い息子、僕の天使。
「ああ、遠慮するな。朝までだって手伝うよ」

第九十三話「いい題材ね」

パソコンで小説を書き続けていると、いつの間にか午前二時。
「明日の仕事に差し支えるわ。もう寝なきゃ」
横になって寝ようとするが、目がどんどん冴えて眠れそうにない。
「仕方ないわ。起きてようっと」
でも、ストーリーもさほど面白くもない。
書いたものを全て消す。
「ああ、もう嫌」
ごろんと横になっていると、ふと、メール受信の音。
「えっ、誰かしら」
『ダメだよ、そこで消しちゃ』
えっ、どこで見てるの？
「ねえ、その話頂戴」

第九十四話「計画的です」

今日はアサガオの観察、夏ドリルを四ページ、プールでバタ足の稽古もした。

「ママ、この計画で進むと、八月六日には全部終わるよ」

「それは感心ね」

「明日の天気も書いておこうかな」

「そうね、予報で晴れだって」

「絵日記だけど、一枚はプール、二枚目は回転ずし、三枚目は花火をすることにしてる」

「そう、いいね。パパに言って」

そこへパパが帰宅。

「ふーん、よかったって書いておけよ」

僕の人生も楽しかったって書いておくよ。

第九十五話「正論って」

こちらがガラス、衣装ケースはこっち。
不燃物回収の当番がやって来た。
午前六時から集積所に立って分別する。
そこへ外国の大学生が来た。
「これ貰っていいですか」
「はあ、いいんじゃないですか」
古いラジカセと自転車を欲しいと言う。
そこへ町内会長が現れる。
「ダメだよ。これは町内の資源ごみだから、持って行ってはダメ」
彼はがっくり肩を落とし、その場を離れた。
黙って持って行く人もいる中で、彼は尋ねたのに何だか哀しい。

第九十六話「虚しさ」

『ばか、かば、チンドン屋、お前の母さんでべそ、馬に蹴られて死んじまえ』

昔、喧嘩した子どもの定番の殺し文句でした。

今では圧倒的に無視が多いそうです。

私は現代の子どもの生活に不安を感じています。

パチパチパチ。

「素晴らしい講演でした。もう一度盛大な拍手を」

家に帰ると息子がゲームをしている。

「ただいま」

無言。

息子は顔も見ないで、

「明日金いる。二万」

「何のお金」

無言。

ＴＶで私の講演が流れる。

思わず耳を塞ぐ。

第九十七話「考え過ぎ」

「ダメ、絶対ダメ」
「そんなこと言うなよ」
「ダメなの。そこはダメ」
「じゃ、ここは」
「ダメよ。ものには順番があるでしょう」
「あそこもそこもダメじゃつまんないよ」
下で聞いていたお父さん、慌てて娘の部屋に飛び込む。
将棋盤をはさんだ娘と男友達。
「ダメって、そこは置けないの」
「知らないんだから仕方ないだろう」
肩で息するお父さん。
「あら、なあに？」
「いや、ちゃんと教えてるか」
「うん」
娘は二段の腕前。
紛らわしい。

第九十八話「定年退職」

「おはようございます」
隣の家の奥様とゴミステーションで会った。
奥様のご主人は定年退職されたばかり。
「いいですねえ、ご主人と毎日一緒で」
「何がいいのよ。どこへ行くにも付いて来るの」
「そうなんですか」
「仕事人間だったでしょう、友達もいなければ趣味もないから、鬱陶しいだけよ」
「あらまあ」
「だから主人の目を盗んで外へ出るの」
「へえ」
「ほら、あそこで探してる」
猫を抱いて佇むご主人。
うーん、うちも趣味作ろう。

第九十九話「通販が命」

三日前に注文したテレビ通販のショーツ十枚セット。
届いたわ。
待ちかねていたＬＬサイズの豪華レースショーツ十枚セット。
早速穿いてみる。
あら、レースがちぎれそう。
娘が横から、
「お母さん。小さいんじゃない？」
「えーっ、この上は３Ｌよ。そんなはずないわ」
「じゃ、測ってあげる」
「自分でやるから。貸して」
こっそり、息を止めて測る。
げ、九十六センチ。

「何してるの」
「ショーツ穿けるようにダイエット食品注文してるの」

第百話「姉思い」

夏休みの作文って、どうして宿題になるの。
うちなんかどこにも珍しいところへ行くわけではないし、学校のプールも指導員さんを雇ったりするお金がないからって、もう8月の盆が過ぎれば閉まっちゃうし。
「お父さん、どっか連れて行って」
「忙しいから休みなんかない！」
「じゃ、お母さん連れて行って」
「無理よ、内職してるし」
すると、4歳の弟が
「お姉ちゃん、僕が連れて行ってあげる」
「いい！　あんたを連れていくの私でしょ！」

第一〇一話「どこが弱い？」

母が貯金通帳を見ながらため息をついてる。
「どうしたの」
「模擬テストのお金が高いから」
「じゃ、僕は我慢するからお姉ちゃんだけ受けさせたらいいよ」
バコン！
「何だよ、頭叩くなよ」
「成績の悪いあなたが受けなきゃ」
「いいよ、遠慮する」
「何がいいのよ。赤点を取る人が受けなきゃダメよ。来週が三者面談なのに」
「あーあ、なんで、先生と親が弱い者いじめするんだろ」
「言葉が足りないわよ」
「なに？」
「頭が弱い者でしょ！」

第一〇二話「ペアなの」

花火大会に行こうと、彼と約束した。
「お母さん。浴衣着せて」
「無理よ、着たことないもん」
「えっ、そんなあ」
「おばあちゃんに頼みなさい」
あわてて、おばあちゃんのところへ行く。
「おばあちゃん、浴衣着せて」
「あのねえ、まだ、ごはん食べてないんだけど」
「さっき、食べたじゃん」
「いいえ、私は食べてません」
「あーん、もう。自分で着る」
あー、帯が。
待ち合わせに彼女、甚平姿で登場。
「お待たせ。貴方とペアにしたくて」

第一〇三話「ママー」

「行ってきまーす」
「暑いから帽子かぶって行きなさい」
「はーい」
「そうそう、脱水症になるといけないから、水筒も持って行きなさい」
「はーい」
「誰と遊ぶの」
「こうちゃん」
「そう、二人で汗かいた時のおしぼりも持って行ったら」
「ママ、荷物が重いよ」
「そんな、３４度もあるのよ」
「わかった。」
「何して遊ぶの」
「虫とり」
「網もカゴもいるわね」
「ママ、荷物減らしたい」
「ダメ」
「行って来る」
「元気ないわね。薬いる？」

第一〇四話「帰省」

母と久しぶりに海に行く。
「今日は穏やかな波ね」
「そうねえ。ニナが取れそう」
「ゆでると美味しいのよね」
「この辺りも貝が減ってね」
「母さん、父さんとはどこで知り合ったの」
「親が決めたのよ。あんな酔っ払い嫌だったわ」
「へえ」
「でも、最近は好々爺ね」
そこへ、孫を背負った父が来る。
「昼寝してる間に二人がいないって大泣きされたぞ」
息子は背中で泣き疲れて寝ている。
「父さん、おんぶ紐が似合ってる」
孫の足を握る父。

第一〇五話「重病説」

ママがブツブツとパパにこぼしている。
「だって、地獄耳なのよ！」
「仕方ないじゃないか」
「ちょっと電話で話していても、いつの間にかご近所知れ渡ってるのよ」
「まあ、そう言うなよ」
「あなたは仕事でいないからいいけど。私の身になってよ」
「分かったって」
ママ、そんな恐ろしい病気になったの？
地獄耳って、それ、耳がつり上がるの？
きっと大変なことなんだ。
おばあちゃんに知らせないと！
「フン、それは私がかかってるの！」

第一〇六話「すきやき」

今日は楽しいすきやきデー。
「ママ、お肉いっぱい入れてね」
「ママ、僕にはビールも冷やして」
「もちろん」
いい匂いがしてきたわ。
「はい、出来たわよ」
「うわー、こんなお肉見たことない」
「でしょう。今日は特別なのよ。パパ、ボーナスが出たでしょ」
「えっ、今年の夏はないよ」
「うっそー」
ママはお肉を半分取り出した。
「今日は半分だけ頂きましょ。後は野菜よ」
「えーっ」
ママはビールも片付けて発泡酒に。
暗い夕食となった。

第一〇七話「節約」

太刀魚のみりん干しをオーブントースターで二分焼く。
芋のツルを残っていたさつま揚げと一緒に麺つゆで煮る。
キュウリとミョウガで三杯酢。
後はあっさり冷奴。
「おーい、できたよ」
「明日は私が作るね」
「うん。ただし、二人で五百円だよ」
「難しいわね。これでいくら？」
「太刀魚が二九八円、芋のツルは百円、キュウリ一本四八円、ミョウガ三五円で四八一円」
「すごい！」
あと二万で出産費用ができる。
でも、予定日は明後日です。

第一〇八話「ネグレクト」

今日の給食は何だろう。
僕は給食が大好きだ。
弟は家にいるから給食もない。
僕は毎日パンをこっそり貰って帰る。
パンの嫌いな子がいつもくれるんだ。
「どうして、学校のパンなんか持って帰るの」
「弟がこのパン好きなんだ」
「ふーん」
本当は違う。
ママは二週間帰ってない。
弟はいつも腹を空かしている。
「僕も学校へ行きたい」
給食はチキンライスだった。
僕はそっと袋に入れた。
でも、暑さで傷んだチキンライス。

今、僕は一人です。

第一〇九話「写実派」

「ひとーつ、ふたーつ、みっつー…」
「ちゃんと三十まで数えるのよ」
「うん」
「今度はママが髪洗う番だから」
「ママ、この前の温泉みたいに富士山がうちにもあったらいいのに」
「そうね、お風呂の壁に描いてたわね」
「いいねえ、富士山」
そう、確かに昨日そう言ったわ。
だからと言って、昼寝の合間に描かなくてもいいでしょ。
我が家の風呂場の壁に青いマジックで。
でっかい富士山の絵と大きなママ。
しかも毛までくっきりはっきり。

第一一〇話「ぼやき」

今日は夏休みなのに、登校日だって。
こんなに暑いのに何で登校日なんて決めたんだよ。
行ったってほとんど欠席だよ。
この日は休んでも欠席扱いにならないし、クーラーの中にいたいよ。
高学年はプール洗いだし、かといってアイスをくれるわけじゃない。
本当にやってらんないよ。
「まあまあそう言わずに」
「ママは知らないんだよ。小学校って暑いんだぜ」
「仕方ないでしょ」
「あーあ。行ってくるよ」
「パパ、ビール冷やしておくから」

第一一一話「出会い」

ついったーを見ていたの。
いつも素敵な一言をつぶやくと思っていた人が、
「○の前でなう」
わおー、私も偶然同じところ。
ちらっと見たら、イケメンのサラリーマン風。
「私もです」
と、書きこんじゃった。
すると、彼が私の方を見て会釈するから、私も笑って返したの。
そう言えばついったーも素敵なイラストだったわ。
彼は私の前を通り過ぎて、後ろの女性に
「待った?」
えっ?
ぐるりと見回すと、あとはらくらくホン持った老人。
逃亡!

第一一二話「お客様」

私、航空会社のＣＡよ。
「皆さま、本日は…」
張り切って挨拶してるのに、おじい様がもう呼ぶのよ。
「はいお客様。どうされました」
「いやあ、薬を飲むからお水頂戴」
「はい、かしこまりました」
何で、乗ってから飲むのよ。
普通乗る前に飲むでしょ。
ピンポーン。
まただわ。
「はい、何か？」
「孫に手紙書くから絵ハガキ頂戴」
「はい」
何も今書かなくてもいいんじゃない？
ピンポーン。
「はい」
「呼んでみただけ」

くっそー！　やだやだ！

第一一三話「弱味」

どうしよう、ママの大事な花瓶を割ってしまったわ。
窓を開けようとして、手が当たってしまったの。
大切な花瓶。
でも驚いた。
こんなにも色とりどりなのね。
何がって、あれが。
この間からおかしいと思ってたの。
パパはいつも探してる。

バタン。

ママだ。
「あら」
「ごめんなさい」
「秘密よ」
「うん」
下でパパが泣きそうに
「もう返してくれよ。ルアーは僕の命だよ」
「羽根代で私たちに服買ってよ！」
「そんな」
「返せないわ」
パパ降参。

第一一四話「雀の涙」

今日は冷やしそうめんを作ろう。
仕送りで後二日何とかしなくちゃ。
おばあちゃんが送ってくれた食料品もそうめんと、庭先でとれたキュウリのみ。
冷蔵庫には卵が一つ、海苔もあったわ。
干しシイタケ二枚は水で戻して、甘辛く味付けする。
その汁で卵も焼いたら全てを細く切りましょ。
そうめんは二束用意し残りの三束は明日の分。
二分茹でたら水で洗って指でくるくる巻いて盛りつける。
「明日はにゅうめんにするわ」
残金八百円。
よし！

第一一五話「しーらない」

夏休みなんだから、プールへ連れて行けって朝からうるさい子どもたち。

「いいかい、必ずお父さんの言うことをきかないとダメだぞ」

「はーい、わかった」

「わかりまちた」

二歳と四歳の息子たち。

本当に分かってるのか。

「じゃ、あなたよろしくね」

妻は妊娠八カ月。

プールに着いた。

「おしっこに行ってこよう」

「ないもん」

「ない」

確かに家でしてきたが、心配だな。

水中で二人が座って身ぶるいした。

しまった!

ここは黙るしかない。

第一一六話「守って」

もう、完全に怒った！
一度だけならともかく、二度も三度も。
だからママが言ってるでしょ。
洋式トイレでも立ちションは禁止って！
酔った次の日はすぐわかるの！
きっとあちこちに飛んでるのよ。
マットにも、床にも。
匂うんだもの。
犬は人間より嗅覚が何千倍もなのよ。
私の身にもなってよ。
鼻が曲がりそうだわ。
「おーい、エリー、ドッグフードだよ」
分かってるわよ、言われなくっても。
三九八円の安いドッグフードだって。
「ワン！」

第一一七話「この暑さのせいで」

ホットケーキを作れって言うのよ。
そんなもの、この暑いのにやだって言ったの。
そしたら、愛してないんだなって。
ばっかじゃない？
そうよ、愛してないわって言ったわ。
だったら、出て行けって言うの。
ちょっと待ってよ、よく考えたら私の家じゃん。
暑さで脳がどうにかなっちゃったのよ。
すると、あいつったら、思い出したみたいで、自分がひもだってこと。
ばかねえって笑っちゃって。
えっ？　それから？
言えないわよ。
一緒にいるわ。

第一一八話「ママったら」

「ママがお話を読んであげる」
「僕が眠るまでだよ」
「わかってる」
「ママはそう言うけど寝ないでよ」
「大丈夫。今日はお昼寝もしたし、眠くないわ」
「ホント？」
「そうよ、じゃ、始めるわね」
「やったー」
「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがいました」
「うん」
「おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」
「うんうん」
「すると、川の向こうから、大きな桃がどんぶらこー…」
「ママ？　もう寝たの？」

第一一九話「お手伝い」

これはお父さんのパンツ、こっちは僕のパンツ。
でっかいなあ、お父さんのは。
僕の足が二本入っちゃうよ。
先生が家の手伝いをすることって、夏休みの宿題に出したんだ。
だから、僕は洗濯物をたたむことにしたの。
妹のシャツは小さくて可愛いなあ。
まだ、二歳なの。
僕は六歳だから、手伝いができるさ。
あっ、お母さんのパンツ。
ピンクのレースがいっぱいついてる。
綺麗だけど、いつ穿いてるのかな。
お風呂では一回も見たことないよ。

第一二〇話「幸せを運んで」

昔からスポーツ万能だった。
短距離でもバスケでも、誰よりもスピードがあった。
それなのに、なぜか、水泳だけはできなかった。
高学年になったらみんな泳げたけど、私は無理だった。
「お前、すごい顔で泳いでるぞ」
男子にそう言われてからは、水泳の時間は極力休んだ。
おかげで泳げないまま２７歳。
この度結婚して妊娠。
安産のためのマタニティスイミング。
浮いたわ。
軽々と。
水着を自慢することもできないけど。
やったぜ、ベビー！

第一二一話「故人を偲び」

部屋の模様替えをしようっと。
家具を動かして……。
「あら、なあに」
整理ダンスの後ろから出てきた封筒。
開けてみると十万円だわ。
聖徳太子の一万円札。
ここはおばあちゃんの部屋だった。
三回忌も過ぎて、中身は処分したけど家具まで除けてはみなかった。
「手伝おうか」
息子が来たけど
「大丈夫」
その夜、主人が帰って来て
「綺麗になったな」
「明日もやるわ！」

そうよ、一人で探したい。
今日だけで、十七万円だもん。
明日は納戸よ。

第一二二話「暑いから」

今日は地区の草刈りよ。
夫は接待ゴルフだと言って早朝から出かけた。
草刈りは午前七時半から一時間半の予定。
午前中にとっくに三四度を超えた。
汗にまみれてやっと終わる。
「ビールでも飲まないとやってられないわ」
すると、夫が帰宅。
「早いじゃないの。まだ、お昼よ」
「ああ、熱中症になりかかって、気持ちが悪い」
「あら、それは大変ね。早く横になって。うっぷ」
「お前も気持ちが悪いのか」
「うっぷ、そうなの。暑かったから」

第一二三話「先生、忘れないで」

明日はないんだ。
まだ日があるって手をつけなかった夏休みの宿題。
毎年のことだけど、なぜ絵を出すんだよ。
どうして、旅行も行ってないのに思い出の作文なんだよ。
しかも、休み明けに漢字のテストするからなって、そんなの無理！
活字を読まなかったと言ったらウソになるけど。
確かに読んださ。
吹きだしに書いてあるだけで、小説ではない漫画だ。
先生、貴方にも子どもの時代があったはず。
何で忘れるの？

「白戸君、立ってなさい！」

第一二四話「もういいの！」

ピアノの先生が怒るからいや。
なぜ、好きな指で弾いちゃいけないの。
「その運指だと、滑らかに弾けません！　いつになったら覚えるの！」
フン！
ママがいる時は
「あら、上手にできたわ。指はこうよ」
って優しいのに、ママがいないといつも叱られる。
だから、もうやめるって決めたの！
今日こそママに言うんだから。
「ただいま。ママ、私ね…」
「お帰りなさい。発表会のドレスを見に行くわよ」
「えっ？」
「何？　話って」
「もういいの！」

第一二五話「トランプ占い」

トランプ占いをしている。
「何やってるの？　母さん」
「トランプ」
「それは分かるけど、トランプの何？」
「占い」
「どうなればいいの？」
「単純よ、ババ抜きみたいに、隣や斜め、上下に同じ数が触れていたらその札は流せるの。こうやって最長横に5枚並べて、後は下へと置いていくだけ」
「ふーん」
「最後に全部なくなったらいいことあるって、それだけ」
「へえ」
この単調なトランプを見ている息子。
何かあったの？
今、少ししんどい？

第一二六話「髪型？」

一つも髪型が決まらない。
こんな日は外出したくない。
だって、髪型がいいと一日が朝から違う。
だのに、微妙なくせ毛。
これって、なかなか直らない。
朝シャンから始めてみよう。
「何やってるの！」
「だって、髪型が決まらないと仕事に行く気がしない」
「いい加減にしなさい！」
「だって、君だってそうだろう？」
「私と貴方では違う！」
「そんなの差別だ！」
「差別じゃない！　区別です」
「何で」
「坊主頭なんだから早く袈裟を着て！」

第一二七話「帰国子女」

今日は息子の幼稚園の保護者会。
主人と一緒に参加することが基本なの。
でも、主人は昨日飲み過ぎて二日酔いだから嫌だって言うの。
「そんなこと言ってたら、有名私立小学校へ入れないわ！」
「別にいいじゃん。普通の小学校で」
「ダメよダメ」
「僕なんか普通の小学校で楽しく過ごしたぜ」
「だから、普通の人になるんでしょ」
「悪かったね！　君だって…」
「違うわ！　私は帰国子女だから」
「どこ？」
「四国」
「そのレベルだってうちは」

第一二八話「王様の耳はロバの耳」

暇つぶしに書店に。
そう言えば、あの女性週刊誌の記事は本当かしら。
今朝載っていたわ、広告に大物俳優がついに結婚かって。
そこへ、サングラスを掛けた背の高い男性が来た。
週刊誌コーナーの同じ本を取る彼。
「え、あの俳優？」
彼はブツブツと
「違うんだって言ってるのに。また隠し撮りだ」
「違うんですか」
思わず聞いちゃった。
「僕は結婚しません」
「なぜ」
「離婚するんです」
ああ、誰かに言いたい。
梨本さん！　ネタがあるのに。

第一二九話「科学的裏付け」

僕の歯が抜けちゃった。
前歯が抜けちゃったから、よく噛めないよ。
ママは大きな口を開けて笑うし、パパはみそっ歯って冷やかすし、いやだ！
でも、学校のマリ先生は
「ビーバーのような大きな歯が生えてくるわよ。乳歯が抜けなかったら大変よ」
「そうなの？」
「そうよ、サメみたいに何重にも歯が生えたら、歯磨きで遅刻よ」
「そうだね先生。僕、今なら一分で済むもん」
「そうでしょう」
だから、マリ先生は好きさ。
話が科学的だから。

第一三〇話「父の声」

父の一七回忌に集まった。
「父さんのテープが出てきたのよ」
「えっ、どこから」
「押入れから」
「ちょっと聞いてみない」
「でも、何が入ってるのか、心配ねえ」
「母さん、知ってる？」
「知らないわよ」
電源を入れる。
「あっちゃん、傘持った？」
「いいの！」
「ちさちゃん、スカートが短いぞ」
「これ普通！」
「マー子、その目だけ化粧やめなさい」
「ほっといて！」
「母さん、僕の眼鏡は？」
「どっかにあるでしょ」
みんな泣けてきた。

第一三一話「愛犬」

さあ、ジャーキーを買ってきたよ。
鼻が泥まみれよ。
また、穴を掘ってるのね。
ほらほら、散歩はそんなに急がないのよ。
がつがつ食べて、げっぷばかりしてるなんてみっともないわよ。
宅配の人にも、知らない人にも誰にも吠えないのね。
あれ、目薬は嫌いなの？
でも、目薬の後にもらう御褒美は好きなのね。
だから、仕方なしに寄って来る可愛い子。

今日はそんなあなたを思い出してるのよ。
息子たちの話し相手だった老犬。
また会おうね。

第一三二話「存在感」

おかしいわね、確かにプリンを買ってきたのにないわ。
さては、子どもたちね。
いや、そんなはずないわ。だって、まだ学校から帰ってないもん。
ははーん、おばあちゃんね。
「おばあちゃん、ちょっといい？」
あら、留守なのね。
じゃ、誰？
心臓がどきどきしてきた。
二階に誰かいるみたい。
そっと上がって行く。
「誰！」
プリンを持ったパジャマ姿の夫。
「あら」
「何だよ、大声出すなよ」
「ごめんなさい」
風邪だったわね。
存在感薄くて。

第一三三話「天罰」

「あなた、ちょっと背中のファスナーとめて」
「ほいほい」
あれ、喰い込んじゃった。
「ちょっと、早くしてよ」
「いや、あの…、服が、ファスナーに」
「えっ、やだ、もう」
「だって、こんな薄い服のファスナーしたことないし」
すると、ますます布を絡ませていくファスナー。
ついに、ファスナーの金具の上下が全て開いた。
「どうすんのよ」
「僕の上着を」
「同窓会の行きと帰りに違う服？」
「そんな服着てくるからだよ」
「ああ、神様」

第一三四話「ため息」

あのね、おばあちゃんがね、お小遣いくれるって言うから期待したの。
そしたらね、紙のお金なの。
これって、ガチャガチャもジュースも買えないじゃん。
「いやだ、こんなの。コインがいいの」
「あら、まあ、欲の無い子だねえ」
すると、ママが横から
「いいの。コインと取り替えっこね」
取り上げたママがいつもは百円玉一つなのに、特別って二つくれたの。
「やったー！」
おばあちゃんはため息を一つ。
「そのコインが百個になるのに…」

第一三五話「一言ほしいわ」

今日は義母の誕生日。
プレゼントを持って、みんなでお祝いに出かける。
「お母様、お誕生日おめでとうございます」
「あら、覚えてくれていたの」
当たり前でしょ。あれだけ言われたら。
「おばあちゃま、おめでとう」
「まあ、うれしいわ」
子どもたちの花束と、私たち夫婦からはおしゃれな秋用のストールをプレゼントする。
「まあ、この暑いのにストールなの。ほほほ」
「でも、もう秋ですから。ほほほ」
ったくもう！　ありがとうでしょ！

第一三六話「現実」

これだから、順番守らない人はいやよ。
ラッシュになると、いつの間にか横から割り込んでくる人。
もう、どうしてそんなに押すのよ。
いやだわ。
汗べっとりで体を押し付けてくるなんて。
振り向いて思い切り睨んでやりたい。
あったまに来た。
ちょっと、お尻触った？
いやあね。
だから、許せないのよ、男って。
サッと振り向くと、
「おばあさん、この席どうぞ」
「えっ？」
「僕、もう降りますから遠慮しないで」
「私？」
「はあ」
ショック！

第一三七話「反省はないのか」

「早くしないと遅刻するよ」
「分かってる」
「じゃ、早くして」
「そう言ったって、さっきから髪型が決まらないんだから」
「もう、7時半」
「大丈夫17分で行けるから」
「あっ、時計が止まってる」
「えーっ！　本当は何時なの」
テレビをつけると、ズームインって。
「8時じゃん！」
母が飲んだ翌朝はいつもこうなる。
「だから、遅刻するって言ってるだろ！」
「そんなこと言ったって、たまには飲みたいんだもん」
僕は母に手を焼いてる！

第一三八話「忘却の彼方」

「頼むよ」
「いやよ、絶対にいや」
「そんなこと言わずに、一回だけだから」
「ダメよダメ、何度言われてもいや」
「何でだよ」
「ひどいわ」
「君だって前はいいって言ったじゃないか」
「絶対にいやだから、これ以上は話しあう余地はないわ」
「ああ、分かったよ。もう二度と頼まないよ」
そこへ一人の女性。
「いい加減にしたら？」
「だって、給食のゼリーは大好物なんだもん」
「前にくれるって言ったんだよ」
「忘れたもん！」
「ふん！」

第一三九話「別れの手紙」

『私は決めました。
もうこれ以上お会いしても、結婚することはあり得ないから、お別れします。
長い間優しくしてくれてありがとう。
今までにいただいた贈り物の数々は、私の宝物として大事にします』

「おい、何を書いてる」
「お別れの手紙です」
「誰に」
「誰って決まってるじゃないですか」
「誰だよ」
「先生です」
「何で担任にだよ。それより、早くテスト直して出せよ」
「これは贈り物として……」
「早く提出しろ！」
「無理ーっ！」

第一四〇話「どこの子？」

「もう、そんな子どもはママの子どもではありません！」
「そんなー」
「いつもこうなんだから」
「わーん、許してー」
「知りません！」
「わかった…」
ママは懲らしめたとにんまり。子ども部屋の外で聞いてみると
「お兄ちゃん、どうしたの」
「僕ね、ここの子どもじゃないんだ」
「えっ？　どこの子？」
「だって、僕だけハンサムでしょ」
「うん」
「パパは太ってるし、髪も薄いし…」

慌てたママの叫び声。
「昔はパパもカッコよかったの！」

第一四一話「話が分かる人は」

「あーした天気になあれ」
サンダルを飛ばそうと思い切り足を上げたらスカートがそこまで開かず、頭を打ったママ。
「ママ、大丈夫？」
「いたたた」
後頭部から出血。
四歳の息子は、ケータイで一一九番に電話。
「もしもし、救急車を一つお願い」
「どうしたんですか」
「ママが頭から血がタラタラ」
「どこで打ったの」
「地面にダーンって」
「大人はいませんか」
「おじいちゃんとおばあちゃんとパパと…」
「電話口には？」
「ママがいる」

第一四二話「紳士」

図書館通いの毎日。
定年後の楽しみはここへ通うことだ。
「いらっしゃいませ」
「やあどうも」
「新刊がたくさん入りましたよ」
「そうかい。じゃ、経済物を一つ」
「これはいかがでしょうか」
「いいねえ、この作家のは面白いから」
借りた本をここで読むのが好きだ。
司書も優しい。
でも、午前中で終了。
「もう帰って来たの？」
「ああ」
「図書館の方が涼しいでしょう」
「ああ」
だが、ステテコとクレープの下着姿が一番リラックスできる。

第一四三話「墓穴を掘る」

「おい、何掘ってるんだよ」
「叫ぶ穴よ！」
「はあ？」
「愚痴をこぼす相手もいないし、母さんじゃ心配するから、穴を掘ってるの！」
「僕に言えばいいじゃないか」
「いやよ、あなたは聞いてるようで聞いてくれないもん」
「だからって、そんなでっかい穴掘って。子どもが落ちるぞ」
「叫んだら埋める！」
「面倒な奴だな」
しかし、いつまでたっても入ってこない妻。
「おーい、どうした？」
「掘り過ぎて出られない」
「もう、ホントに！」

第一四四話「道具が大事」

サンマが食べたい。
「母さん、七輪借りるね」
「はいはい。練炭もあるわ」
「おう、ラッキー」
車に積んで我が家に戻る途中、スピード違反で捕まる。
「はい、二十キロオーバーね」
しかし、白バイ警官、足元に積んでる七輪や練炭を見て
「そ、それは」
「お金取られたらやっていけません。いっそ…」
泣いて見せる。
「そんな、早まってはいかん」
「でも、お金もないし」
「今回は見逃してやろう」
「う、う…」

さて、サンマの隣にサザエも。

第一四五話「子守唄」

お母さんの子守唄って友達が話していたけど、うちはないわねえ。
聞いてみよう。
「ねえ、お母さん、子守唄歌った？」
「もちろんよ」
「へえ、歌ってよ」
「♪一人で寝る時はよーー、膝っこぞうが寒かろうー」
「何それ」
「加藤登紀子よ」
「違う！　赤ちゃんを寝かすときよ」
「いいじゃないの、何を歌っても。私の十八番なんだから」
「あーあ」
「まだあった！」
「何よ？」
「♪にーげた女房にゃ、未練はなーいーがー」
「もう、知らない！」

第一四六話「本読みカード」

あのね、パパはお仕事で出張なの。
ママも夜勤の看護師さん。
弟と二人でお留守番なんだけど、宿題の本読みカードに書いてくれる人がいないの。
「ねえ、たっくん、お姉ちゃんがかさこじぞうを読むから、ここに書いてくれる」
「なんて？」
「上手に読みましたって」
「書けないよ、僕」
「じゃあ、読みましただけ書いて」
「わかった」
弟が書いてくれた。
でも、カードいっぱいに大きな字。
ひと月分のカードなのに…。
先生、弟四つだから。

第一四七話「性教育」

おばあちゃんと図書館に行く。
「僕、絵本を借りていくよ」
「はいはい」
僕はミッケとウォーリーとウルトラマンとことば図鑑と飛び出す絵本、これにしようっと。
「おばあちゃん、僕もう選んだよ」
「どれどれ、面白そうだねえ。これは何だい」
「ほら、人体の絵本」
「えっ、受精、妊娠、出産…これはまあ…飛びだすのね」
「うん、すごいねえ」
その夜、子どもが寝ると大人たちが興味津々。
「わっ、リアル」
「本当だ、立派だわねえ！」

第一四八話「参加者のみ」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

伊藤紘一先生が作って下さったのタイトルロゴです。

第一四八話「参加者のみ」

暑さも少し遠のいたから、庭仕事しましょ。
「ママ、僕も手伝うよ」
「さっき買ってきたお花を植えましょうね」
「うん」
その夜、綺麗になった庭を見て、パパ
「素敵な庭になったじゃないか」
「ええ、だから今日は野外レストランよ」
「わーい。僕も手伝ったんだよ」
「そうか、じゃ、僕も外でビールを」
「ダメ！　手伝った人だけご招待なの」
「そんなー」
「手伝わない人はお金がいるの」
「いくら？」
「バッグ一つ」
「ぼったくりだなー！」

第一四九話「苦労してるの」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

このタイトルロゴは伊藤紘一先生に作っていただきました。

第一四九話「苦労してるの」

「私痩せたみたいよ」
「何にもしてないのに？」
「失礼ね。やってるわよ。ダイエット食品も体脂肪計も買ったわ」
「まあ、買うだけなら」
「あら、テレビを見ながら体操もしてるし、昨日なんか米粒食べなかったわよ」
「何食べたの」
「朝はモーニングセットだからパン、昼は焼きそば、おやつにダイエットゼリー、夕食はあなたとお好み焼きにビールよ」
「それで痩せたの？」
「ええ、二〇〇グラム」
「今日はきっと増えてるよ」
「フン！」

第一五〇話「新婚よ」（前書き）

＞i11769―573＜

第一五〇話「新婚よ」

今朝は張り切って朝食を頑張ってみたの。
だって、新婚3カ月なんですもの。
茄子と油揚げの味噌汁、鮭の切り身も焼いて、キュウリとミョウガの酢の物、卵焼き、キャラブキの佃煮、海苔、どう美味しそうじゃないの。
「あなた、起きて」
「わあ、うまそうだなあ」
「そうでしょ」
「ああ、いただきます」
「幸せね」
「本当だね」
あなたのスーツにブラシをかけて、ついでに私のも。
お揃いのグレーの紳士服。
外では秘密ね。
「早く帰ってね」

第一五一話「母よ」（前書き）

>i11769—573<

第一五一話「母よ」

麻の黒のスカーフを首に巻いてサングラスをし、思い切り胸の開いたTシャツにGパンを脛まで折り返して、一体どうしたいの、母さん。

母は四三歳、スタイルはいいけど、やり過ぎのような気がする。

今日の三者面談にその格好で来るという。

「やめてよ！」

「なんで？」

「そんな派手な格好」

「いいじゃないの、成績だっていいわけないし」

「だからって」

「母がこんなだからこんな成績なのかって思わせたらいいの」

「おう、なるほど！」

第一五二話「お気になさらず」（前書き）

＞i11769―573＜

第一五二話「お気になさらず」

防虫剤が切れたみたい。
フン、私のを使えって、それ、どういうこと？
確かに四〇にもうすぐ手が届きそう。
今日は若い子の結婚パーティーに呼ばれてるの。
いくら包もうかしら。
私って、随分包んできたわよ。
この課のほとんどに包んだわ。
いつもらえるのよ。
こうやって退職されたら、もう会うこともないし。
損よ、損！
すると、花嫁のブライダルブーケが私の手に飛んできた。
みんなの視線は何だか気の毒そうに見える。
放っておいてよ！

第一五三話「時と場合」（前書き）

＞i11769―573＜

第一五三話「時と場合」

誰かが私の部屋の机を触ってる！
お母さんかしら？
お兄ちゃん？
やだー！　お父さん？
慌ててリビングへ怒鳴りこむ。
「誰が私の部屋に入ったの！」
「みんなよ！」
「勝手なことしないでよ！」
そんなこと知るかという感じで、みんなで何か探してる。
「何よ！　どうしたの？」
「連番で買った宝くじが一枚ないの！」
「えっ？」
「それ当たってるのよ！　百万円！」
「お兄ちゃんじゃなかったっけ？」
それっとばかりに突進。
プライバシー？
無い！！

第一五四話「意地悪」（前書き）

>i11769—573<

第一五四話「意地悪」

今日の給食は、僕の大好きなラーメンだよ。
パンもつくし、ゼリーもあるよ。
それに牛乳じゃなくて、今日はオレンジジュースなんだ。
そしたらね、隣の大ちゃんが今日は欠席。
ということは、一人分余るでしょう。
おかわりするの。
絶対にラーメンを取ってやる。
「いただきまーす」
「だーれ、この給食エプロン畳んでない子は」
「はーい、僕、後でやる」
「ダメ、今やりなさい！」
あーん、先生の意地悪。
やっぱりラーメン取られた。
ぐす。

第一五五話「お彼岸だ」（前書き）

＞i11769―573＜

第一五五話「お彼岸だ」

ママが来た。寝たふりしよう。
「あら、布団放って。涼しくなったから風邪ひくわ」
布団を掛けて、おでこにチュッて。
だから、ママ好き。
しばらくして、パパが来た。
「おい、何だよ。こんなに散らかして。片付けないと。でも、俺もそうだったな」
頭を撫でていく。
パパ好き。
ガチャ。
また来た。
ゲームの続きしたいのに、誰だよ。
「起きてる？」
誰の声？
「もう寝た？」
「その声はおじいちゃん？」
「天国は退屈で…。お供え食べるか？」

第一五六話「気をつけましょう」（前書き）

＞i11769―573＜

第一五六話「気をつけましょう」

渋谷に出かけた。
「はーい、どこへ行くの」
声を掛けてきたのは軽そうな男。
「ちょっと」
「ちょっとって、どこ？」
「どこでもいいでしょう」
「怒った顔も素敵だね。お茶しない？」
「しません！」
すると、男の声が変わった。
「ちっ、ブスのくせにお高くとまってやがら」
これで、何かが切れた。
「もう一度、言ってみやがれ！」
青ざめた男は棒立ち。
「いえ、何にも。失礼しました！」
「言葉に気をつけな！」
「はい！」
私、元男ですの。

第一五七話「嘘じゃない」（前書き）

＞i11769―573＜

第一五七話「嘘じゃない」

「もう一度だけ、私の言うことを聞いて」
「君は信用できない」
「ひどいわ」
「君は嘘ばかりついてきたじゃないか」
「そんなことないわ。真実を伝えてきたわ」
「お父さんの話もおばあちゃんのことだって違っていたよ」
「だけど、父の交通事故だってホントよ」
「それは自転車で転んだって話だろ」
「交通事故でしょ？」
「そうだけど」
「おばあちゃんは死んだって」
「ええ、五年前。真実よ」
「宿題をやらなくていい理由にはならない！」

第一五八話「これこれ」（前書き）

>i11769—573<

第一五八話「これこれ」

もうすぐお誕生日なんだ。
何をプレゼントしてくれるかなあ。
「ママ、僕のお誕生日もうすぐだよ」
「そうね、ケーキを買いましょうね」
うん、それは大事だ。
でも、他にも何か欲しいなあ、パパに言おう。
「パパ、僕のお誕生日もうすぐだよ」
「そうか、バッティングセンターに連れて行ってやろう」
そうだね、それも好きだけど。
「おじいちゃん、僕の誕生日もうすぐ」
「そうか、こっちへ来てごらん」
膝の上に抱っこしてくれた。
僕3歳！

第一五九話「報復」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一五九話「報復」

たっぷりの洗濯物をやってしまおうっと。
息子のポケットはよく調べないと。
ほらね、石ころがいっぱい。
パパのワイシャツの襟元がいつも汚れてるのよ。
あら、これ、口紅じゃない？
表側なら満員電車でというのも分かるけど、なぜ裏側に？
これって脱がないと付けられないわよね。
おかしいじゃないの。
そう言えば昨日はなんか変だったわ。
飲んで帰るって言う割には、酔っていなかったし。

この日から、パパは小遣いが一ケタ減りました。

第一六〇話「写実派」（前書き）

＞i11769―573＜

第一六〇話「写実派」

「何を作ってるの？」
「明日は運動会だからてるてる坊主だよ」
「それはいい考えね」
「ママも作ってよ」
「そうね、クレパス貸して」
「いいよ」
でも、凝り症のママは写実タッチで塗り始めた。
「洋服着せなきゃ。スーツにしようかな」
「ママ、サラリーマンなの？　そのてるてる坊主」
「そうね、ネクタイも」
「そんなの見たことない！」
「カッコいいでしょう？　髪も描こうっと！」
「それで首吊るの？」
その夜、パパはそれを見て青ざめた。

第一六一話「大奥」（前書き）

＞i11769―573＜

第一六一話「大奥」

「あら、殿様、今夜はこちらへ？」
「ああ、お主の顔が見たくてねえ」
「そんなお言葉嬉しゅうございます」
「こっちへお寄り」
「恥ずかしい」
「シュルルル」
パパびっくりして戸を開ける。
「何見てるんだ！」
「何も見てないよ」
手にはお人形が二つ。
ジェニーとダニエル。
「もっと可愛らしいままごとにはならないのか」
「えーっ、これが面白いのに。大奥ごっこ」
「誰に習ったんだ」
「そこのビデオ」
「えっ？」
「ママ！　置き場所変えて」

第一六二話「忘れてました」（前書き）

＞i11769―573＜

第一六二話「忘れてました」

うー、頭が痛い。
昨日の夜の会計をしたところまでは覚えてるけど、帰ってベッドに寝るまでが、すっぽり抜け落ちている。
ベッドから起きて、服を拾う。
カットソー、クロップドパンツ、ブラジャー、トランクス。
トランクス？　どういうこと？
ふと振り返ると、ジャーン、ベッドに男。
「だ、誰よ」
あわてて、服を着る。
なんてことでしょう。
えーと、よく思いださないと。
「この男は……あ、あなた」
そう久しぶりに赴任先から帰ったのね。

第一六三話「心も雨」（前書き）

>i11769—573<

第一六三話「心も雨」

大雨の中、ずぶぬれの私。
白いブラウスに紺のリボン、そして、チェックの襞スカートが悲しいほどに無残な姿。
昨日アイロンも掛けたのに、こんなに降ったら台無しじゃないの。
何より辛いのは、私の前を相合傘で帰るのはキャプテンと親友の姿。
玄関先で困っていたのに、隣の親友を誘ったキャプテン。
濡れているのは雨のせいだけじゃない。
困った顔で振り返った親友に、
「いいの、迎えが来るから」
誰が来るのよ、みんな仕事。
嘘つき。

第一六四話「ミサイル投下」（前書き）

＞i11769―573＜

第一六四話「ミサイル投下」

今日は彼のお母様に会う日。
私はピンクのワンピースに、白いパンプス、白いバッグとしっかりお嬢様ファッションに身を固めた。
いかにも初々しい感じだわ。
「これでよし」
外に出ると、大きな水たまり。
嫌な予感がしたの。
外車が水を思い切り散らした。
「ちょっとひどい！　こんなになっちゃったわよ！　どうしてくれるの！」
降りてきたのは、彼のお母様。
「あら、ごめんなさーい」
「いいんですのよ、お母様」
ふん、わざとね、戦闘開始！

第一六五話「デパ地下」（前書き）

＞i11769―573＜

第一六五話「デパ地下」

お昼にママとお出かけするの。
「ママ、今日はどこへ行くの」
「デパ地下よ」
「それなあに」
「ちょっとずつ食べることができるの」
「いっぱいじゃないの」
「ええ、ちょっとずつよ。いっぱいだとそれしか食べられないでしょ」
「楽しみだなあ」
やってきました、デパ地下。
「うわあ、すごい人だね」
「ええ、今日は地方の物産店もやってるから、ほら、お肉よ」
「ようじが刺さってるね。ママ、パパもいるよ」
「あら、弁当代要らないわね」

第一六六話「世渡り上手」

宿題まだやってない。
もう三日も続けてだから、先生の目がつり上がってきた。
別に先生になる気もないしな。
先生がいつも持ってるのは競馬新聞やった。
そこで始めた競馬の予想。
「先生、この馬がいいと父ちゃん言ってたよ」
「この第二レースは何て言ってた？　お前の父ちゃんの予想は当たる！」
「じゃあ、宿題せんでもえいか？」
「三日後のダービー教えてくれたら、一週間許しちゃるぞ」
ホントは鉛筆転がしてるだけやけど。
黙っとこ。

第一六七話「代役」

「おーい、開けてくれ」
知らない。
寝たふりしよう！
いい加減にしてよ、一週間毎日飲んで帰るなんて。
「おーい、寿司買って来たぞ。特上だぞ」
えっ、寿司？
「回る寿司じゃないぞ」
そんないいところで飲んでるの？
どこにあるのよ、そんなお金。
玄関をガラッと開けてみると、
「あ、奥さん。ご主人に頼まれて」
隣の御主人の後ろに隠れてる夫。
「俺が言っても開けてくれないだろ？　だから頼んじゃった」
くそーっ。
もちろん、寿司もない！

第一六八話「犬も食わない」（前書き）

＞i11769―573＜

第一六八話「犬も食わない」

旅先で喧嘩したパパとママ。
「ねえ、ママ、写真撮ろうって、パパが呼んでる」
「うん、ママはいいの」
「でも……」
一応、パパに言う。
「そう、ふくれっ面を撮っても仕方ないから、お前だけ撮ってあげよう」
「でも……」
仕方なく、ピースサイン。
「ねえ、仲直りしないの」
「ママが悪い」
「パパのバイキングのお皿こぼれそうだったから、ママがプチトマト食べただけだよ」
「あれラストだったのに」
パパ、ママが背中のホックしてって。

第一六九話「お迎え」

雨が降って来た。
「パパのお迎えに行ってくる」
「そう、ありがとう」
電車が着いた。
いっぱい人が降りてくる。
改札口で待ってたら、
「パパー、お帰りなさい。雨が降ってるよ」
「傘を持ってきてくれたのか」
「うん」
「それかい？」
「うん」
差し出された傘は、妹のキティちゃんの模様だ。
「ちょっと小さいな」
「僕のと替えっこしようか？」
「いや、お前のコナンの傘でも変わらないから、いいよ」
ママが窓から僕とパパを見て笑ってる。

第一七〇話「天使のいたずら」（前書き）

＞i11769―573＜

第一七〇話「天使のいたずら」

洗濯物を干してると、
「あら、やだ、ティッシュがあったのね」
鼻水を拭いたのでも入れてあったのか、おかげで、黒いTシャツやパパのソックスに白の模様ができている。
「もう、ポケットは空にしてって言ってるのに」
ふと、振り返ると、まだ一歳の娘がティッシュの箱から気持ちよさそうに取りだして遊んでる。
「あ、あなたね」
やっと歩き始めた娘は、椅子の上や靴の上にもティッシュのプレゼント。
その笑顔を見るとつい許しちゃう。

第一七一話「夜の帰り道」（前書き）

＞i11769―573＜

第一七一話「夜の帰り道」

誰かに追われている？
コツコツ、夜の帰り道は恐ろしい。
振り返るのも怖い。
両手にはたくさんの荷物だから、速く走れない。
それでも、早く帰りたい一心で走り出す。
すると、相手も速くなる。
もう、やだやだ。
ついてこないで。
階段を駆け上がると、相手も必死で上がって来る、
「いい加減にしてください！」
「あなたこそ、もうやめてください！」
「えっ？　何をですか」
「そのあなたの手にあるチラシを、毎日家に入れないでください！」

第一七二話「無口なお母様」（前書き）

＞i11769―573＜

第一七二話「無口なお母様」

「お母様、夕食何にしましょうか」
「……」
「何かおっしゃっていただかないと」
「……」
「また、おまかせでいいんですか」
「……」
「今日はお月さまも綺麗だから、つみれでもしましょうか」
「……」
「明日は確かお母様のお誕生日でしたわね」
「……」
「これで百七歳だったかしら」
「……」
「年金、明日入金でしたわね」
「……」
「また私が受け取ってきますね」
「……」

お母様が息をするのを忘れて二十年。
私がお世話をしてますの。

第一七三話「絵具は楽しいけれど」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一七三話「絵具は楽しいけれど」

絵具の青と赤を混ぜるとで紫になる。
黄色と青で緑になる。
初めての絵具は一年生。
「綺麗だねえ、先生」
「色は自分で作るのよ」
「はーい！」
「では、出来た色をたっぷり筆に含ませて、画用紙に置いてごらん。こうやって息を吹きかけて絵具を広げてみようね」
「ひゃー、すごいー！　テレビで見る神経みたい！」
「海の底のサンゴだ！」
「みんな違って面白い！」
楽しいけれど、後が大変なの。
「あーん、頭が痛い」
はい、酸欠の頭痛です。

第一七四話「天使」（前書き）

＞i11769―573＜

第一七四話「天使」

この子が生まれて四カ月。
なぜか夜泣きが始まった。
寝かせてくれない。
マンションなのに音が筒抜けの安普請。
ピンポーン。
「あのね、もう少し静かにしてくれないと、うちは受験生がいるのよ」
「すみません。何とかします」
彼は仕事と分かっているけど、毎日午前様。
もう無理。
「うわーん！」
始まった。
おっぱいも飲んだのに。
思わず顔にバスタオルを被せた。
あわてて除ける。
満面の笑顔で喜ぶ娘。
「楽しいの？」

神様もうしません。

第一七五話「男は黙って」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一七五話「男は黙って」

「パパ、今日はすぐに帰って来てね」
「ママ、何かあるの？」
「えっ、忘れてるの？　もう知らない！」
時間だから家を出てきたが、何の日か覚えてない。
通勤電車の中でも、隣の新聞を読みながら考える。
誕生日でも結婚記念日でもない、なんだっけ。
仕事中も気になって仕方ない。
結婚して四年、子どもも三歳。
「ふーっ、思い出せないなあ」
「何をブツブツ言ってるんだ？」
「あ、課長」
妻の話を伝えると、黙ってにんにくの錠剤をくれた。

第一七六話「正しい使い方」（前書き）

＞i11769―573＜

第一七六話「正しい使い方」

鉄棒でぶら下がってる一年生。
「ねえ、競争だよ。先に落ちたら負け」
「うん、用意、ドン」
キンコーンカンコーン。
「あ、チャイムだ。引き分けね」
「うん、続きは明日ね」
駆け足で帰る。
「おばあちゃん、その服除けて」
「そんなこと言っても、ハンガーいっぱいあるのに」
「早く、僕練習するんだから」
「何するの？」
「ぶら下がりっこ」
「あら」
そこへおじいちゃんがやって来た。
「そうだったな、これはぶら下がり健康器だったなあ」

第一七七話「井戸端会議」（前書き）

＞i11769―573＜

第一七七話「井戸端会議」

パリ、パリッ。
「このお煎餅割れてるけど美味しいわ」
「うん、割れ煎餅っていうので買ったのよ」
「いくら？」
「三九八〇円」
「えっ、どれぐらい？」
「この缶に入ってたの」
「ねえ、高くない？」
「えっ、そうかしら」
「だって、きれいな煎餅では売れないからまとめたんでしょう」
「うん」
「それを四千円って」
「そうねえ。高いかなあ」
その夜のこと。夫が
「ソックスに穴が開いたから買ってね」
煎餅一缶でソックスが四〇足も買える！

第一七八話「食欲の秋」（前書き）

>i11769—573<

第一七八話「食欲の秋」

体重計に乗り、メジャーを片手にため息をつくママ。
「ダメだわ」
「ママ、何がダメなの？」
「ちっとも効果が出ないのよ」
「何の効果？」
「ヨーグルトも食べてるでしょう？　アロエの入ったジュースも飲んでるわ」
「うん」
「それに、こんにゃくのラーメンも食べてるのよ」
「うん、本当によく食べてるよね」
「そうよ、ママは好き嫌いをしないで食べてるのよ」
「うん、すごいね」
「でも、痩せないの」
「それで痩せたらびっくりだよね！」

第一七九話「よかったわね」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一七九話「よかったわね」

駅の改札口でもたついているおばあさん。
「この券だとこうやって通せんぼするんです」
駅員さんが優しく
「ああこの券は読みとれないので、あちらで渡してください」
「えっ、読みとれないんですか。そんな難しいことを言ってるつもりはないのに」
「いや、そうではなくて。この機械が読みとれないので」
気の毒そうな目で、
「そうですか。でも、この不景気な時に仕事があってよかったわね」
ついに駅員さんも諦めた。
「はい、お陰様で」

第一八〇話「必死です」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一八〇話「必死です」

さて、定年退職してから始めたピアノの稽古。
「右手はおいておいて、左手がもうちょっと動くといいですね」
先生はそう話されて、私は左手の小指からドレミファソと弾いていく。
でも、左手の小指なんて普段使ったことないから、もうめちゃくちゃ肩がこる。
孫のピアノを借りてドレドレと弾いてると、
「おばあちゃん、ピアノを弾いてる時のお顔が怖いよ」
「へ？」
「お口がゆがんでる」
そう言われても、顔まで気にしてる余裕はないの。

第一八一話「3D」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八一話「３Ｄ」

シネコンで３Ｄを見ていると、おばあさんがブツブツと独り言。
「なんで眼鏡を掛けてるのにさらに眼鏡を渡すのよ。出来るわけないでしょ」
うーん、それはそうだなあ。
そのうちにため息をつきながら
「いやだねえ、眼鏡を作りなおさないと。物が二重に見えるよ」
それは３Ｄだからよと教えてあげたい！
すると、おばあさんは隣の人に、
「もしもし、何で映画館で眼鏡を掛けるんですか」
「それは３Ｄだから」
「じゃ、１Ｄは何を使うの？」

第一八二話「夕飯」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八二話「夕飯」

夕飯は何にしようかな。
これだけアラも身も入って二九八円だなんて。
スーパーの鮮魚売り場で天然ブリを見つけた。
「それなら、ブリ大根か。大根いくらかな」
大根半分で一〇五円、ちょっと高いけど仕方ない。
それと何にしようかな。
オクラが百円、酢の物だな。
あとは味噌汁にしようか。味が濃いからお吸い物のほうがいいか。
むきエビが残ってたからキュウリとエビとミョウガのお吸い物。
メールだ。
「今日飲み会」
じゃ、私は茶漬け。

第一八三話「ママが強いのは」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一八三話「ママが強いのは」

今月から、きついボディースーツを着ているの。
頑張って着るわけは、夏痩せせず食欲の秋に突入したから。
どのスカートも入らなくなってきた。
そこで登場したボディースーツ。
５歳の息子が物珍しそうに見ている。
「ママ、強くなりそうな服だね。横に針金入ってるよ」
「そうよ、これ着るとシャキッとするの」
「ふーん、僕にも針金入れて」
「あなたは太らないとダメよ」
「やだあ！」
「違うの、強くならないの」
「嘘だー！ママ強い！」

第一八四話「芸術の秋」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八四話「芸術の秋」

先生が書道セットを持って来いって言うから、僕は雨なのに持って行った。

僕の前のでんちゃんは、用意できてない。

彼の忘れ物は毎日のことで、今日だって持ってこない。

後ろを向いて、

「筆貸して」

「一本しかない」

「じゃ、先に貸して。すぐ書くから」

「嫌だよ。練習したいし」

「じゃ、終わってからでいいよ」

そう言われると断れない。

僕は真面目に八枚も書いた。

彼に筆を貸すと、さっと一枚だけ書いた。

その彼の習字が特選だって。

第一八五話「ママは選手？」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八五話「ママは選手？」

天気予報は晴れのち雨。
「たっくん、傘を持って行きなさい」
「大丈夫。僕、雨に濡れないように猛スピードで走るから」
「たっくんが速いのは良く知ってるけど、傘は持って行って！」
「行ってきまーす」
「たっくん！」
僕がかけっこ一番だったの、ママだって見たくせに。
傘なんていらない。
すると、ものすごい勢いでママが走って来た。
あっという間に捕まっちゃった。
「ママ、すごいね！」
「もちろん、パパの逃げ足より速いんだから」

第一八六話「将来の夢」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八六話「将来の夢」

手芸店に行って、刺繍セットを買ってきた。
「ママ、何をやってるの？」
「テーブルセンター作ってるの」
「ふーん、針でチクチクするの？」
「そうよ。危ないからまーくんは触っちゃダメよ」
「僕もやりたい」
「そうか、じゃ、このゴム通しに毛糸を入れてと」
「太いねえ」
「うん、子どもはこっちの針ね」
「わーい」
さて、もう使わない古い手編みのマフラーを渡すと、喜んで刺さしている。
「僕、大きくなったら洋服作る！」
待ってるわ！

第一八七話「小さな親切」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八七話「小さな親切」

誰も受け取ってくれない、ティッシュ配布のバイト。
段ボール二箱もあるのに。
「悪いけどお姉さん。そのティッシュ六つ頂戴」
突然目の前におばあさんがやって来た。
「はい、どうぞ」
ちょっと嬉しい。
本当は箱ごとやりたいぐらいだ。
深々と頭を下げられる。
さらに、一人の小学生が目の前で手を出す。
「いるの？」
「今日ハンカチとティッシュ持ってるか調べる日なの」
「じゃ、友達の分もあげる」
三つ渡すとニコッと笑った。

いい日だ。

第一八八話「用意周到」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八八話「用意周到」

台風が近づくというから、慌ててスーパーに行った。
カップ麺、ペットボトルの水、乾電池、お菓子、あっという間に大量に買った。
買ったものを食卓に並べてると息子が帰って来た。
「ママ、すごい買い物だね」
「台風が来るって言うから、用意しておかないとね」
「じゃ、僕も台風が来る前にやらないと」
そう言って息子が部屋に入ったまま出てこない。
「何やってるの？」
覗きに行ったら
「ゲームやっておかないと、停電しちゃう」
もう！

第一八九話「消えたい」（前書き）

＞i11769―573＜

第一八九話「消えたい」

葬式だから喪服を出してみた。
恐る恐るスカートを着てみると、やっぱりウエストが閉まらない。
前にもきつくてぎりぎりまで、鍵ホックを付け替えたのにまたもや太ったのだ。
買いに行く暇もお金もない。
上は何とかなるけど、スカートを穿かないわけにもいかないし。
えーと、黒いゴムでスカートが落ちないように留めて、肌をマジックで塗る。
いざ葬儀に出発。
「ママ」
「！」
スカートにまとわりつく息子の顔がタヌキに。
水性だったか。

第一九〇話「賢いわね」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九〇話「賢いわね」

今日は大運動会。
「かけっこ頑張ってね」
「ママは何等が欲しい？」
「一等はどう？」
「それはみんなが欲しがるからムリ」
それを聞いていた負けず嫌いのパパ。
「ダメだよ遠慮しちゃ、一等が欲しけりゃ取るしかない！」
「パパ、そんなにムキになってはダメって言ったよ」
「誰だ！　そんなことを言うのは」
「しんちゃんだよ」
そこでママが聞いた。
「しんちゃんは何等が欲しいの？」
「一等だって。この前、僕が勝ったらムキになるなって」

第一九一話「昔のこと」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九一話「昔のこと」

歯が生え始めた二男が、あちこちに歯形をつける。
「あ、痛ーい、おっぱい噛んじゃダメ！」
もう涙が出そう。
大体、よそのお子さんはそろそろおっぱい卒業だって言うのに、いつまでしゃぶってんの。
にんまり笑って、至福の表情。
憎めないわねえ。
すると、お兄ちゃんが帰って来た。
「ズルいよなあ。みっくんはそうやって一日中ダラダラ過ごせばいいんだから」
「あなたもそうだったのよ」
「そんな昔のこと言われても」
三年前なのに…。

第一九二話「真実って」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九二話「真実って」

「あれ、みんなきれいなパンツだね」
「まーくん、今日は身体検査よ」
「えっ、忘れてた」
ママが言ってたな。
『パンツを新しいのに着替えなさい』
でも、僕はこのゴムゆるゆるのパンツが好きなんだ。
ぴったりは嫌いなんだもん。
でも、ゆうちゃんも電子戦隊がカッコいいし。
さとしくんはトランクスだ。
僕のは、絵も消えかかってるドラえもん。
みんながダサいって言うんだ。

「そんな本当のことを言うもんじゃないわ！」
りかちゃん……。

第一九三話「幸運」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九三話「幸運」

「好き、嫌い、好き、嫌い……好き」
花占いだって好きで終わったし、テレビの星占いもよかったわ。
「おーい、待ってたよ」
「あら、八百屋のおじさん。こんにちは」
「きれいな大根だろう。確かこの前大根おろしの美味しいのが食べたいって言ってただろう」
「ええ」
「それにぴったりの大根さ」
「ありがとう。いくら？」
「今日は特別に出血大サービスで八十円だよ」
「安いわね。いただくわ」
「はいよ、毎度ありー」
いいことってこれ？

第一九四話「おばあちゃんったら！」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九四話「おばあちゃんったら！」

「おばあちゃん、僕のお誕生日だよ」
「おめでとうさん」
「そうじゃなくて、僕のお誕生日だってば」
「だから、おめでとう」
「違うって。何か忘れてない？」
「ああ、そうか。ハッピーバースデーツーユー…」
「歌はいいから、なんかもっと別の渡す物」
「はいはい、ごめんごめん」
やっと通じたよ。
「何これ？」
「だから、お誕生日だろ？」
「うん、でもこれって」
「六才になったら勉強始めるって言ったろ？」
「いやだー！　文字のドリル」

第一九五話「恋せよ乙女」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九五話「恋せよ乙女」

学校までの道のりを今日も自転車で行く。
「おーい、おはよう。一緒に行こうぜ」
「うん、おはよう」
二人で登校するのもあとわずか。
「県外で就職決まったんだってね」
「ああ、野球をやらせてくれる企業は本当に少ないからラッキーだったよ」
「ふうん」
「大学行くの？」
「受験は今年だけ」
「なぜ」
「お父さんがあと四年で定年だから。学費が……」
「俺がプロにスカウトされるのを待てよ」
「そうね」
でも待ってる。
いつか迎えに来て。

第一九六話「興味ありません」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九六話「興味ありません」

定年退職した夫が、
「おい、どこへ行くんだ」
「ちょっと買い物よ」
「俺も行く。暇だから」
妻はため息をつきながら、
『いつも一緒にいたいと思ったのは、結婚して一カ月だけだったわ』
夫はそんなことは気付かずに
「今日はあっちのスーパーへ行ってみよう」
「そんな遠くへ行かなくても」
「いや、暇だから」
「じゃ、あなただけで行って来て」
「それは行かされてるように思われるから嫌だ」
誰もあなたに興味持ってないから安心してよ。

第一九七話「放課後」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九七話「放課後」

ボールを片付けて、トンボをかけてグラウンドを整備する君。
もう残ってるのは君だけ。
私がさっきから絵筆をどれだけ時間かけて洗ってるか知ってる？
もう先に帰っちゃうよ。
監督に叱られてたね。
美術室にも聞こえてた。
「そんなチンタラした練習するな！　グラウンド十周走って来い！」
「はい！」
昨日、おばあちゃんの葬式だったの、監督知らないよね。
君は何にも弁解しない。

でも、そのスパイクおばあちゃんが買ってくれたんだよね。

第一九八話「嗅覚抜群です！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第一九八話「嗅覚抜群です！」

我が家の犬が、隣の家のバーベキューにやたらと反応して困る。
「あなたはもうドッグフード食べたでしょ！」
『うるさいワン！　あっちの肉がいいワン！』
ジュージューと肉汁がいい音をさせながら、匂いも運んでくる。
『ああ、隣の家の犬になりたかったワン！』
「お前ね、見てごらん。目の前で焼いてるのに、犬にはドッグフードだけよ」
隣の犬は平然としている。
確かにもらってない。
『可哀そうに鼻が悪いのだワン！』
「違うでしょ！」

第一九九話「スポーツの秋」（前書き）

＞i11769―573＜

第一九九話「スポーツの秋」

おじいちゃんがテニスに。
おばあちゃんは卓球で汗を流す。
パパはゴルフに行くよ。
僕はサッカーでキーパーだ。
弟はスイミングのテストだよ。
すごい、みんなスポーツをやってる。
でも、ママはスポーツしてないのに整体治療院に通ってる。
「ママ、運動不足じゃないの？」
「誰も家の掃除や洗濯を手伝わないからでしょう！」
そう言って叱られた。
でも、ママ、その疲れ目や肩こりはＤＶＤの見過ぎだと思うの。
怖いから誰も言わないけど。

第二〇〇話「バトル開始」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二〇〇話「バトル開始」

「ショートカットにしたんだね」
「うん」
「その髪もよく似合うよ」
「うん、ありがとう」
玄関の外で話す高校生の娘とボーイフレンド。
そこで、私も美容院に行くことを決めた。
その夜のこと。
「ただいま」
「お帰りなさい」
「なんだよ、入口に立って通せんぼするなよ」
「何か言うことあるでしょう」
「言うことって？」
「何かあるでしょう」
「えっ、あれは別にやましいことではなくて、つ、付き合いで…」
「えっ？」
第一ラウンド開始。

第二〇一話「指がたりない」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇一話「指がたりない」

「一つ、二つ、三つ」
「何を数えてるの」
「僕の年だよ」
「そんな数えるほどではないでしょ、あなたは三つなんだから」
「おばあちゃんは？」
「そんな数え方をしていたら、明日になっちゃうわ」
「えっ？　指、僕のも貸してあげるよ」
「ありがとう。でも、足も借りても足りないわ」
「えーっ、おばあちゃんすごいねえ」
「いや、それは……すごいかしら。あまり嬉しくないけど」
「うん、すごいよ。イカにも足を借りたらいいねえ」
あーあ。

第二〇二話「小さな親切　大きなお世話」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇二話「小さな親切　大きなお世話」

音楽会の当日。
「えーと、私たちの…」
「何やってるの？」
「忘れた。閉会の言葉」
「えーっ、だから練習しろって言ったでしょう」
「したもん」
「嘘です。テレビばっかり見てるから」
「いい！　もう書いたものを読むから」
「折角おじいちゃんもおばあちゃんも来るのよ」
「だから、もう読むって！」
「ああ、心配だわ。汚い字だと読めないわね。ママがパソコンで打つわ」

「……六年代表。園田まり」
「えっ？」
「やだ、ママの名前だった」

第二〇三話「良書とは」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇三話「良書とは」

本を買いに行きましょう。
子どもには良書を渡すのよ、そうすればいい子に育つわ。
かぐや姫、これは結婚しか考えないからダメよね。
白雪姫、鏡よ鏡なんてうわべだけの女ね。
うさぎとかめ、のろまなかめが素敵だなんて昔のドラマみたいね。
鶴の恩返し、これは無償の愛じゃないのよ、結局のところ。
桃太郎、人間の友だちができないなんて問題よ。
一寸法師、他力本願ね、打出の小槌がなかったらどうよ。
じゃ、何がいいか。
サザエさん！

第二〇四話「何とかなる！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二〇四話「何とかなる！」

お腹が空いたー。
でも、ごそごそ探しても冷蔵庫にも何もない。
親からの仕送りももうない。
就職活動のおかげで、バイトもできない。
小麦粉発見！
調味料はある。
何ができるって？
何にも入らないお好み焼きかあ。
キャベツも卵も入らない。
うーん。
貧しすぎだ。
だが、やってみよう。
水で溶いて焼けばソースで何とかなる。
ソースで生きれるんだな。
香ばしくていい匂いじゃないか。
もんじゃ焼きみたいなもんだ。
美味い！

明日はどうする？

第二〇五話「昔のこと」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇五話「昔のこと」

武家屋敷の角を曲がると、お城が見える。
その景色が一番好き。
お城を眺めながら歩く。
本丸まで上がって一息ついたら、子どもと一緒にスベリ山を下りていく
息子は走り回って、わざと転んで落ちていく。
昔、私もやったっけ。
「お母さん、一緒に寝転がって！」
「えーっ、まあいいか」
二人でゴロゴロ下りていく。
ストップしたらクローバーで冠作り。
「綺麗ね」
抱きしめる息子はミルクの匂いがした。

今、息子は煙草の匂いで近寄れない。

第二〇六話「はい、お母様」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇六話「はい、お母様」

「美子さん、敷居もたまには掃除してね」
「はい、お母様」
「ごはんはもう少し柔らかく炊いてね」
「はい、お母様」
「お風呂の残り湯を洗濯に使った後は、お玄関に水を打ってね」
「はい、お母様」
「お米のとぎ汁は、お庭の植木にやってね」
「はい、お母様」
「美子さん、私の眼鏡どこかしら」
「はい、お母様」
「？」

トントンと二階へ上がる姑。
「美子さん！」
襖を開けると、カセットデッキを足で操作し、マンガを読みふける美子の姿。

第二〇七話「ここにもいました！」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇七話「ここにもいました！」

朝からご機嫌な娘。
「タラリラ～」
「どうしたのよ？」
「今日はね、部長が出張でいないのよ～。会社が平和だわ、きっと」
「そんなに、部長って気難しいの」
「うーん、気難しくはない」
「じゃ、何よ」
「ギャグが寒いのにずっとしゃべり続けるし、テンションが高すぎなの」
「楽しそうじゃないの」
「いやなの！」
そこへ夫がやって来る。
「おー、皆さん、ご機嫌ルンバ」
「意味不明！　パパやめてよ」
我が家にもいたわ、部長そっくりの人。

第二〇八話「主役です」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇八話「主役です」

映画を観た後はいつも主人公になりきる僕。
今日はＳＰを観た。
気分は岡田准一。
後ろからバイクの音。
思わず隠れるところを探す。
武器になるのはケータイ一つ。
助かるだろうか、僕。
バイクはまず通り過ぎて行った。
きっと、僕の様子を確認したんだ。
戻って来るに違いない。
あのでかいヘルメットは顔を隠すためだ。
でも、戻ってこなかった。
ドキドキしながら家に着いた。
無茶苦茶疲れた。

次回はヤマトだ。
地球に帰れるだろうか、僕。

第二〇九話「おばあちゃんは正しい」（前書き）

＞i11769―573＜

第二〇九話「おばあちゃんは正しい」

おばあちゃんと散歩に出かける。
「まーくん、走ったら転ぶよ」
「平気だもん」
おばあちゃんはいつも僕に転ぶって注意する。
だけど、僕よりおばあちゃんの方が転ぶよ。
昨日もスーパーでタイムサービスってのが始まったら、おばあちゃんは僕を置いてったよ。
「おばあちゃん」
って叫ぶと、
「そこの椅子に座ってて！」
十分後、おばあちゃんは両手に野菜を持ってたけど鼻から血を出してたよ。
「大丈夫？」
「ほらね、走ると転ぶでしょう」

第二一〇話「目から星？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二一〇話「目から星？」

「ママ、流れ星だって」
「ええ、夜中に起きて観ましょうね」
「本当に起こしてよ」
「はいはい、指きりゲンマン」
その日の深夜。
パパがこっそり帰って来た。
僕とママがコートを着て玄関に立っていると
「どうしたんだ、二人とも」
慌てたパパ。
「ママ、別に悪いことなんか何もしてないから」
「ふーん」
「本当だよ。さっきの人は偶然タクシーに乗り合わせた人だから」
「えっ？」

「パパ、僕たち流れ星見るんだよ」
「へっ？」

バッシーン！

第二一一話「交通ルール」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一一話「交通ルール」

「二人乗りは禁止！」
注意しても真剣に聞かない子どもたち。

想い起こせば、私もあの頃は、後ろに乗せてもらっていたっけ。
映画に行くのも街に行くのもこれ。
キャーキャー言いながら、何台も連ねてみんなで遊びに行ったよね。
もちろん、キスも何もなかったけど、楽しかったあの頃。
風を切って走る自転車は、若者の特権だったわ。

時は過ぎ、校長になってもあの頃の思い出は懐かしい。
「ダメ！　早く降りなさい！」
今日も私は注意する。

第二二二話「眩しい光」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一二話「眩しい光」

沈下橋のところで、パンクした自転車を押して歩いていると
「おーい、どうした」
「パンクしちゃって」
どれどれと見てくれる彼。
「クラブはないの？」
「うん、今日は休み。監督がインフルエンザ」
「そう、私も先生のお子さんが風邪で休み」
「じゃあ一緒におばあちゃんの家に行かないか」
「何があるの」
「今日は法事だからおはぎ作ってくれるって」
私の自転車を彼が押して、私は彼の自転車を押す。
彼のシャツが眩しい。
この村が好き。

第二一三話「愛しい花」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一三話「愛しい花」

朝早くから、花壇にパンジーを植えている。
この歳になって、花がさほど好きでもなかったのに、急に愛しくなって植えだした。
一鉢八十円のパンジーは、黄色、紫、白、赤と色とりどりで美しい。
肥料をやり、優しく植えていく。
虫が来ないように、消石灰も少し撒いておこう。
水をかけてやると、ゆらゆらと花弁が揺れて可愛らしい。
「おーい」
「お父さんなあに」
「パンジーに注ぐ愛情の一かけらをわしにくれんかのう」
花には口がない。

第二一四話「ゲームっ子」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一四話「ゲームっ子」

「お天気になったから、散歩に行かない」
「行かない」
「ゲームばかりしていたら、おバカさんになるでしょう」
「ならないもん」
「もうちょっと体を動かしなさい」
「いいもん」
「いいことありません」
「外は寒いもん」
「男が何言ってるの」
「男も女も関係ないもん」
「そんなこと言ってたら、今日のおやつは抜きです」
「ひどいよ、おはぎを買ってるんでしょう」
「そうよ、十勝おはぎ」
「食べたい！」
「じゃ、おじいちゃん、片付けて」

第二一五話「このお弁当は」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一五話「このお弁当は」

今日は遠足だ！
ママが朝早くからお弁当を作ってくれたみたい。
楽しみだなあ。
やっと、公園に着いたぞ。
「さあ、では公園の遊具について言っておきます」
先生の話は長い。
「トイレに行く時は」
分かってるよ、一人じゃなくて誰かと行くんでしょ。
「さて、お待ちかねのお弁当タイムよ」
「わーい」
ワクワクしながら、蓋を開ける。
「あれ、どこかで見たな、これ」
ごはんの上に海苔、その上に魚のフライ。

「ママ、のり弁を入れ替えたの」

第二一六話「インクだらけ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一六話「インクだらけ」

プリンターのインクが切れた。
百円ショップで補充用インクというのを買った。
インクを取り出しテープで供給口をふさぐ。
「いやん、インクが付いた」
次はインク注入口が塞がれてるからシールを取る、はずが硬くて取れにくい。
おばさんは指先に力がないのだ。
やっと取って次に注入口の穴をあける。
これが開かない！
「うわっ、飛んだ」
周りが黄色の水玉模様に。
ボトルのキャップを外すと、指が黄色。
貼ったテープを外す……取れない。

第二一七話「いい加減にしましょう」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二一七話「いい加減にしましょう」

む、気持ちが悪い。
思い起こせば、昨夜、あれもこれもと冷蔵庫を片付けたわね。
豚肉が傷みそうだったから、クリームシチューを作っているにもかかわらず、ピーマンと炒めたわ。
キュウリもいつのまにか八本になってたから、酢の物も作ったし。
宅配生協が次々と届くから、こんなことになるのね。
節約するつもりが食べ過ぎよ。
しかも、買い物にも行かないから脂肪は増えるばかり。

あっ、コンビニへ買い物に行ったっけ。
チョコ買いに。

第二一八話「スリムです」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二一八話「スリムです」

あら、またおむつを外したの。
もう可愛いお尻なんだから。
最近、おまるに座らそうと四苦八苦してるのに。
そこにはしてくれずに、犬のように部屋のあちこちにマーキング。
「しー出ちゃった」
「そうみたいね」
雑巾片手に床を拭いてると、おむつを持ってきて拭いてる君。
「あーあ、それは」
「ちれいね」
「うーん、そうかなあ」
おむつは嫌というならば、身軽なパンツだけにする。
パパが呟く。
「お前はママと違って、スリムなお尻だな」

第二一九話「マット運動」（前書き）

＞i11769―573＜

第二一九話「マット運動」

天気のいい日は布団を干す。
この日なたの匂いが大好き。
でも、折角干してるそばから、子どもが布団ででんぐり返り。
「あーん、止して。干したのにペッタンコになっちゃうわ」
「ママ、やってごらんよ。気持ちいいよ」
「そんなことしません」
「あーっ、ママできないんでしょう」
「そんなことないわ。見てて」
ゴローン。
目が回る。
「どうしたの？　すごい地響きがしたけど」
階下からお母様の声。
「あ、転んじゃって」
嘘じゃないわよね。

第二二〇話「あの日の奇跡」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二〇話「あの日の奇跡」

彼女と久しぶりのデート。
新幹線で行き来する遠距離恋愛。
一日早いが家まで行ってやろう。
きっと、驚くに違いない。
マンションの五階。
ピンポーン。
「はーい」
ガチャッ。
「君は誰？」
「君こそ誰？」
男のパジャマ姿の後ろに彼女。
こんな光景を見たくて、一日早く来たんじゃないよ。
その日、駅の階段で若い女性が転んで僕の目の前に落ちてきた。
「大丈夫ですか」
彼女は歩けないようなので、僕がおんぶした。

その彼女、今僕の妻です。

第二三一話「お詳しいのね」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二一話「お詳しいのね」

「ああ、気持ちが悪い」
「どうしたの、先生」
「風邪をひいたみたい」
「大丈夫？」
こういう時に男子は優しい。
女子は近寄って来るなり、
「先生、昨日は飲みに行ったんじゃない」
「えっ？」
「二日酔いでしょ」
「なんでよ」
「だって、お母さんが二日酔いの時とおんなじだもん」
「あら」
「ちゃんぽんで飲んだでしょ」
「ちゃんぽんって？」
「ビールの次に日本酒とかワインとかごちゃまぜに飲むとそうなるの」
「ははは」
笑うしかないわ。

第二二二話「高枝切りバサミ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二二話「高枝切りバサミ」

ピンポーン。
「はーい」
「お届け物です」
やっと届いたわ、高枝切りバサミ。
「おい、何でそんなもの買ったんだよ」
「枝を切るためでしょう」
「うちには木なんかないじゃないか」
「あら、あれよ」
「あれは隣の柿の木だろ」
「だって、ちょうど我が家に向かって伸びてる枝に実が四つもなってるのよ」
「おい、それいくらで買ったんだ」
「八九八〇円よ」
「どんだけ高い柿の実なんだよ！」
「あら、やあね。来年も再来年も実はできるのよ」

第二二三話「リアルね」（前書き）

>i11769—573<

第二二三話「リアルね」

「ごめんください」
「はーい」
「○銀行です」
「さあ、どうぞ。ハイ二千万円」
「ありがとうございます。これどうぞ」
「何かな」
「ポケットティッシュとチョコレートです」
「どうもありがとう」
景気のいいままごとだ。
確かにチョコレートぐらいほしいわね。
「ママ、今度は僕が預ける人になるから」
「いいわよ」
「いくらにしようかな。一億万円にする」
「そんな単位はないのよ」
「じゃ、一万円にする！」
その金額だとうちと同じねえ。

第二二四話「この手が」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二四話「この手が」

イライラする軽トラ。
何で制限時速通りに走ってるんだよ。
午前六時半の田舎の県道だぜ。
初心者や高齢者マークもないのに、どんな奴が運転してるんだ！
この道は追い越し禁止なんだぜ。
七時までに届けないといけないんだから。
頼むよ、ホントに。
クラクション鳴らしてみるか。
『プップー』
うん？　止まった。
下りてきたのは坊主頭に刺青男。
「何か用かよ！」
ごくっ。
「いいえ、こ、この手が勝手に」
ペチッと左手で右手を叩いて見せる。

第二二五話「指揮者」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二五話「指揮者」

子どもの幼稚園の発表会。
三歳なのに演奏曲がヤマトだって。
うちの子は確か鍵盤ハーモニカ。
「パパ、可愛いわね。アップで撮ってね」
「おー」
指揮の先生が登場する。
指揮台の前が息子。
先生のスカートに隠れて見えない。
「ちょっと、どいてほしいわね」
「仕方ないだろ」
「でも……」
すると、先生のスカートをめくってピースサインする息子。
会場はどっと笑い声に包まれる。
とってもかわいいのだけど。
先生の指揮棒が異様に触れる。

第二二六話「代引きって」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二六話「代引きって」

お隣がまた何か買ったのね。
いつもいつも宅配便は隣に来る。
窓から眺めていると、うちの前にも車は止まったみたい。
ピンポーン。
「はーい」
ドアを開けると、
「お荷物ですが代引きです」
「えっ、何でしょうか」
「英語の教材です」
「注文した覚えがないけど」
「では、受け取りませんか？」
「ええ」
「時々あるんですよ、勝手に送りつける会社」
「ひょっとして隣も？」
「ええ、何でもおばあちゃんが受け取ってしまうって怒ってました」

第二二七話「お受験」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二七話「お受験」

「名前を呼ばれたらはいって返事するのよ」
「うん」
「うんじゃないでしょ」
「うん」
「だから…」
「はい」
「そう、分かった？」
「うん」
「もう、ようへいくん！」
「それ、誰？」
「だから、練習よ練習！」
「こうじくん、ゆうとくん……ぎんしろうくん、ぎんしろうくん！」
「はい」
「ねえ、キリリと言ってくれない」
「無理」
「ママの名前を呼んでみて」
「なんで」
「いいから」
「よしこさん」
「はいっ！　わかった？」
「うん」
「あーあ」

第二二八話「買うのが趣味」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二八話「買うのが趣味」

白いテーブルセンターに刺繍で模様をつけるの。
このキット、四千八百円よ。
あっ、そうだ、毛糸もこの前買っておいたわ。
膝掛けも作って渡せば喜ぶわね。
そうそう、同じ毛糸で肩掛けもいいじゃない。
トータルファッションよ。
買って来なくちゃ。
「美子さん、どこ行くの？」
「手芸店です。お母様」
「あのね、買うのもいいけど、作り上げてから買えば？」
「あら、どうして」
「その毛糸は二年前、テーブルセンターは去年買ったでしょ」

第二二九話「お絵かきタイム」（前書き）

＞i11769―573＜

第二二九話「お絵かきタイム」

「これなんだと思う？」
「そうねえ」
画用紙には大きな丸と三角の耳。
真ん中にはまた丸がある。
「豚さんかな？」
「違うよ」
「ふーん」
「うん、ここには髪も生えてるの」
「あ、人なのね」
先生は冷や汗が。
「ねえ、みっくん、今の話は冗談だからね」
「何が冗談なの？　豚って言ったこと？」
「豚じゃなくてムタさんって言ったの」
「だあれ？」
「先生のパパよ」
ホッとする間もなく、
「あ、ママだ。ママー、先生のパパに似てるんだって！」

第二三〇話「不言実行」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三〇話「不言実行」

掃除タイムになった。
僕の大嫌いな時間だ。
何で掃除なんかしないといけないの？
聞けば都会の子は掃除タイムがないって言うじゃないか！
埃まみれになる教室に子どもを押し込めていいのか！
しかも、あの雑巾は牛乳をこぼした時の匂いがこびりついてるんだぞ！
冷たいバケツの中で洗ってみろ！
凍えて鼻水まで出るんだから。
思い机を運んで中身がダーッて出ると泣きたくなるぞ！
時には椅子が小指に落ちるんだから！

「早く掃除しなさい」

第二三一話「他意はないわ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三一話「他意はないわ」

「新聞回収に参りました～」
「あー、お願いしまーす」
トラックから下りてきたのは岡田准一そっくりの若者じゃん。
「ありがとうございます」
律儀にきちっと礼もする若者。
可愛ーい！
もっと何かあったわ。
「ボロ布もいいかしら」
「有料になりますがいいですか？」
「ええ、いいわ。ちょっと待ってて」
慌てて夫の着れなくなった衣類を袋へ入れる。
「コレお願い」
「八百円です」
「明日も来て」
「えっ？」
毎日少しずつ出すことにしたの。

第二三二話「恐るべし」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三二話「恐るべし」

「ワンワン」
「ねえ、いつになったら私を覚えてくれるの？」
「ワンワン」
「あのねえ、私は隣の奥さんなの」
「ワンワン」
「あなたの餌係じゃないのよ」
「ワンワン」
「そんなに吠えられても何も出ないの」
「ワンワン」
「困るのよ、私がいじめてるように思われるから」
「ワンワン」
「そんなにむやみに吠えちゃダメなの」
「ワンワン」
「匂いで分かるんじゃないの？　普通は」
「ワンワン」
「賢くないね」
「……」
「えっ？　気づいてるの？」

第二三三話「一緒です！」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三三話「一緒です！」

「あなた、お正月に福袋買いたいな」
「ああ、いいよ。でもごった返すんじゃないか」
「ううん、だから、予約していい？」
「じゃ、僕のも一つ買ってよ」
「オーケー」
早速パソコンで検索。
わあ、これ安い。
コートに毛皮のマフラー、手袋、ブーツ、バッグで三万よ。
えーと、メンズはいいのないかな。
「あったわ」
中綿コートにウールのマフラー、毛糸の手袋、ソックス、ウエストポーチで五千円。
「あるかい」
「ええ、私と中身が同じよ」

第二三四話「修学旅行」（前書き）

>i11769―573<

第二三四話「修学旅行」

明日からお兄ちゃんが修学旅行。
スキーに行って、その後ディズニーランドだって。
小遣いも二万円だって。
大体、修学旅行って勉強じゃないのか。
僕はこの前、中学校の修学旅行で行ったのが広島への平和学習。
なのに、高校生がスキーにディズニーランドって。
しかも往復飛行機だって。
貸切バスとえらい違いだな。
「お土産買って来てよ」
「わかった。餞別は？」
「なんだよ、僕にはなかったぞ」
「平和学習にはいらないだろう」
くそっ。

第二三五話「現実逃避」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三五話「現実逃避」

お洒落をして出かける。
イケメン美容師のお出迎えだ。
「こんにちは。カラーとカットをお願いね」
「いつもの色でいいですか」
「ええ、いつもの通りね」
「眉毛カットとお顔のマッサージはどうなさいますか」
「それもお願い。髪のトリートメントもね」
「畏まりました」
ここへは月に一度、いえ、四十日に一度来るの。

「かゆいところはございませんか」
「強さはこのぐらいでいかがですか」

二時間半で、しめて一万五千円也。
安い？　高い？

第二三六話「母から子へ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三六話「母から子へ」

母さんと紙風船を折り紙で作ったなあ。
「ねえ、コレいっぱい作ったらミカンみたいね」
「ミカンなら、ここに葉っぱを描いてみようか」
「うん」
「ブツブツも描いてみたら」
「これを紫で作ったら葡萄に見えるね」
「そうね、赤ならリンゴ」
楽しかった母さんとの折り紙。

あれから二十年。
私も三歳の娘と折り紙をしています。
「ママ、二つ作ったら雪だるまになるよ」
「そうね、目や鼻を描いてみようか」
親から子へと伝わる温もりの文化。

第二三七話「紛らわしい」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三七話「紛らわしい」

朝の室温が八度って寒過ぎる。
でも、ここでエアコン入れると電気代がまた高くなる。
大学に行くには体を温めて化粧しないと。
あーあ、電気敷き毛布から体が離れない。
起きたらお腹も減って来るしね。
あと二千円しかない。
お米が少し残ってたけど、仕送りは三日後。
カップ麺も残り一個。
トントンとノックの音。
集金に払うお金はない。
シーン。
「書留です」
「はーい！」
ガチャッ。
「ガス代払って下さい」
「ズルイ」
「名前が柿富です」

第二三八話「気付かなかったわ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二三八話「気付かなかったわ」

こんないい天気の日は布団を干しましょう。
「ママ、僕も干すよ」
「あら、手伝ってくれるの？」
「うん」
「ちょっと待って」
「なに？」
「そのお尻、濡れてるじゃないの」
バタバタと走るママ。
「あらー、おねしょしたのね」
「ちょっとだけ」
「ちょっとじゃないでしょ。この大きな地図。お風呂で体も洗いなさい」
シーツを外し、布団を干す。
洗濯機がフル回転。
もうママにゆとりはない。
「ママ、見て！」
手には椿の花。
庭に咲いたのね。

第二三九話「植物ではないよ」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二三九話「植物ではないよ」

おじいちゃんと僕はお散歩に行くよ。
「ねえ、あの木はなあに？」
「あれはサザンカだよ」
「お花がきれいね」
「ああ、そうだね」
「こっちはなあに？」
「それはツバキだよ」
「似てるねえ」
「ああ、ツバキの方がもっと赤いね」
おじいちゃんと歩いてると何でも教えてくれる。
すると、綺麗なお姉さんが近寄って来た。
「今度近所に小料理の店を開くのでよろしく」
おじいちゃんはニコニコしてティッシュを受け取る。
「あれは高嶺の花だよ」

第二四〇話「現実ならいいのに」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二四〇話「現実ならいいのに」

「ママ、もうすぐお誕生日だね」
「そうよ」
「何が欲しい？」
「そうね」
「車？　洋服？　指輪？　何でも言ってよ」
「あら、嬉しい、その三つと家もね」
「いいよ」
大きなカレンダーの裏にお絵かきしてくれる息子。
指輪も牛が鼻にするようなでっかいのを描いてくれてる。
「ねえ、この家はどうして丸いの？」
「ママ、これはね、ドームだよ」
「ふーん、広いのはいいけどお風呂ある？」
「じゃ、真ん中に描いとく」
「恥ずかしいからカーテンも」

第二四一話「どっちの家系？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二四一話「どっちの家系？」

「お母様、ちょっと期末懇談に行って参ります」
「あら、うちはみんなよくできたから大丈夫と思うわ」
どういう意味？
小学校の廊下はなぜこんなにも寒いのかしら。
「お待たせしました」
「いえいえ」
やっと始まる。
先生はにこやかに話す。
「足し算でソックス脱ぐのはちょっと」
「は？」
「指が足りないって」
「あ、どうも」
「この前は隣の人の指も借りてました」
穴があったら入りたい。
通知表は中の下。
誰に似たの。
きっとお母様だわ。

第二四二話「さあ行こう！」（前書き）

＞i11769―573＜

第二四二話「さあ行こう！」

台所の電球が切れた。
「おばあちゃん、新しい電球買いに行く？」
「そうだね」
「僕も行く」
「お菓子は一つだけよ」
「うん！」
電球売り場で選ぶのが二分。
お菓子を選ぶのが十分。
「もう、これにしたら？」
「これも買って」
「約束は一つでしょう」
「うーん、じゃ、これ」
さて、新しい電球を入れるがうまくはまらない。
四苦八苦してると、孫の目が輝いてきた。
「ねえ、おばあちゃん、また、電球買いに行くの？」
「お前もまた行く気？」

第二四三話「心がけてます」（前書き）

＞i11769―573＜

第二四三話「心がけてます」

毎日、寝不足だわ。
ここのところ、仕事が残業続き。
外食もいい加減飽きてきた。
昼はコンビニ、夜は近くのファミリーレストラン。
そうよ、朝ぐらい作ったらどうなの。
分かってるけど、食べるより寝ていたい。
おかげで、会社の近くのファーストフードへ。
ついに三食全てが人の手作りになってしまった。
そう手作りよね、手作り。
手作りであることに変わりはないわ。
結婚紹介所の履歴書に書いておこう。
「食事は手作りを心がけてます」

第二四四話「その薬ください！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二四四話「その薬ください！」

パンジーがしおれてしまった。
消石灰を土と混ぜ合わせ、慌てて栄養剤を買いに走る。
安かったからいけないのか、いろいろ考える。
とりあえず栄養剤を水に溶かしてジョロで注ぐ。

週に三回与えていると、十日目から色とりどりの花を咲かせだした。

「ほら、よく効いたわ。綺麗な花が咲いたわ」
「いいなあ、十日だろう？　すぐ効いて」
「は？」
むむむ、そういう息子は大学受験に三回失敗している後の無い浪人。
「僕にもその栄養剤頂戴！」

第二四五話「サンタは大変」（前書き）

＞i11769―573＜

第二四五話「サンタは大変」

「サンタさんに欲しいものを書いたよ」
「パパに見せてらっしゃい」
「うん」
パパが青い顔をしてやって来た。
「ママ、欲しいものが変わってる」
「えっ？」
「たっくん、この前は戦隊物が欲しいって言ってたよね」
「うん、でもねえ、今はやっぱり宇宙戦艦ヤマトがいい！」
「もうサンタさんは出発しちゃったんじゃないか」
「大丈夫だよ、サンタさんは子どもの気持ちが分かるって」
パパはこっそり実家に。
「ねえ、僕のヤマトまだある？」

第二四六話「神への感謝」（前書き）

＞i11769―573＜

第二四六話「神への感謝」

始発電車に乗る。
家へ帰りたくない。
世の中はクリスマスイブだと騒いでいた。
そう、だから、夜中までには帰って来てと言われていた。
だが、部長は離婚し一人ぼっちが寂しいと帰りたがらないから、一緒に付き合った。
どうも部長はミニスカサンタと消えたらしい。
僕はネットカフェで目が覚めた。
怖い。
そっと鍵を開ける。
「パパ、お帰り。サンタがこれ持ってきてくれた」
パジャマ姿の息子が玄関で抱きついて来る。
神様、感謝します。

第二四七話「誓います」（前書き）

＞i11769―573＜

第二四七話「誓います」

朝から廊下のガラス拭き。
大晦日までには終わらせたい。
すると、近所の奥様からメールが来る。
「お茶しない」
「するする」
幼稚園の迎えまでわいわいと楽しく過ごす。
送迎バスの停留所で出逢ったママ友と、子どもを連れて我が家でおやつタイム。
あっという間に夕方になってる。
「ただいま」
「お帰りなさい」
夫は廊下に置かれたバケツを見る。
「寒いのにガラス拭きか」
「そうなの、まだ終わらないの」
「ご苦労さん」
明日はやります。

第二四八話「帰りたい」（前書き）

＞i11769―573＜

第二四八話「帰りたい」

就職活動していても、年末年始は流石に面接もない。
でも、帰る金もない。
ケータイが鳴る。
「母さん。なあに」
「あなた、お金あるの？」
「うん、生活はできるけど旅費が……」
「じゃ、送るから」
「悪いわ、今月スーツ代も送ってもらったのに」
「でも、おじいちゃんたちも会いたがってるし、遠慮しないで帰っておいでよ」
「うん、ありがとう」
電話を切ると、家族の顔が浮かんでくる。
高校時代は家を離れることしか考えなかったのに。

第二四九話「これは大事」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二四九話「これは大事」

「美子さん、この押入れの物を整理してちょうだい」
「はい、お母様」
たくさんの引き出物や葬式のお返しなどを整理することになった。
「バザーに出してもいいですか」
「どうぞ、出せるようなものあるかしら」
まずは定番のバスタオル。
これは出そう。
使わないような小皿五枚。
これも出そう。
入浴剤セット。
浴槽が汚れるから要らない。
洗剤、これは置いておこう。
安いシーツは要らない。
奥にマンガ？
目が点。
「このＢＬ、お母様の？」

第二五〇話「知ってます」（前書き）

＞i11769―573＜

第二五〇話「知ってます」

さて、いい天気だわ。
ベッドから出ない息子。
「幼稚園に行く時間よ」
「ちょっと、お腹が痛い」
「あら、昨日はのどが痛かったのよね」
「うん」
「でも、今日はクリスマスケーキをくれるんだって。休むの？　残念ね」
「えっ？　そうなの？」
「いいわ、ママだけが行ってお隣のさくらちゃんにあげてくる」
「どうして？」
「お腹が痛いんでしょう？　食べられないじゃない」
シャキッと制服に着替える息子。
「大丈夫、治ったみたい」
知ってます。

第二五一話「早とちり」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二五一話「早とちり」

「今日のデートコースは温泉だ」
そんな、どうしよう。
勝負下着じゃないのに。
こんなことなら、高級レースのを買っておくべきだった。
今日は寒いからババシャツに、毛玉のついたレギンス、肌色ショーツ、スポーツブラよ。
「楽しいよ、絶対に」
「あの、今日はちょっと」
「えっ？　嫌なの？」
そうだ。
「女の子の日なの」
赤面する彼。
「あ、僕、何も分かってなくて…」
よかった。
「スーパー銭湯って楽しそうだから」
「えっ？」
しまった！

第二五二話「僕が息子だから」（前書き）

＞i11769―573＜

第二五二話「僕が息子だから」

「ねえ、ママ、おじいちゃんとおばちゃんがお年玉を別々にくれたよ」
「あら、そう」
「パパとママは二人で一つなのにね」
「そうよ、だから、それは一つはママにあげてってことよ」
「そんなことないよ」
「ううん。きっとそうだと思うの」
「やっぱり」
「何がやっぱりなの？」
「おばあちゃんに言われたの。ママがきっと欲しがるわよって」
すると、パパが傍からこう言った。
「だから、それはおばあちゃんの息子であるパパにってことさ」

第二五三話「初詣には」（前書き）

＞i11769―573＜

第二五三話「初詣には」

「お母様、あけましておめでとうございます」
「はい、おめでとう。ところで、美子さん」
「はい？」
「この着物着ないかしら」
「あら、きれい。どうなさったんですか」
「もう派手になったから、あなた着ない？」
「わあ、ありがとうございます」
「早速着せてあげるわ」
薄いピンクの訪問着に、金糸の袋帯。
「あら、よく似合うわ」
「お母様は何をお召しに？」
すると、十分後。
「お母様、それシャネルのスーツ？」
「ええ」
そっちがいい！

第二五四話「始業式の前には」（前書き）

>i11769—573<

第二五四話「始業式の前には」

「ママ、始業式には雑巾がいるよ」
「二枚でいいかしら」
「ちょっと待って、通知表にハンコも押してって書いてる」
すると、ママが思い出したようにこう言いだした。
「そうそう、算数が悪かったのよね、毎日ドリルやるはずだったわね」
「やったよ」
「嘘ばっかり、大晦日からやってないわよ」
「うーん、忙しかったから」
「あなたは忙しくないでしょ」
「だって、お掃除手伝ったよ」
あーあ、通知表のことなんて言うんじゃなかったなあ。

第二五五話「何でこうなるの？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二五五話「何でこうなるの？」

お年玉を数えていたら、お兄ちゃんが外出先から帰って来た。
「お前はいくら貰った？　俺全部で三万円」
「何で違うのさ」
「いやあ、友達のお父さんがくれちゃってね」
「えーっ、いいなあ。わかった、僕も集金に行ってくる」
親友のケンちゃんの家へ直行する。
「こんにちは」
「助かった」
「何だよ」
「二千円貸して」
「何でだよ」
「親友だろ、俺たち」
「ま、まあな」
「親父がクビでついに電気止められた」
「仕方ない」
来なきゃよかった。

第二五六話「祝えない」（前書き）

＞i11769―573＜

第二五六話「祝えない」

正月に成人式開催。
みんなと久しぶりに会った。
楽しくてお酒も浴びるほど飲んだ。
大いに盛り上がって、三次会まで行った。
幼馴染の彼がカッコよくなってるし、意気投合しちゃったの。
目が覚めたらホテルの一室。
「どうしよう、着物が着られない」
「えっ、どうにかならないの」
「無理よ」
二人ではどうにもならない。
「何て言おうかしら」
「気持ち悪くなって脱がせたことにしようか」
タクシーで帰る。

門松の隣に仁王立ちの母がいる。

第二五七話「豚汁」（前書き）

＞i11769―573＜

第二五七話「豚汁」

今日は豚汁を作ろう。
ごぼうはささがきにして、大根は短冊に切る。
油揚げが美味しいのよ。
豚肉は安いのでいいの。
本当は里芋を入れたいけど、夫が嫌いだからエノキを入れる。
砂糖をひと匙、お酒も少し入れると隠し味になっていい。
味噌も入れてじっくり煮込む。
部屋にいい匂いがこもる。
鍋のふたを開けると眼鏡が曇る。
「ただいま」
匂いにつられて台所にやって来る夫。
「おー、豚汁だ」
「私の贅肉入れてます」
「俺のも入れてくれ」

第二五八話「特訓」（前書き）

＞i11769―573＜

第二五八話「特訓」

三月から幼稚園に入園が決まった。
ママが急に何でも一人でやれって言う。
「もう一人で制服に着替えなきゃ」
「まだ、幼稚園の制服は着ないよ」
「ダメダメ、お稽古しなきゃ」
ブラウスに五つもボタンがある。
ボタンをはめていると、なぜか口からよだれも出る。
必死になると口が開くんだ。
「ふー、やっとできた」
「じゃ、これ」
「空っぽだよ、お弁当箱」
「違うわよ、包んでみて」
「やだ」
「ダメよ、やらなきゃ」
「ボク毎日パンにする」

第二五九話「昆布茶」（前書き）

>i11769—573<

第二五九話「昆布茶」

頭が痛い。
昨日から熱も出てる。
忙しいから会社は休めない。
流感だと迷惑がかかる。
社に連絡して病院に行く。
先生がニコッと笑っておめでたですと言う。
めでたくないという表情が出たのだろうか。
「産まない選択肢があるの？」
「私、別れたばかりなんです」
彼に新しい彼女ができたと告げられたのだ。
書類を受け取り会社に向かう。
いつもは気難しい主任が昆布茶を入れてくれた。
「温まるよ」
涙がこぼれそうになる。
優しい人なんだ。

第二六〇話「お手伝い」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六〇話「お手伝い」

退職になり暇を持て余している夫に、買い物を頼んだ。
鼻歌で帰ってきた夫。
「タイムサービスで安かったよ」
袋から取り出したのはカブ。
「あなた、頼んだのは大根よ」
「仕方ないよ。それしか残ってないんだもの。その代わり半額だぞ」
「ダメよ。寄せ鍋始めてるのに」
「いいじゃないか、それだって親戚だよ。美味いよ」
「私は大根おろしが欲しいの」
不器用な夫は意地でおろし金を使う。
「いたたた」
妻は一言。
「何もしなくていいわ」

第二六一話「お手本」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六一話「お手本」

なわとびを息子に特訓する。
「大きく肩から手を回さないの」
「こうしないと縄が回らないよ」
「ママを見てて」
颯爽と跳ぶつもりだったが、二十回がやっとだった。
肩で息をしながら思わず座りこむ。
「ママ、何だかしんどそうだね」
「ふーっ、そうね、久しぶりだから」
「先生はピョンピョン跳ぶよ」
「ママも跳んだでしょ？」
「ううん、ママのは怖いような音がしたよ」
「そんなにビュンビュン跳んだ？」
「ううん、ズシンズシンって！」

第二六二話「祝ってもらっても」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六二話「祝ってもらっても」

成人式に帰って来たけれど、四人いた幼馴染はみんな帰れなかった。
たった一人で祝ってもらうのは気が引ける。
お祝いの言葉を村長から聞く。
誓いの言葉も俺が言うしかない。
たった一人ということでテレビも来た。
背広を親に買ってもらった。
ネクタイを締めて、昨日から練習した新成人の言葉を述べる。
フラッシュの中、祝いの品も受け取る。
「おめでとうございます」
「ありがとうございます」
家に帰る。
「村長が親父なんてやだよ！」

第二六三話「異動」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六三話「異動」

雨が降り出した。
傘をさして私を抱き寄せる。
「濡れるからもっとこっちへおいで」
「でも」
「いいから」
彼は優しい。
でも、既婚者。
単身赴任も今日で終わり。
明日からは地元に帰るって。
連れて行ってほしいと、何度言おうとしたことか。
「明日は何時の飛行機」
「最終便」
「そう」
「もう会えなくなるね」

堪え切れない涙が頬を伝うはずだった。

昨日聞いた。

彼には五人の子どもがいるって。

最後に一言言わせてね。

「いい加減にしろ！」

第二六四話「教室にて」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六四話「教室にて」

光が射すからまぶしい。
「ねえ、カーテン閉めて」
「やだよ、寒いから」
こいつ、いつもこうなんだ。
「あなたはそうでも、私はまぶしくて黒板が見にくいの」
「いいんだよ、黒板なんかどうでも」
「よくないわよ」
すると、先生がじろっと見て私に質問する。
「あ、あの」
答えられないでいると、あいつが答えを教えてくれる。
くっそー。
聞いてたら私が答えられたわよ。
何で借りができちゃうのよ。
昼休み。
「卵焼きをくれ！」
もう、やだ！

第二六五話「お茶会」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六五話「お茶会」

今日は初釜ですから、お母様は訪問着を着てお出かけです。
「美子さん、では、行ってきます」
「はい、行ってらっしゃい。本当によくお似合いですこと」
「あら、そうかしら。ちょっと高かったのよ」
「分かります。特にその帯が素敵」
「そう？　この袋帯はいずれはあなたのものよ」
「あら、嬉しいです」
「じゃ、行ってきます」
玄関で見送ると、早速友だちに電話する。
「今から三時間は留守よ」
さてと、新春ホームお茶パーティー開始よ。

第二六六話「教えて！」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六六話「教えて！」

「おい、ちょっと見せて」
「ダメ、自分で考えてよ」
「この漢字だけでいいから」
「ダメ」
「あと一つで五十点なんだから」
「ダメ」
「わかった。今日のカレーパン買うから」
「ホント？」
「ああ、ダッシュで買う！」
「何番？」
「八番」
「落第」
「くさかんむりにさんずい、それから各」
「書くって？　何を」
「だから名前の名に似てるの」
「分かんないよ、名前は耕太郎」
「違う！」
先生が来た。
「ハハハ、カンニングも難しいだろ。諦めろ」

第二六七話「忘れ物」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六七話「忘れ物」

お母様とデパートのバーゲンセールに行った。
「お母様、福袋がまだ残ってます」
「美子さん、売れ残りなんて縁起が悪いわ」
でも、あのブランドは滅多に安くしないのに。
こっそり買ってこよう。
「私、ちょっとお手洗いへ」
「はいはい」
お母様は貴金属売り場へ。
私は福袋をゲット。
「お母様、お待たせしました」
すると店内放送が聞こえた。
「貴金属売り場で福袋をお買い求めの奥様、傘をお忘れです」

「お母様、傘がありませんことよ」

第二六八話「主役級」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六八話「主役級」

ママとパパが幼稚園の発表会に来た。
「いいわね、一番前でビデオを撮ってるから」
「うん、僕は白雪姫の近くだよ」
「わかったわ。がんばってね」
「うん」
舞台が始まった。
「パパ、白雪姫の近くだから七人の小人のどれかよ」
「わかった」
「どの小人役かな。みんな違うみたいだけど」
「よく見て。それとも王子様かしら」
「いや、違うよ」
「えっ、じゃあ、魔法使いのおばあさんかしら」
「違うな。あっ、いた」
木がピースサインしてる。

第二六九話「天気占い」（前書き）

＞i11769―573＜

第二六九話「天気占い」

息子が靴をポーンと放りあげた。
「明日は晴れだ」
「ホントね。じゃ、ママもやってみようっと」
ポーン。
しまった。
隣の家の庭に入っちゃった。
「こらー！」
「すみません」
「あ、奥さんか」
「申し訳ありません」
すると、息子が説明を始めた。
「天気占いをしてたの。僕は晴れだけど、ママのはおじさんの家に入っちゃって。ねえ、ママの靴は晴れ？　雨？」

「盆栽の梅に見事にかぶさってるから雨だね」
ヒクヒクしながらおじさんは答えた。

第二七〇話「やめられません」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七〇話「やめられません」

ピンポーン。
「はーい」
「通販のお届けものです」
「ありがとう」
今日の箱は軽いわね。
確かＢＢクリームよ。
二個を買えば三個付いて来るの。
そこへお母様登場。
「あら、美子さん、今度は何を買ったの」
「お母様にもと思って、韓国のＢＢクリーム」
「あら嬉しい」
「この色いいですね」
「韓国の女優さん綺麗よね」
「お母様、あのミストの美顔器も気持ちよさそう」
テレビを見ながら呟くお母様。
「年金が入ったから、今度は私が買うわ」

第二七一話「いい子だな」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七一話「いい子だな」

寒い教室で二人きり。
数学ができない中二の彼と話す。
「なあ、九九をしっかり覚えてないんじゃないか」
「うん、かもね」
「それができてないから分数だって約分、通分ができないんだな、へーっくしょん」
思わずでかいくしゃみが出る。
「かったるいなあ」
「そう言わずにやろうよ」
「俺、約束あるし、もう帰るわ」
「分かった。明日からやろう」
「暇ならね」
「暇を作ってくれよ」
彼は立ちあがると一言。
「風邪ひくなよ」
優しい子だな。

第二七二話「そうじゃないでしょ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七二話「そうじゃないでしょ」

ノートを綺麗に書いてるの。
誰に聞いても、こんなノートは見たことないって。
でも、なぜか成績に結び付かないの。
「君はノートが美しいから」
世界史の先生はそう言ってBの評価はくれる。
でも、テストはあんまりできないからAにはならない。
例の有名大生のノートという本より綺麗なのよ。
「なぜ？」
すると、友だちはこう言うの。
「カラーペンを使いすぎよ。どこが大切かわかんないよ」
「わかった」
売店に走る。
「可愛い付箋頂戴」

第二七三話「似ているわ」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七三話「似ているわ」

今日は粘土の人形ブローチを作るのよ。
受講料二千円。
「まずは体の部分を作ります」
角の無い三角形でワンピース部分を作る。
あとは頭と手足。
「足は内股にすると可愛いですよ」
なるほど。
「髪の毛はクリンクリンと楊枝を使ってカールを入れてね」
はいはい。
「靴はバレーシューズのように」
確かに可愛い。
「顔は鼻と口だけ。前髪で目は隠れます」
確かに同じ言葉なのに、出来上がった人形は肥満体からモデルまで。
作り手に似るのね。

第二七四話「一字違い」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七四話「一字違い」

待ち合わせの駅に着いた。
彼はまだ来ない。
珍しく十分も前に来ちゃった。
だって、今日は演劇を観に行くんだもん。
彼がチケット取れたからって。
何を見るかは聞いてないけど。
おしゃれなワンピースにしたの。
やっぱり演劇ならこんな雰囲気かな。
あの俳優かな。
それともミュージカルかしら。
楽しみだわ。
そこへ、走って彼がやって来た。
「ごめん、待った？」
「ううん」
「じゃ、行こう」

ここ演芸名人会って。
なんとそこは寄席だった。

第二七五話「この機会に」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七五話「この機会に」

「おはようございます」
教室の扉を開けると、子どもが半分いない。
「わあ、どうしたの」
「みんな風邪ですって」
「あら、大変」
いたずらっ子は全員いるのね。
「先生、これって学級閉鎖？」
「そう簡単にはいかないの」
「えーっ、もう帰ってもいいんじゃないの」
「ダメよ、午前中は勉強です」
本当は先生だって帰りたい。
「でもいい機会だわ、あなたたちの遅れてる部分を特訓よ」
「やだー！」
「今日は算数だけです」
「熱が出てきた！」

第二七六話「肩までつかって」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七六話「肩までつかって」

息子とお風呂に入る。

「ママ、どうしてお風呂に入る時って必ず数を数えるの？」

「時計を持って入るわけにはいかないでしょう？」

「でも、いつも百を数えるでしょう？　それって時計で何分？」

「えっ、そ、そうねえ、大体三分かしら？」

「どうして、大体なの？」

「だって、いーち、にーいってゆっくり数えるじゃない」

「じゃ、時計と同じように数えて」

緊張しながら湯船につかる。

「1、2、3、4……やめた、リラックスできないわ」

第二七七話「同じコースで」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七七話「同じコースで」

お母様と一緒に美容院に行きました。
「いらっしゃいませ。今日はお二人ですか？」
「ええ、嫁もここへ来たいというから連れてきましたの」
「ありがとうございます」
イケメン店長は流し眼でアピールする。
「では、どのようにされますか」
「ショートに」
「顔や爪のお手入れは？」
「母と同じように」
「かしこまりました」
すると、カットの間はハンドマッサージとネイルのお手入れ。
カットが済むと顔、さらにヘッドスパ。
お母様すごい！

第二七八話「タコ焼き?」（前書き）

＞i11769―573＜

第二七八話「タコ焼き？」

ふふふ、電気タコ焼き器買った。
「ちょっと、何それ」
「見ての通りよ」
「違うわよ」
「何が？」
「タコ焼きって、タコでしょう。それチョコよ」
「形はタコ焼きでも、私はこれでケーキを作るの」
「えーっ！　何よ、どうやって」
その声で寮のメンバーが集まっちゃった。
「あーあ、みんな来ちゃったの？」
「ちょっと作ってみて」
「ホットケーキの粉で焼くのよ。チョコも入れて」
こんがり丸く出来上がり。
「美味い」
私一個も食べてなーい！

第二七九話「あんまりだー！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二七九話「あんまりだー！」

お年玉をたくさんもらった。
「僕、新しいゲームを買いたい」
「ママが買ってきてあげる」
「わーい」
急いで学校から帰って来ると、ママがゲームを渡してくれた。
「わーい、どんなゲームなの？」
「ほら、面白いわよ。頭の中の年齢が分かるの」
「そんなこと知ってるよ。僕七才だってば」
「ほら、漢字のもあるのよ」
「いいよ、漢字なんか」
「ほら、薔薇って書ける？」
「ひょっとして僕のお年玉で買ったの？」
「もちろん」
「ひどいー！」

第二八〇話「本当は違うよ」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第二八〇話「本当は違うよ」

幼稚園の受験の練習です。
「まーくん、お名前はと聞かれたら」
「はい、中田まさとしです」
「お歳はいくつ」
「三歳です」
「好きな食べ物は」
「カレーライスです」
「ちょっと待って、ビーフシチューにして」
「やだよ、カレーがいい」
「少し安い感じがするわね。嫌いな食べ物は」
「ピーマンとシメジとネギとミョウガです」
「多いわね。減らして」
「やだ！」
「好きなお話は何ですか」
「ピーターパンでいいの？」
ママに聞けばいいのに。

第二八一話「そんな……」（前書き）

＞i11769―573＜

第二八一話「そんな……」

友だちから電話が入る。
「急だけど飲みに行かない」
「いいわよ。じゃ、池袋で」
夫は今日は飲み会だった。
問題はお母様。
「あの、お母様」
「なあに」
「友だちが離婚問題が起きて相談にのってくれって」
「あら、どなた」
「早苗さん」
「だから、ちょっと行ってきます」
「お気の毒ねえ」
池袋で待ち合わせ。
「悪いわねえ」
「いいわよ。たまには飲みたいわ」
「お母様にはなんて？」
「あなたの離婚の相談」
「どうして分かったの」
「えっ」

第二八二話「温もります」（前書き）

＞i11769―573＜

第二八二話「温もります」

不燃物の当番で寒い吹きっさらしの路地に立つ。
「まあまあ、ご苦労様です」
「いいえ、皆さんされてるから」
「お母様はお元気？」
「ええ、とっても」
「それはそれは」
そうよ、たまには代わってほしいわ。
立つこと三十分。
冷え切った体で帰る。
「美子さん、冷えたでしょう。卵雑炊作ってるわ。早くお食べなさい」
「わあ、嬉しい」
肩に炬燵で温めた半纏を着せてくれる。
「あったまるぅ」
温かい雑炊と半纏。

お母様、次も私が立ちます。

第二八三話「補習なんて」（前書き）

＞i11769―573＜

第二八三話「補習なんて」

寒い時にどうして補習を受ける羽目になったのか。
大体、教え方に問題があるんじゃないの。
私だって別に好き好んで赤点を取ってるわけではないのよ。
それなのに、あの数学サイコの野郎め。
「じゃ、お先に。頑張ってね」
いいわね、みんなもう帰るのね。
「あーあ、残ってるのはお前かー」
「何よ、その言い方。私だってあなたと一緒なんてがっくりよ」
ラグビーの万年補欠と二人きり。
「はい、焼き芋」
「サンキュー」
結構優しいじゃん。

第二八四話「懲りないのね」（前書き）

＞i11769―573＜

第二八四話「懲りないのね」

お母様がエアロバイクを買った。
「どうしたんですか」
「二カ月後に同窓会をするのよ」
「はあ」
「打ち合わせに行ったら、みんな綺麗なのよ」
「はあ」
「さて乗って来るわ」
エアロバイクに乗ること三十分。
翌日、お母様が起きてこない。
「お母様、どうしたんですか」
「太腿も腰も痛いのー」
「急に運動し過ぎですよ」
「今日は寝るわ」
「では食事はここへ運びます」
一週間後、お母様の体重は二キロ増。
「今度はダイエット食品にするわ」

第二八五話「勝ちたくない！」（前書き）

お久しぶりです。またよろしくお願いします。

第二八五話「勝ちたくない！」

ついつい甘いものを食べて三キロ太った。
運動に息子と散歩に行く。
「ママ、どうしたの」
「うん、ちょっとだけ太った」
「どんくらい？」
「あなたが生まれた時ぐらい」
「赤ちゃんぐらい？」
「そ、そうよ」
そこをマタニティを着た女性が通る。
「あの人のお腹には赤ちゃんいるよね」
「そうね」
「ママはあんなにお腹出てないね」
「うん」
「お尻はもっと大きいよ！」
「別に勝ちたくないの」
「でもママの方がでかい！」
競ってないってば！

第二八六話「そんなぁ」

近所の生け花教室にお母様が出かけて行く。
「いってらっしゃい」
さてと、掃除は簡単モップで終わり。
コーヒータイムにしようっと。
「確か、この前美味しいチョコレートをいただいたわ」
あれ、モロゾ●の缶入りチョコがどこにもない。
ここの棚に入れてあったはずなのに。
ひょっとして、お母様の部屋かしら。
あったわ。
蓋を開けると空。
傍にお母様の礼状が。
『美味しいからって嫁と孫が食べちゃいました』
「二つしか食べてません！」

第二八七話「会いたくて」

あの子の自転車だ。
ピンクの自転車。
いつも持ってるスポーツバッグが無造作に前のかごに入れてある。
じゃ、この近くにいるんだ。
思わず足のストレッチを始める。
「あら、ここで走るの」
「あ、おっす」
「へえ、寒いのに頑張ってるね」
「ああ」
「ふーん」
「クラブ終わったの？」
「うん、今から塾」
「そう、塾ってどこ？」
「駅前のゼミナール」
「じゃあね」
「バーイ」
三時間後のゼミナール前。
「あら」
「フルマラソンした」
「嘘つき」

第二八八話「寿司を買う日は」

雪がちらつく寒い夜。
おでんのいい匂いがする馴染の小料理屋へ。
「こんばんは」
「あーら、いらっしゃい」
「ちょっと寄り道を」
「こんな寒い日はおでんで熱燗？」
「うん、そうする」
この日は客が僕一人。
ラッキーだな。
女将一人のこの店で二人きりなんて。
「私も飲んじゃおうかしら」
「どうぞどうぞ」
仲良く並んでいい感じ。
「今日でこの店閉めるの」
「なんで？」
「田舎で縁談があって」
「おめでとう」

美子の好きな寿司でも買うか。

第二八九話「人の不幸は蜜の味」

洗濯物を干していると、隣近所の声が聞こえてくる。
普段は部屋で窓を閉めると全く聞こえないけど。
「いい加減にしてよね！　なんで、あなたのケータイにハートマークいっぱいのメールがあるのよ！」
「おい、人のケータイを見てるのか！」
「あら、ナニ、その言い方！　こっちが悪いかのような」
「そうだろう！　メールは手紙なんだから、勝手に開封するな！」
「ひどい男と結婚してしまって」
リーンリーン。
くそっ、何でこんな時に電話が。

第二九〇話「バレンタインデー」

今日はバレンタインデーだ。
一体どこの誰がこんな日を作ったんだ！
放課後まで待っていたのに。
誰一つ持ってこない。
くそっ、木村は四個、尾崎だって二個もらって、下島に至っては六個だと！
「こんちくしょー！」
石だと思ったら、地面に打ち込んでる杭だった。
「イタタタタタ」
つま先を思い切り打ちつけた。
クスッ。
どこかで笑い声。
振り返ると図書委員の遠藤じゃないか。
「人の不幸を笑うな！」
「一人になるの待ってた」
チョコだ。

第二九一話「ひょっとして」

何があったのかしら。
お母様の様子がおかしいわ。
「お母様、お出かけですか」
「いいえ、どこへも」
「でも、そわそわしてるような」
「別に何でもないわ」
「具合が悪いんですか？」
「少しだけよ」
額に手を当てるけど、熱はないわ。
「お腹？　それとも頭痛？」
「それは……」
ふと、窓から外を見るお母様。
郵便が届いたわ。
慌ててポストに走るお母様。
「来たわ！」
「何ですか？」
「お手紙」
ひょっとして……恋文？
お母様の歌が聞こえる。

第二九二話「口止め料？」

お母様が朝からご機嫌だわ。
「さあ、入学式の服を買いに行きましょう」
「え、もう制服買いましたけど」
「違うわよ、美子さんの」
「わあ、お母様ありがとう」
高級服を買ってもらってレストランへ行く。
そこへ素敵な老紳士が。
「紹介するわ、嫁の美子さん」
「初めまして」
「こちらはお友だちの泉川さん」
「よろしく」
何だか白髪の素敵な方。
「俳句の会でご一緒なの」
お母様ったら会わせたかったのね。
さて、パパに何て言おうかしら。

第二九三話「山茶花」

泉川家のリビング。
俳句の会に彼女は来るだろうか。
ズボンはこっちのグレーの方がいいな。
セーターはハイネックにしようか、それともアスコットタイの方がいいかな。
彼女の着物姿が実にいいんだな。
素敵な人だ。

妻が死んで十二年。

「母さん、ガールフレンドの一人くらい作ってもいいだろう」
笑顔の遺影に向かって話しかける。
「最近、話し相手が欲しくてね。返事が欲しいんだよ」
庭の山茶花が咲いている。
「教室に持っていこうか」

第二九四話「悲鳴」

彼女と初めてのデート。
映画に誘ったんだ。
ちょっと怖そうなやつ。
ポップコーン、ジュースで万事オーケー。
「私、怖いの苦手なの」
「大丈夫だよ、僕がついてるから」
上映開始。
「キャー」
可愛いなあ。僕にしがみつく彼女。
でも、だんだん佳境になるにつれ立場が逆転した。
「キャー」
と言う割に彼女は目をそらさないことが分かった。
僕はもう見ていられない。
思わずサングラスを掛けて目をつぶる。
終了。
「怖かったわーん」
嘘つけ。

第二九五話「分かりました！」

夫が朝からジャージに着替えてる。
「美子、軍手を取ってくれ」
「はい、何するの？」
「草むしりだ」
「あら、感心」
軍手を取り出して渡す。
「おーい、竹ぼうきはどこだ」
「はーい」
竹ぼうきを倉庫から出して渡す。
「おーい、スコップはどこだ」
「同じ場所にあるでしょ」
「どこ？」
もう知ってるくせに、一つも自分では探そうとしないのね。
「おーい、ゴミ袋は？」
だんだん腹が立って来る。
「おーい」
「わかったわよ。私もするわよ！」

第二九六話「忘れてませんか？」

古紙回収のトラックがやって来た。
「トイレットペーパーと交換いたします」
慌てて玄関に走る。
すると、片方のサンダルに両足がのってしまってつんのめっちゃった。
「ぎやあっ！」
悲鳴とともに玄関から飛び出てきた私を見てお母様がこう言うの。
「そんなに必死にならなくても毎週来ますから。それより鏡を御覧なさい」
「へ？」
そう言われて洗面所に。
鏡の中の私。
「やだぁ、パックしてたわ」
回収業者は呟いた。
「待ってるんだけど」

第二九七話「鉄棒」

「天気もいいし鉄棒をしましょう」
子どもたちは体操服に着替えて運動場へ走っていく。
「先生、今日は何をやるの？」
「まずは前回りね」
「わーい」
「じゃ準備運動から」
早くやりたい子どもたちは真剣そのもの。
いよいよ、鉄棒前に整列。
「では、先生をよく見てね」
ニコッと笑って鉄棒を握る。
すっと跳び上がる。
くるっと回って着地になるはず。
でも、お腹の肉がくるっと巻寿司になった感じ。
「先生、大丈夫？」
目が回って倒れそう。

第二九八話「福寿草」

お母様が庭の手入れをしているみたい。
「お母様、その花は何ですか」
「福寿草よ」
「何だかめでたい名前ですねえ」
「春が来たことを告げる花よ」
「そうなんですか」
「花言葉は幸福を招くっていうのよ」
「名前の通りなんですね」
「ええ。黄色くて可愛いわ」
福寿草を眺めていると、お母様に泉川さんの手紙が届く。
「ラブレターですね」
「違うわよ、私メールできないから」
「でも手紙の方がロマンチック」
「違うったら」
お母様可愛い。

第二九九話「歯医者」

パパと歯医者に行くことになっちゃった。
「いいか、泣くなよ」
「うん、泣かない」
キーン、あの音が嫌いだ。
「さあ、椅子に座りましょうね」
若くて綺麗な歯医者さん。
「僕、幼稚園に行かなきゃ」
「大丈夫、パパが送ってあげるから」
「やだ！」
「泣かない約束だろう？」
歯医者さんがこう言った。
「お利口さんにしてたら、このおもちゃ箱から一つあげる」
「ホント？」
あーあ、百円のおもちゃなのに、なんでいつも引っかかるんだろう。

第三〇〇話「自己嫌悪」

学校に行きたくない。
理由は分かってる。

受験で第一志望は落ちた。
私立に入学金は収めたけど、あそこは行きたくない。
親友は第一志望に受かった。
一緒に行くはずだった。

成績は私が上だったのに。

何で落ちたんだろう。

今考えるとどの問題もわかるのに、あの日は頭が真っ白だった。

慰めるのはいつも私の役目だった。

プライドが許さない。
自分の心の狭さが嫌い。

「合格おめでとう」

メールで送ったけど会いたくない。

ああ、自己嫌悪。

第三〇一話「泣いちゃう」

朝から頭が痛い。
ベッドから起き上がれない。
「おい、朝だよ」
「頭痛がひどくて」
「大丈夫かい？」
「ちょっと、無理みたい」
「わかった、母さんにやってもらうから」
夫が息子を連れて階下に降りる。
何だかいつもより下がにぎやかね。
楽しそうじゃないの。
そうよ、親子ですものね。

トントン。

「美子さん、朝ごはん食べられる？」
「あ、お母様」
「卵雑炊よ」
ふたを開けると、卵と水菜が綺麗。
「たまにはゆっくり休みなさい」
ぐすっ。

第三〇二話「仲間はずれ？」

階段の踊り場で何やらひそひそ話をしてる。
私が通ると、ピタッと話を止める。
「ちょっと、私に内緒話？」
「そんなことない」
絶対嘘だわ。
親友と思っていたのに。
昼食も一人ぼっち。
今日で二日。
もう涙がこぼれそう。

翌日、いやいや制服を着て家を出る。
重い足取りで教室の扉を開ける。
「委員長！　誕生日おめでとう！」
みんなの書いたメッセージが模造紙にいっぱい。
親友が企画してくれたんだ。
「黙っててごめん！」
涙がとまらない。

第三〇三話「安心です」

お母様がぜんざいを作っている。
「美子さん、お餅も入れるから焼いてちょうだい」
「はい、あらお母様、こんなところに鏡餅が残ってました」
「大丈夫よ、最近のはプラスチックに入ってるから」
「でも、三年前です」
「お客さんが見えた時に片付けてそのままなのね」
「そうか」
「ちょっと切ってみましょう」
別に普通のお餅に見える。
「焼いてみましょう」
そこへパパ登場。
「お、餅だ」
パクッ。
「美味しい？」
「ああ」
安心して頂くわ。

第三〇四話「噴火前」

幼稚園では雛まつり発表会のリハーサル。
「はーい、皆さん、舞台に上がったらもう動いてはいけませんよ」
「せんせーい、たっくんがおしっこだって」
「もう、さっき行ったばっかりでしょう」
「だってもれちゃうー」
折角衣装も付けてるのにまた袴を脱がす。
トイレから戻って来る。
「せんせーい、三人官女が喧嘩してるー」
「だって、柄杓を持つのは私だもん」
「イーだ！　もう遊ばないもんね」
「フン、ばっかみたい」
先生、爆発三秒前。

第三〇五話「お知らせ」

会社で重要な会議中だ。
メール？
開けてみると、美子の顔の大写し。
「何だ！」
よく見ると鼻に吹き出物？
バカらしい。
無視して会議に集中する。
また来た。
次の写真は息子の顔のアップ。
ピースサインの可愛い息子の顔にもブツブツが。
嫌な予感がする。
それでも無視していると……。
来たのは母のアップ。
「げっ！　母さんの顔にも」
これはジンマシンだ。
ふと、視線を感じる。
「河君、顔に何か出てきたぞ」

美子！　一体何の保湿クリームだ！

第三〇六話「春が来た」

今日は俳句教室の日。
朝からお母様が衣装選びに余念がない。
「お母様、早くしないと電車に遅れてしまいますよ」
「えーっ、もうそんな時間？」
「あら、今日は着物ではなくてワンピースですか」
「ちょっと、春らしくね」
「素敵です、その花柄」
「そう？」
「ええ、足元は？」
「やだ、忘れてたわ」
「私が見てきます」
あの服に合いそうな靴を探す。
「ぺったんこのバレーシューズがいいわね」
「ほら」
クルッと回って見せるお母様、素敵。

第三〇七話「初めてです」

泉川氏と俳句教室を出るお母様。
「あなたはセンスがありますね」
「あら、お上手ね。何も出ませんよ」
「いやいや、お世辞なんかじゃありません。お昼でも食べませんか」
「そうですね」
「僕、いい店を知ってます」
「教えてくださいな」
二人並んで歩く道。
泉川氏は近くの藍染の暖簾の店に。
「大将いるかい」
その店の親子丼は絶品だった。
「男の方と二人で食事なんて主人が亡くなってから初めて」
「僕もです」
こぶ茶を飲みながら語る。

第三〇八話「手作りです」

仲良し二人組の一年生。
「ねえ、今日の宿題うちでやらない？」
「いいね、漢字と計算ドリルだね」
「ママがケーキ作ってくれるはず」
「すごーい、うちの母ちゃんはいつも安くなったパンを買うよ」
「へえ、おいしい？」
「うん」
「じゃ、あとでね」
「バイバイ」
早速、母ちゃんに報告する。
「お母さんが手作りケーキ作るんだって」
「そうかい、じゃあうちの手作りを持っていきな」
「なんだよ、うちの手作りって？」
持ってきたのは大根！

第三〇九話「連鎖」

子どもが泣きはらした目で学校に来る。
「どうしたの」
「何でもない」
「給食もおかわりしなかったね」
「うん」
ふと、子どもが呟く。
「痛い」
「お腹が痛いの？」
「違う」
そっと見せる腕の火傷。
煙草を母親が押しつけたという。
「なんで？」
「ご飯をこぼしたから僕が悪いの」
躾と称した虐待。
先生は憤慨して家庭訪問する。
髪をぼさぼさにした母親が玄関先に出てくる。
「お母さん、お話があります」
母親の手には無数の火傷。
負の連鎖。

第三一〇話「言い過ぎです！」

朝の洗面所。
「何やってるの？」
「髪型が決まらないの」
「そんなことより、勉強の心配したら？」
「そっちは諦めた」
「いい加減にしなさい！」
「だって、ママ」
「高校生なんだから髪より勉強！」
そこへ妹が起きてきた。
「あーっ、髪が変！　ママ直して」
「五才の子が髪型なんか心配しなくていいの！」
「だってー」
「髪よりおねしょの心配しなさい！」
パパが育毛剤の瓶を持って登場。
「これ無い」
「髪無いでしょ！」
ママ言い過ぎです。

第三一一話「何でもできるのね」

来月から、いよいよ妹も幼稚園に行くんだ。
「いいかい、分からないことは何でもお兄ちゃんに聞くんだよ」
「わかった」
妹はおかっぱ頭でものすごく可愛い。
そんな妹を連れて、近所の公園に遊びに行った。
ブランコで僕よりもビュンビュン漕ぐんだよ。
「こら、そんなに漕いだら危ないよ」
「大丈夫だよ。お兄ちゃん」
「ダメ」
つまんなさそうに次は鉄棒へ行く妹。
「お兄ちゃんやって！」
僕が前回りをして見せると、妹は逆上がりをした。

第三一二話「父の子です！」

母が上京して来た。

「あのね、あなたももう二十八歳なんだから、結婚について考えないとダメよ」

「分かってる」

「分かってないから言いに来たの」

「こればっかりは仕方ないでしょう」

「そうね、娘が見つけられないんだから私の出番よ」

「もう、毎日忙しいのよ」

「だから？」

「そんな暇ないの！」

「嘘ばっかり。週末はいつも飲みに行ってるじゃないの」

「それは、ストレスがたまるから」

「まるで、お父さんとおんなじじゃないの！」

第三一三話「味わって食べてね」

今日は給料日だわ。
「お母様、今日はすき焼きにしましょう」
「あら、久しぶりね」
「ええ、お給料日ですから」
「まあ、嬉しい」
息子と買い物に。
「ママ、このお肉高いね」
「ええ、でも今日は特別よ」
「やったー」
スーパーのレジでお金が足りないと気付く。
「どうしたの？」
「お金忘れた」
「えっ、お肉買えないの？」
「買うわ、でも高いのは二百グラムだけ。後は安いのにしなくちゃ」
夕食時。
「いい肉は一口ね」
「美子、なんでだよ」

第三一四話「何でこうなるの！」

もう、大雪だなんて日に面接。
家を出る時は長靴履いて、レインコート着てリュック持って出た。
リュックには黒のハイヒールと筆記用具に財布よ。
駅に着いたら履き替えよう。
でも、世の中ってうまくいかないものね。
電車が遅れて着いたから長靴でダッシュ。
会社へ息を切らして滑り込んだ。
そうそう、待ってる間に靴を履き替えるんだった。
うっ、これ母の靴だ。
纏足（てんそく）にでもしないと無理。
黒のバッグも忘れた。
おお、神様。

第三一五話「歯は大事！」

ずっと気になっていたからこそ言ったんだ。
「口が臭いよ」
そしたら、百倍の勢いでこう言われたんだ。
「あなたもよ！　気を遣って言わなかったのよ！」
「言ってくれよ！」
「言える訳ないでしょ、口が臭いなんて！」
「知っといた方がいいだろ！」
「もう、二度と会いません。さようなら！」
バタン！
「なんだよ、教えてあげたのに」
気になって歯医者に行く。
隣の診察台に彼女が。
「軽い歯槽膿漏だって」
「俺も虫歯が」
手をつないで帰る。

第三一六話「負けた！」

いつも通勤電車で見かける素敵な女性。
今日はマスクをしている。
風邪でも引いたのだろうか。
そう言えば何だか顔色もすぐれない。
一度でいいから話しかけてみたい。
でも、この満員電車ではどうにもならない。
次の駅で降りるんだ。
おや、今日は僕の降りる駅と同じだ。
なんてラッキー。
ようし、声をかけよう。
うわ、転んだ。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫です。どうもありがとう」
「僕の病院すぐそこです」
僕の前にいた奴が声をかけた。

第三一七話「名探偵です！」

あれ、買ったはずの食材がなぜだか見当たらない。
「ねえ、パパ、冷蔵庫に入れてあったハム知らない？」
「何で僕なの。知らないよ」
「そう、じゃイチゴは？」
「知らないったら」
息子がなぜか目を合わそうとしない。
ははーん。
「ねえ、ちょっと」
「僕は何にも食べてない」
「まだ、聞いてないけど」
「本当だよ。イチゴなんか食べてない」
「えっ、イチゴを食べたの？」
「だって、ハムだけだとビタミンが足りない気がして」
犯人みっけ。

第三一八話「石けり」

今日は日曜日。
息子が退屈してブーブー言ってる。
「ママ、ゲームも飽きた」
「そうねえ、天気もいいし外で遊ぼうか」
そこへ、お母様が出てきた。
「おばあちゃまと石けりしない？」
「石けりってなあに？」
「わあ、私もやるやる！」
「美子さんが喜んでどうするの」
「ママは知ってるの？」
「もちろん」
お母様が棒きれで○を描いていく。
「さあ、平べったい石を探すのよ！」
「私がお手本を見せるわ」
すぐに美子ダウン。
お腹がユサユサ。

第三一九話「新講座は？」

俳句教室の日です。
「また四月からの講座に申し込みをしないと」
「お母様、他の教室も増やしてみたら？」
「他のって？」
「泉川さんは他に何もやってないの？」
「さ、さあ。よく知らないわ」
「じゃ、お聞きしてみたら？」
「そうね。体にいいかも」
「ハイ、心にも」
お母様、顔が赤いわ。

俳句教室で泉川氏が話しかけてくる。
「僕、ピアノの教室に入ることにしました」
「ピアノ？」
「ご一緒にいかがですか」
「そうね」
お母様前進です！

第三二〇話「愛の鞭」

中学校の卒業式が終了。
先生がボンタン穿いてるツッパリ君に話す。
「ねえ、四月からは義務教育じゃないんだからね」
「チョー大人って感じー」
「バカなことするのはもうやめないと」
「そんなこと言ったってー、すぐには止まりませーん」
ツカツカと近寄る先生の手が、思い切り頬を叩く。
「バカ言ってんじゃないわよ！」
思わず目が点になるツッパリ君。
「教師が叩いた！　体罰じゃん！」
「もう教え子じゃないもーん」
言いながら二人涙。

第三二一話「パパったら」

今日はお墓参りです。
「お母様、お供えのお菓子とお花はこちらにありますから」
「美子さん、小さな箒と塵取りは？」
「母さん、それは僕の車に積んでるよ」
「あら、そう」
みんなでいそいそと出かける用意をしているのに、息子がトイレから出てこない。
「ママー、うんこがバナナ型だよ！」
「うんこの観察はいいから早く出てらっしゃい！」
渋々出てきた息子。
「すごいバナナだったのに」
「パパは？」
「パパも頑張るって！」
「もう！」

第三二話「確かにうまいけど」

いい匂いだわ。
お母様が小豆を煮たのね。
あんこを作ったんだわ。
おはぎだ。
「お母様、もち米を蒸しましょうか？」
「もうできてるわよ」
「あら、早い」
「ほら、ここに」
蒸し器の中のもち米が美味しそうに炊きあがってる。
「では、あんこを丸めましょうか」
「ええ、お願いね」
そこへ息子がやって来る。
「僕もやるー！」
「できるの？」
「泥団子上手だよ！　見て！」
手には大きな泥団子。
「わあ、すごいわね！」
でも、やってほしくない！

第三三話「日によりけり」

雨が降ると制服のひだが取れちゃうし、髪はバサバサになるしいいことない！
おまけに傘の一カ所が外れてる。
ソーイングセットも忘れた。
これってカッコ悪くて嫌。
それでも、バス停まで傘差して歩く。
「よっ！　いい時に会ったなあ」
先輩だ。
「い、今、帰りですか？」
「ああ、朝自転車がパンクしてたからバスで来た」
そう言いながら、傘を持ってくれる。
「ごめん、濡れちゃうね」
「いいんです！」
思わず大声で言っちゃった。
雨、好き。

第三二四話「憎いマーチ！」

どうしたのだろう。
このところ、咳が止まらない。
頭も重い。
どうも様子がおかしい。
昼食時間を遅く取り、近くの病院へ行く。
「先生、どうしたんでしょう」
レントゲン写真を見る先生。
「レントゲンも撮ったけど大丈夫です」
「はあ、でも何だか咳が止まりません」
「これもね、花粉症です」
「は？」
「鼻水とか目に症状のある人が喘息傾向になることも。アレルギーマーチですね。繋がってるから」

神よ、残されてる顔の穴は耳だけです。

第三二五話「絶交中です！」

隣のまっちゃんと喧嘩した。
一生口きかないって言われた。
いいもん。
「ねえ、ママ、今日は僕ママと遊んであげる」
「ごめんね、忙しいからまっちゃんと遊んできたら？」
「遊ばないことにしたんだ」
「どうして？」
「どうしても」
「喧嘩したのね」
「違う、絶交したの」
「あらあら。それなら、肩を揉んでちょうだい」
「仕方ないなあ」
と言いながらも嬉しそう。
でも、五分もすると飽きてきた様子。
「休戦しようっと」
飛び出していった。

第三二六話「寸足らずでもいい！」

チューリップが咲きだした。
でも、今年のチューリップは大きな花に短い茎。
「美子さん、チューリップの丈が伸びないわねえ」
「ええ、お母様。葉っぱの中で咲いちゃって」
「寒過ぎたのかもしれないわね」
「でも、寸足らずで可愛いわ」
そこへ息子がランドセルを背負って現れる。
「ママ、見て！」
「ピカピカの一年生ね」
「ちょっと後ろも見せて」
クルッと後ろと向くとランドセルから足が生えてるみたい。
「チューリップとおんなじね」

第三二七話「母譲り」

憧れの制服を作るの。
紺のブレザーに緑と赤のチェックのスカート。
「いらっしゃいませ。おめでとうございます」
「ありがとう」
店員は手慣れた様子で採寸していく。
「こちらのサイズになります。試着をどうぞ」
鏡の中の私。
似合うわ。
「このスカートもっと短くならない？」
「背丈も伸びますから、初めはこれぐらいがいいと思います」
「そうね」
横から母が言った。
「私に似て伸びないわよ」
母は一四七センチ。
今、私も同じ。
ガクッ。

第三二八話「そうなのか」

お母様とホテルのケーキバイキングに出かけた。
「美子さん、ここは安くて美味しいのよ」
「お母様、どうしてここをご存じなの？」
「だって、俳句教室の帰りに……」
「あらら、そうだったんですか」
二人で十個食べる。
その夜に限ってパパもケーキを買ってきた。
「おーい、お土産だぞ」
「うっぷ、ケーキ？」
「なんだよ、うっぷって」
「いえ、悪阻（つわり）かも」
お母様も箱を見て口を押さえる。
「おい、お袋も？」
「何が？」
「悪阻」

第三二九話「活躍を祈る！」

桜が咲きだした。
今日はちょっと暖かい。
「ママ、水筒とカメラを用意して。おやつも」
「どこ行くの？」
「桜探し隊なの、ボクたち」
「あら、素敵ね」
「誰と行くの？」
「みいちゃんと」
そこへみいちゃん登場。
頭には白い帽子。
双眼鏡をぶら下げてリュックを背負っている。
「おーっ、ママ、ボクヘルメットも被る！」
「ちょっと大きいみたいね」
二人が手をつないで出発。
敬礼して見送る。
探検隊の行き先は家から二〇メートル先の土手。

第三三〇話「ラジオ体操」

朝からラジオ体操第一の曲を練習中。
なぜかって？
町内会長にこの伴奏を頼まれた。
「幼児たちに教えるのに、テープ止めるのは大変だから」
それほど難しい曲ではないが、動きがあるのでそれを考えて弾かねばならない。
「あなた、ちょっとやってみて」
夫に実際動いてもらう。
「何で僕が」
「町内活動よ。協力して」
舌打ちしながらもやってくれる。
「手を伸ばしてー」
「足もまげてー」
ラジオ体操を侮るなかれ。
夫はぎっくり腰になった！

第三三一話「計画的に」

美容院に出かけたお母様。
「今日はカラーとカットしてちょうだい」
「畏まりました」
美顔マッサージも受ける。
さらに美容師。
「奥様、新しい美容液をつけてみましたがいかがですか」
「いい気持ち」
「今なら半額です」
「じゃ一本頂くわ」
美しい栗色に染まり、次はカット。
「奥様、今日使ったシャンプーはいかがですか」
「いいみたいね」
「お安くしておきます」

美容院を出ると電話するお母様。
「美子さん迎えに来て。電車代がないの」

第三三二話「悪く思わないで」

今日は歯医者に息子を連れていく。
入学までに治す。
「さあ、出かけましょ！」
「ママ、どこへ行くの？」
「いいとこ」
「えっ、いいとこってどこ？」
「秘密」
ワクワクしている息子の顔。
「ジェットコースターなんてある？」
「その前にちょっと寄るところがあるの」
ピタッと動きが止まる。
「僕、留守番してる」
「あなたがいかないとダメなの」
「怪しい」
「ここへ行かないと入学できないんだって」
こうやって、母はまた一つ嘘を重ねる。

第三三話「同じだったのね」

今日のネクタイは彼女がバレンタインデーにくれたもの。
「よし、似合ってるな」
急いで部屋を出て、駅へ急ぐ。
電車の中は相変わらずの混雑だ。
座ってる中年女性二人。
「この前、ネクタイが安いから買ったの」
「へえ」
「送別会のプレゼント贈るでしょ。私が今年その係」
「あら、ご苦労様」
「これなの、どう？」
「いいじゃないの。高く見えるわよ」
「そうでしょう。これを包装して渡すの」
ふと顔を上げた女性、視線は僕の首元へ。
あ！

第三三四話「ホントの姿？」

フリルのついたエプロンをして、今日も窓辺で見送ってくれる新妻。

メールはいつもハートマークいっぱい。

待受け画面は妻の笑顔。

「今日も早く帰って来てね」

うんうん。

みんなの誘いなんか断っちゃうから。

でも、今日は部長に接待頼まれた。

早速妻に知らせる。

「あらーん、がっかり」

妻から寂しそうなメール。

あーあ、ついに午前様になっちゃった。

起きると可哀そうだから静かに帰宅。

ドアを開けると、胡坐姿で咥え煙草の妻がいた。

第三三五話「これって当たり？」

急に雨が降って来た。
家の近くの駅まで帰るのに電車で三十分かかる。
多分どれもびっしょりね。
しまった、ニットも洗ってたわ。
もう、嫌になる。
電車の中で空を見上げる。
「あれ、こっちは降ってない」
そう言えばテレビで、射手座の運勢ラッキーだって言ってた。
ベランダで太陽の光を浴びた洗濯物を取りこむ。
鼻歌気分でやっていたら敷居に躓いた。
「あー！」
転んだ拍子に右腕骨折。
ラッキーカラーは白だったわね。
この包帯の色よ。

第三三六話「本当に美味しいのよ！」

鍋料理をしたら、最後に雑炊が定番なのよ。
「ママ、今日の宿題の日記はうちの夕飯について書いたよ」
「ふーん、何て書いたの」
「今日の夕飯は、鍋の中にちぎった野菜とご飯とをぐちゃぐちゃに入れて、それを卵で固めたものをすくって食べます」
「ねえ、たっくん、それだと何だか美味しそうな感じが伝わってこないわねえ」
「でも、ママ、続きも書いてるよ」
「そう？」
「味付け海苔もかけて、すすって食べると美味しいです」
うーん。

第三三七話「嘘だって言うの？」

昼間に掛かって来る化粧品販売の電話。
「もしもし、河様の奥様ですか」
「はい」
「ヒアルロン酸をたっぷり配合した乳液がございます」
「結構です」
「お歳はおいくつでしょうか？　お声が大変若いですけど」
「二十四歳です」
相手が絶句。
絶対に違うと思っているのね。
敵も負けてない。
「お若いうちから良い化粧品をお使いになると、お歳を召されてから他の方と格段の差が生まれますよ」
「これ以上の差は要りませんわ」
切れた！　失礼ね！

第三三八話「どうしてかしら?」

妊娠五カ月の娘のマタニティウエアを買いにデパートへ行く。
シックなグレーに裾の刺繍がゴージャス。
「あら、これいいわねえ」
にっこり笑って店員さんもこう言った。
「はい、出産された後もジャンパースカートとして着れます」
早速買った。
その夜、友人から急に呼び出しの電話がかかる。
「え、今からなの?」
着ていくものがない。
お風呂に入った後はウエスト締めたくない。
「今日買ったわ」
着てみる。
悲しいほどに体形がピッタリ。

第三三九話「入学式よ！」

小学校の入学式に、河家は全員で参加することに。
「ママ、僕の蝶ネクタイこれでいいの？」
「いいわよ、ばっちり」
「美子さん、私の羽織少し派手かしら？」
「お母様、帯締めをもっと派手にしてもいいと思いますけど」
「そう？」
そんなことより、肝心の私がまだスーツを着てない。
「おい、僕のスーツに皺があるよ」
「いいわよ、それぐらい」
「ちぇっ」
しまった、ストッキングに伝線。
「ママ！　僕これ履くの？」
汚い運動靴！
忘れてた！

第三四〇話「そんな気がしてた」

小学校で新入生を迎える運動会をするんだって。
「ママの時は秋だったのに」
「でも、僕は嬉しいな」
「どうして？」
「かけっこ速いもん」
「あのね、たっくん、園庭と違って運動場は広いわよ」
「大丈夫！　僕ビュンビュン走るから」
すると、パパが横から口を出す。
「ようし、パパが特訓してやろう」
「ホント？」
「明日から毎日パパと走ろう」
「わーい」
翌日。
「パパ、起きてよ！」
「たっくん、今日は無理。明日からね！」
いつもこれだ。

第三四一話「君の平均って」

実力テスト、全然できなかった。
隣のみきちゃんが可哀そうなぐらい落ち込んでいる。
「どうした？」
「全くできなかった」
「ああ、俺も全然よ」
「そう？」
「数学難しすぎだよ」
「そうよね」

そして三日後。
「はい、今からテスト返しまーす」
「げっ」
みきちゃんはやっぱりテストの点を見て肩を落としている。
俺は全然と思っていた割には六十点。
よかった。
「どうだった？」
ちょっと自慢で見せたら、彼女の目が点。
みきちゃん八十二点。

第三四二話「愛読者」

抽斗に入れてあった日記帳。
小学校六年ともなると、親にも読んでほしくない。
でも、母がいつも盗み読みをしているみたいだ。
別に疾しいことはなく、先生から出されてる課題でもある。
ただ、先生のコメントが楽しかったり温かかったりして、私はとても大切に思ってる。
それなのに、母が読みたがる。
だから髪の毛をはさんで置いた。
開いたら髪が落ちるはず。

髪がない！

「お母さん読まないで！」
「あなた文学的才能あるわ」
「そう？」

第三四三話「似てるけど……」

新入生の身体検査が始まった。
「今日は背の高さと重さと座った時の高さを測ります」
「はーい」
「男の子も女の子も下着だけですよ」
「はーい」
返事はいいんだけど、ほらね、何人もソックス履いたまま。
「ソックスも脱ぎますよ」
「あれ」
照れてるところがまた可愛い。
「先生、まあくんが裸になってる」
「あら、パンツは脱がないのよ」
「だって、下敷きだけって」
「まあくん、君の持ってるのは下敷きだけど、先生は下着って言ったの」

第三四四話「豪華メニュー」

夕飯のメニューが決まらない。
というより、レパートリーが少ないから困るの。
料理の本を買うのも面倒だしね。
息子が帰って来る。
「ママ、学校の献立表だよ」
「あら、ありがとう」
よく見てみると美味しそうねえ。
なるほど、ピーマンともやしの酢の物なんていいかも。
「僕、給食大好き」
「ママも食べたいな」
献立表の日をずらして料理すればいいわね。
今夜は一週間後の月曜日の分にしよう。
鯖の甘酢あんかけとかきたま汁と酢の物だ。

第三四五話「参観日デビュー」

さあ、今日は小学校の参観日。
「美子さん、二時間目でしょう」
「そうです、お母様」
「科目は何かしら」
「確か、算数と言ってました」
はりきって二人並んで学校へ行く。
息子は廊下ばかりを見て手を振りまくる。
「前を向きなさい」
と、大声を出すわけにもいかず、お母様と二人でまるでいっこく堂のように百面相。
「はい、河君」
先生に指名された。
張り切って立ち上がる。
「はい」
でも、緊張したのか答えを忘れてる。

倒れそうな二人。

第三四六話「似てるわね」

四月から絵手紙教室に通うことになったの。
生徒は十六名。
最高齢は八十五歳。
早速、青墨を摺り線描きの練習。
僅か親指と人差し指で筆の一番上を持ち、そーっと左から右へと一本の線を描く。
筆を高く上げているから腕がプルプル震えて来る。
さらに、肩が凝って仕方がない。
「ピーマンを一つ描いてみましょうか」
「はい」
筆と紙の角度は九十度を保つ。
とてつもなくでかいピーマンの出来上がり。
帰って見せると、夫が一言。
「南瓜か」

第三四七話「テレビの見過ぎよ！」

スイミング教室に通ってる息子、全く進級しない。
「ねえ、今日はテストよ」
「僕は泳ぎを覚えるために入ったんでしょ？」
「もちろん！」
「もう覚えたよ」
「バタ足だけでは十分じゃないでしょ？」
「でも、泳げてる」
「みさちゃんもようくんも進級したわよ」
「テストって聞くとお腹が痛くなるの、ストレスだってテレビで言ってた」
返す言葉がない。
ふと、顔を上げた息子。
「ゲーム買ってくれる？　それなら頑張る」
こっちがストレスよ。

第三四八話「あの肌に」

図書室へ行くと隣のクラスの美しい図書委員がいた。
「この本ありますか？」
僕は新刊図書の広告を見せた。
「あら、ごめんなさい。これ、私が借りたの」
「あ、そうなんだ」
「次に借りるように予約しますか」
「お願いします」
「君、隣のクラスだね」
「あなたも本が好きなのね」
「うん、クラブは何？」
「私、陸上部」
「へえ、足が速いんだね」
「違うわ、砲丸投げよ」
「へえ！」

放課後、彼女は砲丸を顎と首に挟む。
あの砲丸になりたい。

第三四九話「人の話は聞くものよ」

大学生となって金がいかに大切なものかやっとわかった気がする。
最近父が退職した。
もっと送ってくれとは言えない状況だ。
家庭教師のバイトを増やすことにした。
今までは小学生相手だったが、今月から中学生も始めた。
「さあ、始めましょう」
「かったるいなあ」
こんちくしょーと思っても、にこやかに対応。
すると、わざとエロ雑誌を手に取る始末。
「先生、ほら」
ニコッと笑って呟く。
「私のお兄ちゃん小指ないのよ」
中学生正座す。

第三五〇話「新聞活用」

毎朝、新聞読むのが好き。
河家は二紙取っている。
夫が出かけた後、洗濯、掃除を済ませると徐に新聞を読む。
まずは、番組欄そして社会面、つまり後ろから読む。
ふと横を見るとお母様も同じ。
地方紙は知人やお世話になった方の死亡広告まで。
さらに人生相談やオープン投信も、実に読み応えたっぷり。

「美子さん、葉書を取ってちょうだい」
「何の懸賞ですか」
「試写会よ、今回も当たるかしら」
先月も当選したの。
新聞って、いいわあ。

第三五一話「面影は？」

保育園の朝の風景。
「じゃ、行ってくるね」
「ヤダー、ママー、僕も行くー」
はあ、いつになったら手が離れるのか。
毎朝、息子の悲鳴に近い泣き声が。
そう泣かれると、こっちも泣きたい。
親子そろって保育園に慣れない毎日。
でも、私も仕事があるし、夫はもう出かけてるし。
ふと振り返ると、保育士に抱っこされてまだ泣いている。
「ママー」

十年過ぎた中学生の息子にあの頃の面影はない。
「行ってらっしゃい」
「ん」
挨拶じゃないし。

第三五二話「反乱」（前書き）

＞i11769―573＜

第三五二話「反乱」

息子たちの喧嘩する声が聞こえる。
高一と高三になってからいつもあれだ。
あれほど仲のよかった兄弟だったのに。
なぜ仲良くしないのかとイラついて来る。

二人で生きてみろ。

母はもう知りません。

家出するとメールを送る。

ぶらつくこと二時間。
もう行くところもなくて公園でブランコに乗る。
思わずムキになって漕ぐ。
中年女性の立ち漕ぎ姿。
小さな子がびっくりしている。

自転車に乗って捜す兄弟が見えた。
もうちょっと漕いでいよう。

第三五三話「老婆心」（前書き）

>i11769―573<

第三五三話「老婆心」

積み木を片手にご機嫌な娘。
今二歳半。
可愛い盛り。
四十にして授かった一人娘。
産んでよかったとつくづく思う。
つぶらな瞳、この耳、全てが愛おしい。

散歩に連れていけば、ヤンママたちが楽しそうに話している。
ウィッグをつけたきらびやかな髪型と伸ばした爪。
子どもの顔にママの髪が垂れ下がる。
「目に入るわ、髪の毛が」
「爪で顔を傷つけないかしら」
見ていてとても疲れてしまう。

中年の新米ママはよそ様の子どもも気になるの。

第三五四話「相性がいいの」（前書き）

＞i11769―573＜

第三五四話「相性がいいの」

「美子さん、お昼はお好み焼きにしましょう」
お母様のお好み焼きってとても美味しいの。
小麦粉、卵、調味料、青ノリ、鰹節、山芋、いか、海老、ホタテ、
そして豚肉にキャベツ。
「そのキャベツ千切りにして」
「はーい」
スライサーで素早く千切り。
「あら、便利ね」
「ええ、お母様、これは欠かせません」
お母様は山芋をすりおろす。
見ている方が手が痒くなる。
手際良く焼いていく。
「ちょっとならいいわよね」

お好み焼きにはビール。

第三五五話「いつから知ってるの」

ファミリーレストランのバイトを始めた。
「いらっしゃいませー」
ヤバい、僕の家族が来た。
図書館で勉強ということにしていたのに。
思わず猫背になってしまう。
主任が僕を見つけて注意する。
「もっと胸張って、声を張り上げて。お客様をよく見て」
どれも無理。
それにしても、僕を除けてみんなで食事かよ。
八つ下の弟がこう言った。
「お兄ちゃん、僕ハンバーグ定食、ママは焼肉定食、パパはすき焼き定食だって」
くそっ、バレてるし。

第三五六話「お似合いです」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三五六話「お似合いです」

ベッドの中が気持ちがいい休日の朝。
「ねえ、腹減った」
「私も」
「何か作って」
「あなたが作って」
「君が奥さんだろう」
「あら、私も働いてるのよ」
「普通女だろう、朝起きて作るって」
「何言ってるのよ。男とか女とか言わないでよ」
「だって、料理得意って書いてた」
「あなただって家事は協力って」

結婚相談所に連絡。
待つこと十分。

「お二人ともお手軽コースのお客様ですね」
「えっ、そうなの？」

顔を見合わせ笑う。
お似合いね。

第三五七話「断捨離」（前書き）

＞i11769―573＜

第三五七話「断捨離」

部屋に服があふれてきた。
安いと言っては買い、小さくなったと言っては買い、増え続けた服。
いつか入るはずと捨てることもせず衣装ケースに。
ついには回転ハンガーが折れた。
洋服ダンスはとっくにいっぱい。
衣装ケースもついに十個突破。
じゃ、どうしたらいいの？
仕方ないわ。
どう考えてももうこれしか方法がない。
悩んだ結果、処分することにした。

「これも古いし、こっちは小さいから」
さっさと嘘みたいに処分できる。

主人の服。

第三五八話「美白クリームが買えます！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三五八話「美白クリームが買えます！」

紫外線が気になるこの頃。
お母様に誘われた。
「美子さん、新しい日傘を買いに行きましょう」
「そうですね、白が黄ばんできましたね」
デパートの傘売り場にはカラフルなものがいっぱい。
「お母様、黒がいいんですって」
「でも、日傘まで黒いと顔が明るく見えないわ」
「そうですか」
「そうよ、若い人はいいけど、私みたいなのが黒ってダメよ」
「なるほど」
「私が白のバテンレース、美子さんは黒ね。買ってあげるわ」
一本一万円って！

第三五九話「そんなにするの？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三五九話「そんなにするの？」

「美子さん、この指輪小さくなったからあなたに」
「まあ、嬉しい」
「翡翠なの」
「いいんですか」
「ええ」
「サイズ直しすればどうですか？」
「いいのよ、デザインを変えたら？」
「そうですね」
二人で宝石店に行った。
店員はにこやかに言った。
「こんなデザインはいかがですか」
「あら、素敵」
「これはおいくらで？」
「プラチナ台で二十万円です」
思わず顔を見合わせ店を出る。

「お母様、美味しいもの食べて帰りましょう」
「そうね」

第三六〇話「セクシー？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六〇話「セクシー？」

急に暑くなってきた。
制服のスカートって、どうしてこんなに暑いの。
ウエストでくるくる丸めて短くする。
「うーん、ミニ過ぎかしらん」
でも、ぐっと涼しくなった。
「おい、その格好！」
幼馴染の俊ちゃんが慌てて走り寄る。
「暑いんだもん」
「暑いって言っても短過ぎだろ」
「そう？」
「そうだよ！」
「別にいいじゃない」
「よくない」
「どうして？」
「階段で見えるんだよ！」
トイレへ放り込まれた。
しまった！　妹のプリキュアパンツ。

第三六一話「人によります」（前書き）

＞i11769―573＜

第三六一話「人によります」

満員電車で私の後ろに立ったサラリーマンが、ひどい咳をする。
気の毒だけど口に手を当ててほしい。
しかもマスクをしていない。
「ゲホッゲホッ」
あーん、インフルエンザだと嫌だなあ。
でも、彼の両手は重そうな荷物を持っていて、満員だから床には置けない。
彼も咳を止めようと下を向いて口をつむる。
「ブホッ！」
思わず睨んでやろうと後ろを向くと、ダルビッシュみたいなイケメン。
「すみません」
「大丈夫？」
なぜか優しくなる私。

第三六二話「あれ？」（前書き）

＞i11769―573＜

第三六二話「あれ？」

停電だって。
怖いのよ、帰り道が。
家の明かりもほとんどついてないし、コンビニも真っ暗。
あと二百メートルなのに、後ろから足音がする。
振り向くのも怖い。
急がなくちゃ。
小走りになると、後ろも小走り。
「いやーん、どうしよう」
こうなったら全速力出して走ろう。

しまった、タイトスカートだった。
いいわ、スカートまくりあげて走ってやる。

ダッダッダッダッ。

「あれ、抜かれた」
私を狙わないのね。
がっかり。

よし、抜いてやる！

第三六三話「桃太郎よ、考えて」（前書き）

＞i11769―573＜

第三六三話「桃太郎よ、考えて」

ここはどこかしら。
人もいない。
あら、猿がいた。
犬もいる。
もしかして、キジもいたりして。いた！
すると、ここは桃太郎さんのお宅近くかしら。
ふふふと、笑って周りを見ると……。

やだあ、鬼ヶ島なの？
しかも、桃太郎は倒れてるし。
だから、言ったのよ。
そんなもの連れてっても勝てないって。
それより、女よ。
「あらー、赤鬼さん。寄ってらしてよ。いい子がいるのよ」
「まあ、青鬼さん、逞しい体ね」

ほら、簡単に捕まえちゃった！

第三六四話「意外と高い！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六四話「意外と高い！」

道の駅にはたくさんの人だ。
肉の串のいい匂いにつらされて長い列。
一本三百円。
家族五人で千五百円。
頬張りながら次の列を見つける。
ここは具だくさんの豚まんが百九十円。
さらにカレーパンの揚げたてが二百円。
熱々をフーフー言いながら食べる至福の時。
美味しい！
そして、食後のデザートはソフトクリームが二百五十円。
お茶も百五十円。
「さて、次は」
パパはついに悲鳴を上げる。
「もう、そんなに食べたらファミレスの方が安い」

第三六五話「ホントに磨いたの」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六五話「ホントに磨いたの」

汚れた窓ガラスを拭く。
まずは雑巾を濡らして拭く。
次は新聞紙を丸めて水分を取るように拭く。
ピカピカになる。
新聞のインクが磨くのに最適。
でも、磨き上げてる私の下で、三つの息子が手型をつけている。
「あー、ダメダメ。触っちゃ」
「僕もできるー」
「あーあー」
仕方ない、息子には雑巾を渡す。
「ママがその後を磨くから」
「うん」

その夜、窓の外を見てパパの帰宅を待つ息子。
「僕が磨いたのー」
窓ガラスに手と鼻をつけている。

第三六六話「本末転倒」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六六話「本末転倒」

「お使いに行ってきてちょうだい」
ママに頼まれた。
「何買って来るの？」
「切手よ」
「お手紙に貼るの？」
「郵便局で切手を買って、ついでに出してきてちょうだい」
「分かった」
「できる？」
「もちろん」
八十円切手を一枚買って貼るんだ。
もらったのは百円玉。
おつりはくれるって。
郵便局の隣に焼き鳥屋。
一本八十円。
いい匂いだ。

郵便局に行かなきゃ。
八十円切手を買うと残りが二十円。
買えないよ、焼き鳥。

「二十円切手ください」

第三六七話「そういう判断なのね」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六七話「そういう判断なのね」

愛校作業だって。

女子中学生は日焼けに気を使うものなのに、この日の当たる午後に草引きなんて。

大体プール掃除が男子、女子は草引きなんてつまんない。

「ヤッホー」

ほら、男子なんて楽しそうに掃除じゃん。

女子はみんなおばさんのようにタオルを頭にかけて黙々と草引き。

やだやだ。絶対つまんない。

「先生、女子がプールやりたい」

「俺もそう言ったんだが」

「えっ？」

「ははは、気にするな」

分かった。

校長の判断は正しいかもね。

第三六八話「悪者扱い」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六八話「悪者扱い」

雨の降る日だった。
水玉の雨傘をさしている間に、母は私を置いて出て行った。
母の手を追いすがったのに、母は車に乗り走り去った。
残された父と私。

ここまで書いてると、後ろから声がした。

「もう、いい加減にしなさい」
「何が」
「あなたの書く日記、いつも被害妄想だわよ」
「だって、私も行きたかった」
「デパートのバーゲンでしょ」
「パパと二人の留守番はつまんない」
「大体そんな日記書いたら、私が悪者に思われるじゃない！」

第三六九話「ポリシーは？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三六九話「ポリシーは？」

昔は壇上に立つ人は、学校代表や地区代表、長と名のつく人ばかりだった。

今、息子が同じように壇上に立つ。
それなのに、なぜか晴れがましい気持ちになれない。

不景気だから議員になるって。

議員さんは高給取りだと知ったから。
人に挨拶もしなかった息子が、今は握手をして回る。
しかも対立候補のゴシップを嗅ぎまわる。

「あなたにポリシーはないの」
思わず声を荒げる。
息子は落ち着いた声で言った。

「ポリシーがあるとダメだって」

第三七〇話「ハンカチでは」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七〇話「ハンカチでは」

今日の洗濯物はなんと洗濯機三杯もある。
大体、何でもかんでも洗濯できると思わないで。
洗うのは洗濯機でも、干すのも畳むのも私なのよ！

「おーい、タオルがないぞ」
「こんだけ洗濯機に入れたら、もうないわよ！」
「だけど、俺裸だぞ、どうするんだ」
「知らないわよ」
朝からシャワーを浴びた夫。

脱衣所を覗くと、何と娘の保育園用の黄色いハンカチで体を拭いてる。

「もう、こんな小さいハンカチじゃ拭いた気にならないよ」
可愛い。

第三七一話「こうなったら」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七一話「こうなったら」

彼女のカラオケの点数が九十三点だ。
俺は面白くない。
一応はニコニコしてるがホントはテンション下がり気味。
なんでって？
バンドやってる俺が八十八点で、書道部の彼女が高得点なんて。
「本気で歌うからな」
「さっきまでは本気じゃないの？」
「ああ、軽く歌っただけさ」
「そう、頑張って！」
そう本気でやってやろうじゃないか。
全力だ。
ロールが鳴り響く。
九十二点！

彼女が歌った。
九十七点！

バンドのボーカルに迷わずスカウトだ！

第三七二話「絶句です！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七二話「絶句です！」

「美子さん、美子さん」
「はーい、どうしたんですか、お母様」
「大変よ、敦夫の絵が入選ですって」
新聞を見ると、確かに出ているお母様の弟の名前。
「わあ、すばらしい」
「絵を習い始めて十三年にもなるの」
「そうですか。お祝い電報でも打ちましょうか」
「この際、高い花柄の電報にしましょう」
その夜。
敦夫おじさんから電話。
「電報をもらったよ」
「おめでとうございます！」
「出品したけどあれは同姓同名の人。僕は落選」
絶句。

第三七三話「忘れられない誕生日」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七三話「忘れられない誕生日」

僕の隣の席の蘭ちゃんは優しいから好き。
「鉛筆折れた」
「はい、どうぞ」
「ハンカチ忘れた」
「いいよ、貸してあげる」
蘭ちゃんはいつもにこにこ。

だから、僕が誘ったんだ。
「明日、僕の誕生日なの。来て」
「うん」
翌日、早起きして教室へ。
でも、蘭ちゃんは休んでいた。

ママと蘭ちゃんの家に行くと、怖い顔をしたおじさんが叫んでる。

「金を返せよ！」

ママが僕を抱きしめた。

僕の手には返しそびれた鉛筆。

蘭ちゃん、いつか会える？

第三七四話「そうなのね」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七四話「そうなのね」

まつ毛のカールをしていたら、兄貴が急にやって来た。
「おい、俺のもしてくれ」
「げっ、なんで」
「どうも顔の印象で決まるんだよ」
「何が」
「入社試験」
「うっそー！」
仕方なく兄貴をドレッサーの前に座らせる。
「ちょっと眉毛も揃える？」
「うん」
おとなしくされるがままの兄貴。
妙に可愛くなる。
色白の顔に眉毛とまつ毛の手入れをする。
私より綺麗かも。

「どこを受験するの」
「おネエの多いプロダクション」

兄貴内股になってる。

第三七五話「母親って」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七五話「母親って」

母の日も過ぎた。
相変わらず連絡もしない。
母からは時々メールが来る。
俺の返事ははいといいえだけ。
面倒なんだよ。
子どもじゃあるまいし。
いちいち何してるか教えるのもやってらんない。
今日は仕事でミスをして、残業して午前二時帰宅。

アパートのポストに手紙が一通あった。
母だ。
元気にしてるから安心して仕事をしろって。
封筒にはちり紙で包んだ一万円札が。
手紙の最後の言葉。

「ときどきは飲むのもいいよ」

ちっ、泣けてきた。

第三七六話「女の友情」（前書き）

＞i11769―573＜

第三七六話「女の友情」

また来た！
友達の結婚招待状。
今年になって、急にどうしたのよ、これで三人目。
みんな一緒に老人ホームに入ろうって固い約束したのは、正月の飲み会だったわよね。
なんで、気が変わったの？
というより、どこで知り合ったのよ。
私にも教えてほしいわ。

貯金通帳からまたお祝いのお札がひらひら飛んでいくのね。
出席しないとも言えないし。
女の友情って儚いわね。

あ、メールだ！
結婚式に彼の独身の友人三人来るって。

よーし！　気合だ！

第三七七話「小学校の思い出」（前書き）

＞i11769―573＜

第三七七話「小学校の思い出」

修学旅行だーい。
小学六年生の思い出に近畿地方へ。
奈良の大仏も京都の金閣寺も見るんだー！
「私ね、初めて汽車に乗るの」
「私もよ」

着いたホテルでまずお風呂。
その後、豪華な夕食を食べる。
一人ずつに御膳の料理。
肉豆腐、海老フライ、茶碗蒸し、しゃぶしゃぶサラダ、アサリの吸い物、そしてアイスクリーム。
班で反省会したら買った物を見せ合うの。

あっという間の三日間。

帰りの車内、聞こえるのは友だちの寝息と先生のいびき。

第三七八話「容疑者？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七八話「容疑者？」

近くのビルで強盗ですって。
やあね、怖いわ。
あのビルに大金があったなんて。
ご近所の人が見に行くって言うから私も行ったの。
みんなは声を掛けられないのに、私だけ警察官が近寄って来たの。
「昨日の午後はどちらにいましたか？」
「は？」
周囲の人もじろじろと私を見るのよ。
嫌な感じだわ。
その話を聞いていた息子。
「母さん、その格好で行ったの？」
日除けのでかい帽子と、ロング手袋、首にはタオル、サングラス。
怪しいわねえ。

第三七九話「失礼ね！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三七九話「失礼ね！」

電話が鳴る。
「はい、河です」
「ただいま大阪に単身用のマンションがお安くありまして」
「お金ないんですぅ」
と言って切る。
また電話がかかる。
「もしもし、奥様今コラーゲンの入った化粧品を非常にお安く提供させていただいてます」
「あ、今、化粧品の訪問販売してますの」
と嘘をつく。
さらに掛かってきた電話。
極め付けです。
「奥様、軽い失禁には大丈夫な安全ショーツ十枚組八千七百円です。今なら二組で一万五千円です」
フン。

第三八〇話「へそくりが」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三八〇話「へそくりが」

へそくりで始めた投資信託。
うん、なかなかいいじゃないの。
高配当の分配金で儲かったわ。
十か月で約七パーセントの儲け。
下がりそうになったから売ったけどすごいわね。

その儲けで買ったバッグ。
うふふ、才能と運があるの。

今度はもっと高い分配金を狙ってみた。

あら、ドンドン値を下げていく基準価格。
あーん、損よ、損！

思わずバッグを売りに行く。

「新品だから一万円」
「嘘っ！　その十倍で買ったのに」
ぐすっ。

悪銭身に着かず。

第三八一話「僕、売れません」（前書き）

＞i11769―573＜

第三八一話「僕、売れません」

セールス八軒目。
ピンポーン。
「はい」
「奥様、お膝の具合はいかがですか」
ガチャ。
出てきたのは八十代後半と思われる女性。
「痛いの。今日も病院行って来たの」
よし、話に乗って来た。
「サポーターは」
「してるの。でも、あまり効き目がなくて」
「そうでしょう。僕はいい薬を持ってます」
「効くの？」
効きますとも。

ふと見ると、玄関に溢れるほどの薬。
同じ薬も二ダースある。

話すこと一時間。

薬を売らずに帰る。

僕成績ビリです。

第三八二話「ピカピカの一年生」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三八二話「ピカピカの一年生」

一年生はベテラン教員が担任。
「私、小さい子が好きでいつか一年を担任したいなあ」
今年採用になった教員が呟く。
校長はそれを聞いて、こう言った。
「いつか担任したらいいね」
「新採の教員は？」
「一年生の親も一年生ってことが多いからな。学校について不安な面がいっぱいなんだよ」
「はあ」
「そんな時に何でも聞いて、何でも答えてくれる先生は頼もしいからな」
「なるほど、そうですね」
ピカピカの一年生は親もピカピカなのね。

第三八三話「作者に聞いて！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三八三話「作者に聞いて！」

大っ嫌いな国語の時間。

「この話のおじいさんはどう思っているかしら」

そんなことは書いた人しかわからん！

「誰に答えてもらおうかな」

みんな言いたくて背筋を伸ばす。
反対に僕は縮こまる。

「はい、けんちゃん」
「ボク、手を上げてないよ」
「でも話せるでしょう？」

こういう時の先生は、何か言わないと許してくれない。

「大きなかぶがみんなの協力で抜けて嬉しいなと思っていたと思います」

心にもないことを言ったからお腹が痛い。

第三八四話「苦手な子もいるの！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三八四話「苦手な子もいるの！」

プールで水遊びだ。

一年生になってから初めてのプール！

「わーい！」

みんなは大喜び。

先生が笑顔でこう言った。

「はい、みんなで水かけしましょ！」

「あーん！　やだやだ！　僕にかけちゃイヤ！」

「先生、泣いてるよ。けんちゃんが」

「僕は濡れるのは好きだけど、水かけられるのは嫌い！」

みんなが楽しんでいる間、僕は風呂に浸かってるように肩まで入る。

「明日は宝探しをするよ。どうする？」

先生が囁いた。

誰かプールの水を抜いて！

第三八五話「本当にそれだけ？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三八五話「本当にそれだけ？」

中学生になって自転車通学をし始めた。
自転車のマナーとか、安全教室の指導も受けた。
「いいかい、駐輪場所以外に置いてはいけない」
「はい」
「傘差し運転や、無灯火を見つけたら即刻自転車通学を禁止。いいな」
「はい」

塾の帰りが遅くなった。
居酒屋の前を通ると、生活指導の先生が出てきた。
千鳥足で自転車に乗った。
僕は後ろから声を掛けた。
「飲酒運転ですよ」
酔っている先生はこう言った。
「奈良漬を食べ過ぎただけだ」
嘘だ！

第三八六話「受付はこちら」（前書き）

＞i11769―573＜

第三八六話「受付はこちら」

近所にあった空き地。
そこへ家が建ち始めた。
子どもたちはサッカー遊びができなくなるし、犬の散歩もできなくなった。
しかも、でかい家で、今まで日当たり抜群だった裏の家の人は不満たらたら。
「こんなに接近して建てなくてもいいじゃないの！」
そして引っ越し当日。
どんな人が隣に来るかと思ったら、超有名な芸能人。
ご挨拶に来ると腰も低くていい感じ。
しかも、サインまで。

今ではすっかり記者への窓口となってますの。

並んで！

第三八七話「大人でしょ！」（前書き）

＞i11769―573＜

第三八七話「大人でしょ！」

眠れない。

ママはもう一人で寝なさいって、最近僕一人で寝るようになったの。

もう一年生なんだからって。

一年生と幼稚園でこんなに違いがあるなんて。

背丈も変わってないのに。

どうして急にお兄ちゃん扱いするんだよ。

弟や妹もいないんだから、別に甘えさせてくれてもいいんじゃないの？

それよりも気に入らないのはパパだよ。

六才が一人で寝てるのに、なんでパパがママと一緒に寝てるんだよ！

もう三十五才なんだから一人で寝ろよ！

第三八八話「何着ていこうか」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三八八話「何着ていこうか」

さあ、参観日よ。
何を着ていこうかしら。

白のシャツブラウスに紺のタイトスカート。
これじゃ、私が先生みたいだわ。
じゃ、豹柄のカットソーにレギンス。
これじゃモンスターペアレントと間違われそう。
そうねえ、大きな花柄のワンピース。
息子が『お前のママ派手だな』って言われるかしら。
ならば、和服。
何だかオーバーね。

「用意はまだ？」
「あら、あなた、ポロシャツなのね」
そうね、ポロシャツにチノパン。
私もそうしようっと。

第三八九話「恋の季節」（前書き）

＞i11769―573＜

第三八九話「恋の季節」

彼女に想いを伝えたい。
いつも僕の家の前を通る素敵な人。
僕より少し年下だと思うけど。
優しいまなざしに、白いうなじ。
レースのパラソルがよく似合う。
ちょっとお茶でも誘いたい。
どうやって話しかけたらいいのか、不器用な僕は分からない。
でも、彼女がケータイを持っているのを見た。
電話番号を教えてくださいなんて言えない。

「どうしたの？　何か悩みでもあるの？」
娘が聞いてくる。
「いや、別に」
僕は九十二歳、恋をしている。

第三九〇話「祈り」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三九〇話「祈り」

娘が三歳になった。
浴衣を買って着せてみる。
「なんて可愛いの」
「うちの子が一番可愛いなあ」
夫婦で写真を撮りまくり、写メールでお互いの親たちにも見せまくる。
すると、これまた『孫が命』のじじばばが電話を掛けてくる。
「うちの孫が一番可愛いのう」
「近所の人にも見せたわよ」
そうよ、みんなが愛する子どもたち。

それなのに、虐待で死ぬ子どもの話が後を絶たない。

神様、欲しくてたまらない夫婦に赤ちゃんを授けてください。

第三九一話「忘れてました」（前書き）

＞i11769―573＜

第三九一話「忘れてました」

「あーした天気になーれ」

足を思い切り振って、靴を飛ばす息子。

「ママ、晴れだよ」

「そうね、遠足だしよかったね」

何回も楽しそうにやるもんだから、私もついやってみたくなった。

スカートだけど誰も見てないし。

公園で息子と二人だけだし。

「あーした天気になーれ」

振り上げるはずだった。

靴は遠くに飛ぶはずだった。

破れたスカート、地響きのような音。

タイトスカートだったこと、すっかり忘れてた。

息子と同じ蒙古斑ができた！

第三九二話「台風」（前書き）

＞i11769―573＜

第三九二話「台風」

台風が近づいて来る。
この妙にわくわくする気持ちはなんだろう。
このまま、学校も臨時休校になるかもしれない。
ニュースでは明日の朝来るって言ってる。
インフルエンザも終わったし。
臨時休校となるのは台風のときだけ。
そんな気持ちで雨戸を閉めた。
宿題もやってなくても休校ならいいか。
これだけ降ってりゃきっと無理だ。
もう寝てしまおう。

ピピピピピ。
小鳥が鳴いてる。

「えええええっ！！」

台風はどうした！
もう通過しただと！

第三九三話「泣いてもダメだよ」（前書き）

＞i11769―573＜

第三九三話「泣いてもダメだよ」

みっちゃんと一緒に幼稚園でおだんごを作った。
「いいもの持ってきたの」
みっちゃんの手には可愛いピンクのふたのお弁当箱。
「ママが銀行で貰ったの」
「へえ、どうするの」
「このおだんごを入れてみようか」
「うんうん」
二人でタコ焼きぐらいのおだんごを並べると六個入った。
「おいしそうね」
「そうだね」
「草も散らしたら青ノリみたいだね」

「僕も食べたーい」
ひよこ組の子がタコ焼きが欲しいって泣いてる。
これは違うんだよぅ！

第三九四話「勇気がいるの」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三九四話「勇気がいるの」

立飲みの居酒屋でバイトを始めた。
いつも仕事帰りのサラリーマンやＯＬが来る。
「へーい、いらっしゃいませ！」
このところ、サマータイムらしくて退社が早いのだ。
でも、そのままは帰りたくないらしい。
生ビールと軽く干物などを焼いたものを飲んで帰る。
こちらは単価の高いものを薦めたい。
「熱々のフライなどいかがですか」
「ダメ、夕飯は家だから」
「やっぱり奥様の手料理が一番ですか」
「違う、一杯ひっかけないと帰れないの」

第三九五話「周到な計画」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三九五話「周到な計画」

お母様と温泉に行く計画を立てているの。
「お母様、草津温泉はどうかしら」
「美子さん、この有馬温泉もいいと思うわ」
「そうですね。日本全国いっぱいあるから迷っちゃいますね」
「ねえねえ、北海道もいいわよ」
「わあ、初夏の北海道、いいですねえ」
「九州もいいわね」
「ホント」
そこへ夫がやって来た。
「えっ、どこへ行くつもり？」
「日本全国よ」
「へ？」
「時刻表見ながら計画だけを立てているの」

「プレッシャーを感じるなー」

第三九六話「確かに外です！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三九六話「確かに外です！」

「今晩は外でお食事しましょう」
「わーい、やった～」
大喜びする子どもたち。
どこかに行くか、何を食べるか嬉しそうに相談中。
「ビールが飲めるところがいいなあ」
と、パパが注文を出す。
「私は和食がいいよ」
おじいちゃんは刺身定食あたりが食べたい様子。
せっせといつものように台所に立つママ。
「ママ、外に食べに行くんでしょう？」
「そうよ」
「なんで、おかず作ってるの」
「早く、外にテーブル出して」
「庭？」
「外でしょ！」

第三九七話「山田一郎です」（前書き）

＞i11769―573＜

第三九七話「山田一郎です」

待ち合わせの正門。
初めて一緒に帰るの。
告白されちゃった。
私の大好きな野球部キャプテンから。
嬉しくてドキドキ。
それなのに、大事な時に学校放送がかかる。
「一年三ホームの山田さん、至急職員室へ来るように」
どうしてこの大事な時に呼び出すのよ。
一体何したって言うの。
イライラするけど、仕方ないわ。
職員室へ入る。
「ああ、山田！　こっちこっち」
「何でしょうか」
「悪いけど、男子駅伝の人数が足りん。よろしく！」
チェッ。

第三九八話「手際がいいのね」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三九八話「手際がいいのね」

「あなた、掃除機かけてよ」
「二日酔いで気持ち悪い」
「私も働いているんだから、家事は分担する約束でしょ」
「わかった、明日から」
「明日は二人とも仕事でしょ。じゃ、夕飯作ってね」

翌日。
明かりの消えた家。
「ズルイ！　また私なの？」
家に入るといい匂い。
炊飯器の予約機能で炊き込みご飯が出来上がり。
夫が帰宅。
レタスと新玉ねぎを皿にのせ、マグロを乗せる。
カルパッチョだ。
彩りが綺麗。
麺つゆにエノキで澄まし汁。
美味い！

第三九九話「女の底力」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第三九九話「女の底力」

さあ、保育園の運動会だって。
「張り切るぞ！」
「パパ、頑張ってね」
「任せとけ！」
いよいよ、風船割りだ。
パパが膨らませ抱き合って親子で割るゲーム。
「はい、パパ」
渡された風船一つ。
「ぷ～」
これが膨らまない。
やたらと固い。
「おかしいな」
「パパ、早くったら！」
「そんなこと言ったって」
「ぷ～」
イライラしていたママが走って来た。
「貸して！」
ピューッ！
あっという間に膨ませ、息子とパンと割る。
園庭に孤独なパパ一人。

第四〇〇話「忘れ物はないのね」（前書き）

＞i11769―573＜

第四〇〇話「忘れ物はないのね」

「授業参観は図工だったわね」
「そうだよ、ママ」
「忘れ物はないでしょうね」
「大丈夫だよ」
さて、図工の時間。
「あれ、はさみを忘れたの」
クラスで一人だけ言われてるのは我が息子。
あれほど忘れ物はないかって聞いたのに。
「では、色鉛筆を出しましょう」
どうしたのよ、もじもじして。
ないの？
よかった、あるのね。
「先生、僕の全部折れてるの」
優しい先生の顔も引きつって来た。

息子よ、楽しそうに色鉛筆を削るのはよしなさい！

第四〇一話「幸せ者」（前書き）

>i11769—573<

第四〇一話「幸せ者」

「一つ、二つ、三つ……」
はい、いつもの話ね。
一年生が通知表をもらうとみんな数えるの。
「僕は二十三個」
「私も」
そう、よかったね。
〇の数は一緒なの。
×はないの。
違うのはね、どこにその〇がついてるかってことなのよ。
よくできたという項目に〇がついてると、親は喜ぶわね。
もう少しについていたら、少し叱られるかもしれないわね。
よくできるりかちゃんは気がついたみたい。
二十三個で喜んでるけんちゃん、貴方は幸せ者ね。

第四〇二話「僕にも来ました！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四〇二話「僕にも来ました！」

部活の後、忘れ物して教室に行く。
書記の佐々さんがいた。
「何してるの？」
「文化祭の会場決めてるの」
「へえ、執行部は？」
「さっき塾やら家庭教師で帰ったとこ」
「手伝おうか」
「でも、もう遅いよ」
「それは僕の台詞でしょ」
首をすくめる佐々さん。
「模擬店の会場が足りないの」
「お化け屋敷を理科室にしたら？」
「そうだね。剣道部のバザーは？」
「それ、部室前でいいよ」
「ホント？」
「うん、来てよ」
「絶対行く」

僕にも春が！

第四〇三話「ホラ吹きです」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四〇三話「ホラ吹きです」

「もしもし、河様のお宅ですか」
「はい」
「今なら、大阪の一等地にマンションがお安く出ております」
「はあ」
「ご投資にも最適かと思います」
「おいくら」
「今なら二千万クラスからございます」
「お安いわねえ」
「そうでしょう。こういうご投資に興味はございますか」
「ええ、あんまりお安いのはどうも」
「それでしたら、芦屋方面に億ションがございますが」
「いいわねえ、お小遣いで買おうかしら」
ここまでくると、相手が切るの。

第四〇四話「一度で分かるから」（前書き）

＞i11769―573＜

第四〇四話「一度で分かるから」

妻の背中が曲がってる。
「なんだよ、腰が曲がってるぞ」
「痛いのよ、草引きしたから、草引きを！」
「ふーん」
「広い庭だし、草引きする人が私だけでしょう？　私だけ！」
「まあ、そうかもしれないけど」
「そうかもしれないではなくて、そうなのよ。そうでしょう！」
「あ、ああ」
「あら、どこへ行くの？」
「いや、息抜きにパチンコでも」
「あら、別に家にいるのに息抜きがいるの？　息抜きが」
「う、うん、まあ」

繰り返しの棘が嫌いだ！

第四〇五話「こうするしか」（前書き）

＞i11769―573＜

第四〇五話「こうするしか」

葬式などで頂いたタオルが増え過ぎて、古いタオルは交換しようっと。

これは薄いし、こっちは繊維がほつれてるし。

どんどんゴミ袋へと入れていく。

「美子さん、そのタオルを小さく切って雑巾にするから」

「お母様、使い捨てにするんですか」

「そうよ」

二人で全て鋏を入れていく。

その夜、風呂に入ろうとした夫がタオルがないと怒ってる。

「あるでしょう、いくらでも」

「風呂にはあの薄いのがいいの！」

仕方ない。

「お背中流します」

第四〇六話「二人の子です！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四〇六話「二人の子です！」

「さあ、本読みしましょ」
「うん」
「ママに聞かせて」
「うん、このページだよ」
「大きなかぶのお話ね」
「そうだよ」
大きな声で暗記してるから本もろくに見ない。
「ねえ、字を見て読んだら？」
「僕、頭いいから覚えちゃったの」
「それはどうも。ママに似たのね」
「計算カードの足し算と引き算もあるでしょ」
渋々出して来たけど、繰り下がりのある引き算がとっても遅い。
「頭いいと思ったけど僕悪いみたい」
「残念、パパに似たのね」

第四〇七話「誰かに似てるわね」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四〇七話「誰かに似てるわね」

「ねえ、ママ」
「なあに」
「もしもしカメよっていう歌があるでしょう」
「うん」
「なんで、電話かけてるの？」
「はい？　別に電話かけてるわけではないと思うけど」
「だって、傍にいたら、どうしてもしもし言うの？」
「ねえねえくらいの意味じゃないの？」
「そしたら、ねえねえって言えばいいじゃん」
「そうね、でも歌ってみて変よ」
♪ねえねえかめよ、かめさんよ～
「ほらね」
「どっかで聞いた感じ」
「そうね、酔った時のパパだわね」

第四〇八話「ひとりぼっち」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四〇八話「ひとりぼっち」

高校生の息子たちが朝からドライヤーを片手に洗面所から出てこない。

「ちょっと、早くしなさい」

「待ってよ、朝の髪が一番大事なの！」

「男でしょう、いいわよ、どうでも」

プンプン怒りながらこう言う。

「まったく、息子の気持ちを理解してないね」

「はいはい、ごはん食べなさい」

すると、二階から夫の声。

「おーい、ワイシャツのボタンが取れた」

「自分でして」

「やってよ、髭剃ってるから」

「もう！」

あの頃が幸せだったんだわ。

第四〇九話「イクメン」（前書き）

＞i11769―573＜

第四〇九話「イクメン」

ママ友たちで公園でおしゃべりしていると、一人の男性が子どもを連れてやって来た。

少しと離れたところで一歳位の子どもをベビーカーから降ろす。

「おはようございます」

声を掛けると、どぎまぎした様子で挨拶を返して来る。

「おはようございます」

「パパの公園デビューですか？」

「保育園が見つからなくて僕が交代で育児休暇です」

ママたちは一斉に拍手。

彼のバッグからはお絞り、湯ざまし、おやつ、着替えが。

ママたちより完璧！

第四一〇話「作戦は？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四一〇話「作戦は？」

ここは一年一組だ。
音楽の時間に先生が言った。
「もう、きらきら星はできると思うからテストします」
「できるよ」
「かんたーん」
みんな嬉しそう。
でも、僕は……。

早速トイレ脱出作戦。
「先生、お腹が痛い」
「大丈夫？　トイレへ行ってらっしゃい」
トイレで時間つぶし。
ついでにうんこもした。
スキップしながら教室へ戻る時に隣も覗く。
あ、算数のテストしてる。
ふーん。

戸を開ける。

「待ってたわ。君の番よ！」

待たなくていいのに。

第四一一話「何しても素敵」（前書き）

＞i11769―573＜

第四一一話「何しても素敵」

「行ってきまーす」
傘を開くと、糸留めが一つ外れている。
ああ、もう急いでいるのに。
仕方ない。
バス停で憧れの生徒会長に会う。
しまった。
「おはよう」
「おはようございます」
恥ずかしい。
「あの、急にはずれちゃって」
「何が？」
「いや、あの、その、傘のこれ」
ついつい言い訳がましく説明する。
「あ、そうか」
そうよね、つまんない話題。
「僕はうちの旅館の傘」
「え？」
見るとでっかい旅館名。

気取らない会長、やっぱり好き！！

第四一二話「弟に続け！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四一二話「弟に続け！」

家族でカラオケに。
リモコン操作は僕。
「おばあちゃんはこれだろ」
美空ひばりの哀愁出船。
「パパはこれだね」
サザンの真夏の果実。
「ママはこれ」
松田聖子の赤いスイトピー。
「弟はダンス付き」
マルモだよ。
「お兄ちゃんは歌わないの？」
家族の前で歌ってもなあ。

だが、弟の曲が始まると家族全員起立して踊り始める。
ばっちり踊れるのは小学3年生の弟だけ。
クラスでは女子が並んでやっている。
今日はこれを自分のものにするぞ！！

第四一三話「妻の言い分」（前書き）

＞i11769―573＜

第四一三話「妻の言い分」

しまった、また傘を置いてきちゃった。
あれは妻に高かったのよと言われたもの。
どうしよう。
どこに置いたっけ。
朝降っていても、途中で止んでしまうと忘れるんだよなあ。
電車に乗る時は持っていた。
改札口ではなかった。

「あなた、あの傘は？」
「うん、忘れてきたみたい」
「高かったのに」
「いくらだい」
「二千八百円」
「安いじゃないか。お前のは？」
「九千八百円」
「随分高いじゃないか！」
「だって、あなたは失くすでしょう？」

第四一四話「余計なお世話だ！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四一四話「余計なお世話だ！」

今日は焼肉だ。
「美子さん、野菜はあるかしら」
「お母様、庭のピーマンとナスとコーンが収穫できます」
「それはいいわね」
「隅っこに植えたニラも」
「じゃ、キャベツと椎茸、こんにゃく、もやしを買えばいいかしら」
そこへパパ登場。
「肉がメインでしょう」
「パパが買ってきてよ」
「えーっ、なんで？」
「この前パチンコで勝ったでしょ」
「げっ、誰から？」
「隣の旦那さんがパパが勝ってたって羨ましがってたの」
「余計なことを！」

第四一五話「誤解です！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四一五話「誤解です！」

バイトに行かなきゃ。
でも、こんな大雨の日って嫌だ。
電話して休む理由を話しても、
「分かった。早よ来い」
と店長の言葉。
見破られてるのか。
仕方ないな。
そう言えば今までの休みは、全て雨の日だった。
両親の危篤も使ったし、おばあちゃんは二度事故に遭ったことになってるし、弟も行方不明にしたし。　流石にこれ以上はバレるわな。
バイクで飛ばして行ったら、店の前で転倒。
見事に右足骨折。
店長曰く。
「そこまでして休みたいか」

第四一六話「家計に優しいのは？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四一六話「家計に優しいのは？」

暑いです。
ふと、温度計を見ると室内で三十二度。
うー、耐えられないけど、この時期節電対策でエアコンは控えたい。
仕方ないから近くの大型スーパーへ。

「あら、安いわね。このワンピース」
「おや、こっちもいいじゃない」
「帽子もいるわね」
「サンダルも涼しい感じ」

お腹も減ったし、ちょっと軽食コーナーで焼きそばを。
喉も乾くしアイスコーヒーも。

その夜に家計簿をつけて思った。
適度のエアコンつけて家にいる方がいいみたい。

第四一七話「ごめん」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四一七話「ごめん」

彼女からのメールはいつも絵文字がいっぱい。
僕はそんなに書くことがない。
彼女は学生だけど、僕はもう働いている。
仕事でパソコンばかり見ていると、流石にもう画面は要らないって感じ。
そんなに楽しいこともあるわけではないし、笑えることも少ない。
だから「了解」「はい」「わかった」を使っていた。
すると、彼女からこういうメールが来た。
『今日の天気は』
「晴れだろ」
『明日の天気は』
「何だよ」
『他の字も知ってるのね！』

第四一八話「私はママよ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四一八話「私はママよ」

ここは保育園。
僅か三歳でも、しっかりと慰める姿が愛おしい。

「わーん、ママがいないの」
「大丈夫、なっちゃんがママになってあげる」
「ホント？」
「うん」
でも、なっちゃんは好き嫌いが多い。
「ママはピーマン食べないの？」
「うん、あなたにあげる。ママは我慢するの」
そう言って、ピーマンをせっせとくれる。
園長先生が見つけた。
「ダメよ、食べなきゃ」
「この子の栄養が心配で」
「ママの方が小さいわ。遠慮なく食べなさい！」

第四一九話「パパ、やめて！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四一九話「パパ、やめて！」

パパが風呂場で歌ってる。
ひばりという人の『柔』なんだって。
もう恥ずかしいんだけど。
微妙に音程がずれてることにパパは気づいていない。
「勝ーつとー思ーうなー思えば負けよー」
ほら、負けよで下がっちゃダメでしょ。
お風呂って自分は気持ちいいけど、周りは大迷惑なんだよ。
ドタドタ、ほら、お姉ちゃんが怒って降りてきた。
「ママ、パパに歌うの止めさせてよ」
「なぜ」
「音程が狂う度に、ガクッとなるから鉛筆も折れちゃう」

第四二〇話「浴衣は着たけど」（前書き）

＞i11769―573＜

第四二〇話「浴衣は着たけど」

お母様がデートみたいよ。
昨日から浴衣のコーディネート。
紺色の地に小菊がちりばめられた浴衣に、えんじ色の半幅帯。
黒塗りの下駄に鹿の子模様の鼻緒。
衣紋を抜いて素敵に着付けるお母様。
「うっとりしちゃいますよ」
「あら、そうかしら」
ぽっと頬を染めていそいそと八幡宮に。
「パパ、私も行きたいわ。夏祭り」
「行こうか」
「浴衣着てくる」

待ちくたびれたパパと息子はソファでスヤスヤ。

浴衣は汗でびっしょり、化粧も落ちたわ。

第四二一話「こんなことがあるなんて！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四二一話「こんなことがあるなんて！」

信じられない出来事が。
いつものようにジムに行く。
ロッカーを開ける。
何もないはずだ。
向こうで光る二つの目。
目が合った。

しばし、沈黙。

「んぎゃあああああああ！！」
慌てるジムの客たち。
「どうしたんですか？」
「ね、ネズミがいる！」
飛び逃げる女性客。
震えながら受付に走る。
スタッフもびっくり仰天。
小さいネズミではあるが、ネズミはネズミ。

なぜ、鍵を閉めてるのに入るの？

あれから、ロッカーは少しずつしか開けません。

第四二二話「順序を守って」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四二二話「順序を守って」

幼稚園に行く通園バスを待っていると、ご近所のおばあさんもやって来た。

「おはようございます」

「おはようございます」

黄色のキリンバスは幼稚園へ行くよ。

すると、後ろにもう一台バスが来た。

「あれ、あのバスは何のバス？」

「私が乗るのよ」

「えっ、おばあちゃんも乗るの？」

ニコニコ笑いながらお嫁さんとおばあちゃんが頷いている。

「どこ行くの？」

「デイサービスよ」

「ママ、僕もデイサービスに行きたい」

「それはママが先」

第四二三話「褒められてもねえ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四二三話「褒められてもねえ」

今日は夏祭り。
初めて着た浴衣は、体に貼り付いてめちゃくちゃ暑い。
しかも、下駄の鼻緒がきつくて痛い。
素足に下駄は定番だけど、既に皮がむけてきた。
彼は甚平ルックで涼しそう。
私もそっちにすればよかった。
「どうしたの」
「ちょっと疲れて」
「じゃ、あの河原で休む？」
「うん」
河原は等間隔でカップルが座ってる。
いい雰囲気。

と思ったら、酔っ払いが隣に寝転んだ。

「綺麗だねえ、姉ちゃん、ヒック」

あんたに言われてもねえ。

第四二四話「それほど言うなら」（前書き）

＞i11769―573＜

第四二四話「それほど言うなら」

「あーん、喉が痛いよ」
「やだ、昨日窓を開けて寝たから風邪ひいたのかしら」
「ママ、今日は幼稚園お休みするぅ」
「はいはい、まずは熱を測りましょう」
体温計で計ると三十七度。
これは微妙な温度ね。
熱があるようでないようで。
「でも、今日は夕涼み会もあるのよ。休む？」
「えっ、忘れてた。金魚すくいもあるって」
「熱があるし、喉も痛いって先生に電話するわ」
「ちょっとママ、僕がんばれそう」
「無理は禁物」
「頑張らせて～」

第四二五話「ホントはね」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四二五話「ホントはね」

隣の席の山田君、今日も遅刻だ。
「また遅刻よ」
「朝のテレビ小説見ないと便秘になる」
「あんなの見てるの？」
「いいよ、泣けるし」
「でも、遅刻し過ぎ」
「仕方ないさ」
「どうして」
「低血圧だから早起きできない」
「一体いくつよ」
「十四」
信じられない。

でも、山田君のお陰で助かってるんだ。
私って何やっても遅いの。
「これ出しといて」
いつも早くできる山田君。
一緒に提出すると、私が待ってあげてると先生は思ってるみたいよ。

第四二六話「一つ安ければいいの」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四二六話「一つ安ければいいの」

お母様と近くのスーパーへお買物。
「美子さん、一人一パックだから卵買いましょう」
「トイレットペーパーもそうですよ」
「今日はそれがメインね」
「ちょっとお母様」
「なあに」
「あと三〇分でタイムサービスですって」
「何が安いのかしら」
「コロッケですって」
「一個七〇円よ」
満足して帰ると、夫がこう言った。
「僕のステテコは？」
「あ！」
「それ買いに行ったんでしょ」
「いいじゃないの、コロッケ買ったし」
「意味分からん！」

第四二七話「食べられるかなあ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四二七話「食べられるかなあ」

雨が降りそうなのに、遠足だって。

「明日、もし雨が降ったら学校でしますから、その時は勉強と遠足の用意をしてね」

先生はこう言った。

ママはきっと勉強なんてしないわよって言うけど、あの先生は甘くない。

リュックサックにお弁当、お菓子、おしぼり、シート、それに筆箱、算数と国語の準備。

絶対つまんない！

肩から水筒を掛けて、僕は二宮金次郎みたいだ。

雨が降って来た。

先生があり得ない提案を。

「一問解けたらお菓子だって」

第四二八話「あるじゃん！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四二八話「あるじゃん！」

扇風機を買いに行った。
いつもはズラリと並ぶ扇風機が棚に無い！
「今はこの二台しかありません」
そう言われて二台を見る。
これしかないなら仕方ない。
どちらかを選ぶしかない。
やたら安いのと高いのしかない。
そんな時は高いのを選ぶよね。
だって、壊れたら困るでしょう。
「こっちの高い扇風機にします」
「はい、九八二〇円です」
一万円でお釣りが来たからいいか。
店を出て乾電池を買い忘れたと気付く。

店に戻る。

あれ？　また二台！

第四二九話「若さは何処に」（前書き）

＞i11769―573＜

第四二九話「若さは何処に」

生ビールと枝豆と焼き鳥を注文する。
立って飲むなんてあり得ないと思っていた。
一人帰るアパートもつまらない。
ちょっとのつもりが毎日に。
「この一杯がたまらないよなあ」
「ホント、昔はおじんくさいと思ったがなあ」
「ああ、都会だけだぜ、こんな立飲み」
「そうそう、田舎じゃ絶対ない」
「都会の生活に慣れてきたのかねえ」
「あーあ、なんで都会に憧れたのかなあ」
「そうだね、通勤もしんどいのになあ」
これでも新入社員なのだ。

第四三〇話「愛しいあなた」（前書き）

＞i11769―573＜

第四三〇話「愛しいあなた」

あなたのすることをいつも見ている私。
腹を立てている時も、拗ねている時も目で追うの。
寝ている時でさえ、あなたを見つめていたい。

時には邪険に私の乳首を噛むあなた。

「痛い！　やめて！」

でも、あなたはニヤッと笑って乳首を外さない。
そんなニヒルなあなたが好き。
どこへ行くにも私はあなたと一緒。
ずっとずっと愛してる。

あなたが泣くと、私も泣きたくなる。
この頃は私を寝かせてくれないから困っちゃう。
オー、マイベビーよ。

第四三一話「忙しい朝」（前書き）

＞i11769―573＜

第四三一話「忙しい朝」

朝から庭で草引きをするお母様。
「お母様、精が出ますね」
「ええ、早く目が覚めちゃったから」
すると、お隣の奥さんがこう言った。
「あら、お母様一人で草引きなの？　お嫁さんはしないの？」
ムッときた。
するわよ、します。やればいいんでしょう。
軍手とタオルと帽子を出していると、息子がトイレから叫ぶ。
「ママ、トイレットペーパーがない！」
「はいはい」
やがて、夫が叫ぶ。
「おい、パンが焦げてるぞ」
「はーい」
朝は忙しいの！

第四三二話「アイデアの勝利」（前書き）

＞i11769―573＜

第四三二話「アイデアの勝利」

息子が水を怖がるから風呂場で特訓。
「シャワーハットはプールでは使えないの」
「いやだ、水が目に入る」
「ちょっと待ってて」
早速ミルクの空き缶に穴を開けた手作りシャワーを持って来る。
「これ何？」
「これはね、水を入れたら、ほら、穴からシャワーが出るの」
「面白そう」
「この缶を頭の上で持ってて、ママが水を入れるからね」
手が塞がって、水が顔に降り注ぐ。

「うわ〜ん」

「すごいじゃない。できたわねー」

得意満面の息子。

第四三三話「ひがまないで」（前書き）

＞i11769―573＜

第四三三話「ひがまないで」

初の賞与が出たからって、娘が日傘を母親に買った。
「ママ、白い傘もお洒落だけど、黒い方が紫外線を通さないって」
「あら、そう。黒のレースが高そうね」
「そう、高かったわよ」
「ありがとう」
その話を横で聞きながら、私は面白くない。
何で父親にはないんだ。
何で母親なんだ。
「パパ、どう？」
「高い物を買って、少しは貯金でもしたらどうだ！」
と嫌味の一言。

夕方、私宛に酒が届く。
あの幻の焼酎。
娘からだ。

こ、言葉が出ない。

第四三四話「僕のプールでしょ？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四三四話「僕のプールでしょ？」

庭に子どものプールを出した。
空気入れがない。
仕方がないわ。
私が空気を入れましょう。
フーフーッ。
「ママ、まだ？」
「ちょっと、待って。もうママ頭が痛いわ。パパ代わって」
「なんだよ、こんな小さいプールの空気ぐらい。しっかりしろよ」
と言いつつ、パパが挑戦。
パパの顔が真っ赤から真っ青に。
水を入れると裸のパパが一番に。
「パパ、僕も入りたーい」
「よし！」
パパが立ちあがると水がない。
「あ、すまんすまん」
うわーん。

第四三五話「暑さは体重に比例？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四三五話「暑さは体重に比例？」

扇風機に向かって声を出している息子。
「あ〜あ〜あ〜」
「ねえ飽きない？」
「あきな〜い〜」
声が震えるのが楽しくて仕方ないみたい。
「ママが九九を聞いてあげるから」
「にんがし〜〜」
「真面目にやりなさい！」
「は〜い〜」
「扇風機を止めなさい！」
「じゃ、クーラー付けて」
「ダメ！」
でも、室温は三十二度。
「暑い！」
扇風機をつけてスカートの中に入れるママ。
「ズルイ！」
「太腿があなたの四倍あるんだから〜」
「スゴッ！」

第四三六話「紫外線から守ったら……」（前書き）

＞i11769―573＜

第四三六話「紫外線から守ったら……」

こう暑いと自転車通学が堪える。
首に巻く冷却スカーフとやらを母が二枚買ってきた。
早速学校へつけていく。
隣の男子が呟く。
「なんか、おばさんだなあ」
「放っておいて！」
アセモが出るよりいいわ。

翌日、紫外線に負けてキャディーさんの帽子とやらも被る。
隣の席の男子が一言。
「おい、段々ひどくなってねえ？」
「フン」

さらに次の日、日除けの肘までの手袋も。
それを見た男子がびっくりした。
「お前、うちの母ちゃんとおんなじ」

第四三七話「確かめてみましょう」（前書き）

＞i11769―573＜

第四三七話「確かめてみましょう」

血液型占いの本を読む。
憧れの先輩に聞く。
「ねえ、先輩、血液型は何型？」
「僕はO型。君は？」
「おんなじです」
これじゃ、つまらない。
血液型一緒だったら読んじゃったもん。

それならと星座占いの本を持って行く。
「先輩、何座ですか」
「僕？　射手座。君は？」
「おんなじ」
どこまでも一緒か。
これじゃ、占いの本を見ても同じことよね。

すると、先輩がこう言ったの。

「ホントに性格が似ているかどうか付き合ってみない？」
わおー！

第四三八話「新聞読んでるのではないのね？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四三八話「新聞読んでるのではないのね？」

地区の図書館に行くと、大体同じ顔ぶればかり。
その中で、いつも開館と同時に入るおじいさんがいる。
新聞コーナーに近寄り、本日付の新聞を読む。
大体、大手から始まり、最後は地元紙の故人欄で終わる。
時折、知人を見つけると「早過ぎる」と呟いている。
いろいろな面を全て読破するから、一日仕事なのだ。
きっと知識欲旺盛なおじいさんだから物知りだろう。
すると受付カウンターに行き、こう話しかけた。
「今は昭和何年ですか？」

第四三九話「歯が痛いってば！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四三九話「歯が痛いってば！」

お母様が歯が痛いとベッドで寝ている。
「どうしましょうか。今晩のおかず」
「美子さん、おかゆにして」
「それでは元気が出ませんねえ」
「いいの」

すると、夫が高松に出張で瓦煎餅を買ってきた。
この固さは尋常ではない。
「あれ、お袋の好きな瓦煎餅だよ」

「だめ、それを食べたら今は死ぬわ」

息子は保育園の夕涼み会でリンゴ飴を買ってきた。
「おばあちゃん、食べようよ」

「ありがとう。今日に限ってみんなお土産固いものばかりね」

第四四〇話「僕じゃないよ！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四四〇話「僕じゃないよ！」

観光バスのトイレは使わせてもらえない。
おじいちゃんは買い物や写真を撮ってばかり。

さあ、出発という時に突然おじいちゃんが叫んだ。
「運転手さん、孫がおしっこって」
「えっ？」
「いやあ、そうか、おしっこか」
訳も分からず、運転席に連れていかれた。
運転手は仕方なくトイレを使用させてくれるって言った。
僕はなぜかトイレに行く羽目に。
その後おじいちゃんがトイレに入って十五分。

本当は誰が行きたかったのか、皆理解した。

第四四一話「ラジオ体操第一」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四四一話「ラジオ体操第一」

近所の公園で始まったラジオ体操。
「さあ、みんなラジオ体操をするから広がってちょうだい」
「おばさん、そんな真面目にやらなくていいからハンコちょうだい」
「何言ってるの！　さあ、音楽掛けるわよ」

ラジオ体操第一ヨーイ！
ところが、誰もできない。

「えっ、知らないの？」
「準備体操は屈伸とかアキレスを伸ばしたりするんだよ」
「見てなさい！」

帰ってこない嫁を探しにお母様が公園へ。
「あら、美子さんだけのラジオ体操なの？」

第四四二話「聞くのも飽きるの」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四四二話「聞くのも飽きるの」

音読を聞いてくれってうるさいのよ。
どうしてこんな宿題出すのよ。
真面目に読む訳ないでしょ。
五年生なのよ。

でも、なぜか、うちの息子は読むのよ。
嬉しいかって？
おんなじ話を毎日聞く身になってよ。
「じゃ、読むからね」
「ねえ、ちょっと語尾を換えて読んでよ」
「どういうこと？」
「文の終わりをかもしれないにしてよ」

「やだなあ。読むよ、銀河鉄道の夜かもしれない」
「うん」
「宮沢賢治かもしれない」
これなら飽きがこないわ。

第四四三話「それって気のせいかしら？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四四三話「それって気のせいかしら？」

健康診断の日。
朝から何も食べてない。
こちらは受付。
「それでは病衣に着替えてください」
うーん、誰が着ても似合わないわね。
さあ、腹周り計るって。
う、八十五センチだって。
でも小太りがいいって、新聞に書いてたわ。
身長、体重、血圧、ここまでは許せる。
なんで血を採るの、三本も。
イタタタ。
そして、先生の診察。
イヤそうに心音を聞き、つまらなそうに肺の音も。
「はい、次の方」
美しい二〇代が入る。
先生、時間が長いわよ。

第四四四話「パパ大丈夫？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四四話「パパ大丈夫？」

雨が降ってるから、退屈だ。
「ママと図書館に行こう」
ママが連れていってくれたよ。
夏休みは人がいっぱいだ。
ママは料理の本と推理小説だって。
どれにしょうかなあ。
僕の好きなウルトラマンにしよう。
宮西さんって人が描いてるの。
面白いよ。
『おとうさんはウルトラマン』なんて最高だよ。
夜、パパが読んでくれたけど、僕よりウケてたよ。
「明日貸して、会社で見せる」
「えっ、絵本持って行くの？」
お仕事できてるか心配になった。

第四四五話「僕は計画中です！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四四五話「僕は計画中です！」

「もういーくつねると～」
「早過ぎだと思うけど」
「しのちゃんはお誕生日にゲームもらったって」
「あなたも誕生日にレゴもらったでしょう」
「五月で終わったし、サンタさんにはゲームをもらうし」
「そんな話はサンタさんには届かないと思うわ」
「なぜ？」
「サンタさんも世界中に子どもがいるから苦労してるわ」
「じゃあ、パパにお年玉をもらうよ」
なぜかパパがむせてる。
そしてこう言ったよ。
「おじいちゃんの家へ正月は行くぞ！」

第四四六話「優しき人よ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四四六話「優しき人よ」

図書館のカウンターに座ってる彼女が素敵だ。
笑顔がさわやかで、何を聞いてもニコッとして答えてくれる。
こんな人、いいなあ。
どこに住んでるんだろうか。
この近くみたいだなあ。
朝、自転車で行ってるところ見たんだ。
一緒にお茶でもしたらどんなに楽しいだろう。
新聞を全て隈なく読んだあと、雑誌を手にする。
すると、彼女が教えてくれた。

「おじいさん、新しい週刊誌が入りましたよ」
「ありがとう」

孫の嫁さんに来てほしいなあ。

第四四七話「土壇場に強い？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四四七話「土壇場に強い？」

ピアノの発表会だ。
僕の前の女の子は、緊張しながら出て行った。
一礼して始まった。
いつもより、速いなあ。
と思った瞬間、間違った。
あ、また間違った。
僕より真面目に練習していたのにどうしたんだろう。
僕にもその緊張が伝染しそうだ。
終わって舞台の袖に入って来た。
目が真っ赤。
可哀そうで声がかけられないよ。

僕だよ、次は僕。

ドキドキしながら礼をして、椅子の高さを直す。

僕の好きなトルコ行進曲。

初めて間違わずにできた！

第四四八話「夏向きですの」（前書き）

＞i11769―573＜

第四四八話「夏向きですの」

線香花火を買ってきた。
「おーい、パパと花火をするぞ！」
「今、テレビ見てるからやらなーい」
「僕もメールしてるし、やらなーい」
ちっ、子どもなんか相手にしないぞ。
「ママ、線香花火だよ」
「それどころじゃないのよ、韓流ドラマを録画するの」
フン、父親を無視するなんて。
「私と一緒にしましょう」
「おー、そうか」
白い手だな。
項が白くて、後れ毛も魅力的だな。
「ん？　家族にいたっけ？」
振り返った彼女の顔はなーんにもない。

第四四九話「縁側にて」（前書き）

＞i11769―573＜

第四四九話「縁側にて」

「お母様、打ち水してみましょうか」
「そうね、美子さん、風呂の残り湯でやってみましょう」
汗びっしょりになりながら、玄関先や庭に水を巻く。
確かに涼しい。
江戸風鈴が鳴る。
よしずの置いた縁側で、スイカを食べる。
「お母様、このスイカめちゃめちゃ高いです」
「あら、そうなの」
「一個三千円。だから四分の一だけ買いました」
「じゃ、二人で食べるしかないわね」
「はい秘密ね」
種飛ばしをするが飛ばない。

お母様、三メートル！

第四五〇話「節約のはずが」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四五〇話「節約のはずが」

雨が降って来た。
傘を買うのももったいない。

化粧直ししてもらおうと化粧品店に。
「お化粧のポイント教えてください」
「いいですよ、さあ、お掛けください」
前髪をしっかりピンで上げられて恥ずかしい。
「どこのメーカーをお使いですか」
「〇〇です」
ブランド品だと嘘をつく。
本当は百均なのに。
クレンジングで落とされたすっぴんの顔。
職人の技で美しく変身。
化粧直しのはずが高級ファンデお買い上げ。

ああ、傘を買えばよかった。

第四五一話「朝の訪問者」（前書き）

＞i11769―573＜

第四五一話「朝の訪問者」

朝からピンポーン。
ドアを開けると彼がいた。
「来るなら教えてって言ったでしょ。部屋も掃除してないし」
「いいんだよ、そんなこと」
付き合って三年の彼。
転勤で大阪へ。

「腹減った」
台所で鍋のふたを開けている。
「あ、うまそう。白菜と油揚げとベーコンの煮物」
「うん、昨日作ったの。食べる？」
「わーい、卵焼きも食べたいな」
「了解」
ついでに味噌汁もふを入れて作る。

「美味い！　お礼にこれ」

小さな箱にリボン。

「結婚しよう」

第四五二話「主婦と主夫」（前書き）

＞i11769―573＜

第四五二話「主婦と主夫」

今日は結婚記念日だ。
定年退職して初めての記念日。
夕食の献立は豚肉の生姜焼きにしよう。
スーパーに行ってちょっと高い豚肉を買う。
付け合わせは何にしようか。
ピーマンともやしの酢の物がいいかな。
それに中華風スープとするか。
そうだ、ちくわがもうそろそろ賞味期限だから、磯辺揚げもするか。

ビールもワインも冷やし食卓にはヒマワリの花。

いつもより一時間遅い。

「ただいま」
「電話ぐらいして来いよ」

主婦の気持ちが分かる。

第四五三話「見逃さない視線」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四五三話「見逃さない視線」

洗濯物を干していると、娘が籠から出してしまう。
「あーあ、あなたのおむつを被らないで」
洗濯籠から脱水したおむつを頭に載せている。
「ちょっと、自分で干してみたらいかが」
おどけてそう言うと、嬉しそうに笑う。
紙おむつも便利だけど、家にいる時は布おむつが経済的。
しかも、母がこれを使う方が早くおむつがとれるって。
おしっこの感覚が分かるからって。
「しーはまだでしゅか」
娘の視線が止まる。
慌てておまるへ。

成功です！

第四五四話「私も美人よ」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四五四話「私も美人よ」

誰もが振り向くって？
そう、私は美人。

少しアイシャドウがきついかな。

私は選り好みなどしないわ。

そんな投げやりなところが受けるのかしら。

あっちからもこっちからも覗くのよ。
食べている時も寝ている時も。

私の前でずっと立ちすくんでいるような男もいたわ。
しょうがないからじっと見てやったの。

すると、感激したように何枚も写真を撮るのよ。
いい加減にしてほしいわ。

あの人何か喋ってる。

「上野動物園のパンダ舎からでした」

第四五五話「それは違うと思う」（前書き）

＞i11769―573＜

第四五五話「それは違うと思う」

亀を見つけた。
捕まえて家に持って帰る。
「ママ、亀だよ」
「あらまあ、どこにいたの」
「うちの前の溝だよ」
洗面器を持ってきて早速入れる。
「僕も浦島太郎みたいに竜宮城へ連れて行ってもらえるかなあ」
「それはどうかなあ」
「なぜ」
「あのときの亀は虐められていたのを助けてくれたお礼に竜宮城へ行ったんだから。あなたは捕まえちゃったんでしょ」
納得のいかない四歳児。
急に亀をひっくり返す。

「よし、僕が助けてやる」

違うよ！

第四五六話「今日は二人で」（前書き）

＞i11769―573＜

第四五六話「今日は二人で」

熱いコーヒーを淹れる。
けだるい朝のひととき。
まだ、彼はベッドで寝ている。

昨夜のことは夢だったのか。
酔いの勢いも手伝って、来てしまった彼の部屋。
独身なのかそれすらも聞いてはいない。
分かっているのは「今日は寂しい」ということだけだった。

私たちはひたすら抱き合った。
話すことなど何もなかった。

机の上に位牌がある。

ふと起きてきた彼。

「それ、交通事故で死んだ妻の」
「いつ？」
「四年前の昨日」

彼の頭を抱きしめる。

第四五七話「傑作でした」（前書き）

＞i11769―573＜

第四五七話「傑作でした」

一人原稿を書いている時間、長いようで短いようで。
だが、すでに三時間経過。
今日は執筆が進む。
食事をしなくてもどうってことはない。
あともう少しで完結。
宅配が来た。
受け取る荷物はお中元。
パソコンの前に戻ると、悲鳴が出た。
「あああああああっ！　消えてる！」
完成間近の原稿がない！
風でペン立てが倒れてる。
キーボードを押したのはこのマジックか鉛筆か……。
消えた原稿は傑作のような気がする。
受賞作になるはずだったのに。

第四五八話「一言言わせてくださいな」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四五八話「一言言わせてくださいな」

大体、年寄りに何の相談もなく家を建て直すってどういうこと。
息子は簡単に言うのね。
この家だっておじいちゃんとおばあちゃんが暮らすには十分な広さよ。
確かに歳とって心配かもしれないけど大丈夫。
まだしっかりしてる。
同居なんて無理。
二人の方が気楽に決まってるじゃないの。

私たちにとってこの家は終の棲家なのよ。

屋根裏から一部始終を覗いているネズミたち。

「若い人はネズミが苦手だからきっと駆除するって言いだすわ！」

第四五九話「親戚だから」（前書き）

＞i11769―573＜

第四五九話「親戚だから」

この暑さの中、お中元が届く。
「あら、水羊羹だわ」
「ホント、いいわねえ」
「お母様、葛きりも入ってますよ」
「それは嬉しいわ。大好物ですもの」
そこへ、一年生の息子が帰ってくる。
「わあ、なあに？」
「水羊羹よ」
「つまんない、ゼリーじゃないの？」
「ゼリーの親戚よ」
「ふーん、親戚ってどれぐらい」
「そうね、冷やして固めるなんて同じだからいとこぐらい」
「そっか、じゃあ食べる！」
なぜ、この話で納得できるのかしらねえ。

第四六〇話「十分わかってます！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六〇話「十分わかってます！」

珍しく静かね。
中学生の息子。
「どうしたの？」
「夏の終わりが近づいてきた」
「そうね、まだまだ暑いけどね」
「学校が始まっちゃう」
「勉強の秋よ」
「あーあ、勉強って向いてないんだよ」
ゴロゴロしながら、ふてくされている。
「そんなこと言ってないで、早く宿題したらいいでしょう」
「あーあ、僕は夏が好きなの！」
「季節の問題ではないでしょう。早くしなさい！」
「あーあ、母さんは分かってない！」
毎年この話を聞いてるわよ！

第四六一話「生まれつき人気者さ」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六一話「生まれつき人気者さ」

暑いんだけど、売れっ子の僕としてはエアコンもついてるし文句はない。
僕を見ようとみんなが夢中になっている。
止まったらダメ、さあ流れて流れて。
ジャニーズ系や韓国勢も人気はあるけど、僕には負けると思うな。
だって、何にもしゃべらなくても行列だぜ。
僕はただポーズをとるだけ。
流し眼をしてみる。

「可愛い！」
「もう癒されるぅ！」

そうだろう！
ちょっと後ろ姿も見せようかなあ。

「お尻もぷりぷり！」
「パンダっていいわあ」

第四六二話「解決方法は？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六二話「解決方法は？」

久しぶりの映画館。
ポップコーンとコーラを買って席に着く。
次回の予告編も期待できる作品ばかり。
嬉しくなるこのひととき。

昔は立ち見で映画を見ることもあったわ。
でも今はみんな席に座ることができるから、痴漢が後ろに立つこともない。
大きな人が前にいても段差があるからよく見える。
いいことばかりね。
でも、一つだけ解決できない問題がある。
それはね、暗くなった途端に寝る親父。
恋愛映画なのにいびきがうるさいったら！。

第四六三話「趣味が合わないの」（前書き）

＞i11769―573＜

第四六三話「趣味が合わないの」

ホームセンターが好きな夫に付き添って出かける。
「おい、砂利が安い」
「どこに置くの？」
「芝生が菜園に入りこまないように砂利を置くんだ」
「ふーん」
「おい、畑の土も安いぞ」
「そう？」
「おっ、ブロックも安い」
「ふーん」
喜ぶ夫はホームセンターの外でご満悦。
でも、私は全く興味がない。
それより、中に入って涼みたいわよ。
ここで買えると言ったら何かしら。
服もないし、化粧品もない。
本も畑を耕すシリーズ！

つまんなーい。

第四六四話「できた後は最高！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六四話「できた後は最高！」

くそ！
ピアノの練習になるといつもそうさ。
右手はどうにかなるけど、左手が思い通りに動かない。
「練習の音が聞こえませんよ」
「やってるよ！」
意地悪なおばあちゃん。
台所でおやつ作ってる。
ピアノの先生なんだ。
「違うわよ、左手のリズムが」
「わかってる！」
「左手だけでまずやってごらん」
うん、少しずつできる。
悔しいけどその通りだった。
両手を合わせて弾いてみる。

「よくできたね。はい、プリン」
弾けた後のおやつは最高！

第四六五話「似てるかしら？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六五話「似てるかしら？」

犬を連れて散歩に行く。
向こうから高そうな犬を連れた綺麗な奥さんがやって来る。
「ワンワンワンワン」
「だめよ、キャシーちゃん」
「ワンワンワンワン」
そう言いながら引きずって行く。
プライドが高くて、あの奥さんにそっくり。
それに比べて、我が家の雑種犬。
全然吠えないわよ。
誰が来てもいつも受け入れる心の広さよ。
というか食べ物以外は興味がない。
餌を貰うときだけ、尻尾を振って見せる。
「ああ、飼い主に似るって本当ね」

第四六六話「この件に限っては迅速に」（前書き）

＞i11769―573＜

第四六六話「この件に限っては迅速に」

夕食を考える。
暑いから買い物がイヤ。
タマネギ、ピーマン、ジャガイモ、豚肉、茄子、ミョウガ。
これで何をしようか。
酢豚も飽きたなあ。
テレビでまーくんとりょうくんがカレーを宣伝中。
そうだ、夏野菜カレーとしようか。
ミョウガはオニオンスライスと鰹節に添えるといいわね。
そうよ、この暑いのに買い物に行かなくて済むわ。

「えーと、冷えたビールは？」
大変！　ないわ。
自転車をこいで慌てて買いに行く。

これだけは腰が軽いの。

第四六七話「先生はそうなの？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六七話「先生はそうなの？」

ママがなぜもっと早くしなかったかとブツブツ言う。
「僕は今、追い込みに忙しいんだから」
「今まで時間はたっぷりあったのに何もしないからよ」
「ママには僕の気持ちは分かんないよ」
「はいはい、じゃあ、ゆっくり夏休みの宿題やってちょうだい」
「ちょっと、一人じゃ無理」
「ダメよ、あなたの宿題よ」
「天気を言って」
「は？」
「絵日記の天気が分かんない」
「そこまで先生は見ません」
「ホント？」
「ホント」
ママの仕事は先生だ。

第四六八話「気象予報?」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四六八話「気象予報？」

朝からく鼻水としゃみが止まらない。
「風邪かしら。急に涼しくなったから」
早速耳鼻科へママが僕を連れて行った。
「はいはい、花粉症ですね」
鼻の穴を見るなり、先生は言った。
「もう花粉症なの？」
僕はがっかりした。
「そうだね」
「いやだなあ、暑いのにマスクは嫌だ」
「とりあえず、鼻の中を洗おうか」
これも嫌い。プールでおぼれた気分。
「ゴホゴホ」
「ハイ終わり」
薬を貰って帰り道。

「あなたの花粉症で季節が分かるわ」
フン！

第四六九話「青春残酷物語」（前書き）

＞i11769―573＜

第四六九話「青春残酷物語」

雷が鳴り出した。
速く家に帰らないと。
だが、夕立は容赦なく降って来た。
夏で部活から三年生は消えた。
今日もいなかった先輩。
マネージャーの私は片付けに時間がかかった。
傘も持っていない。
自転車で立ち漕ぎしながら角を曲がると、憧れの先輩の姿。
しかも、吹奏楽の美人部長と相合傘だ。
あの二人の横を突っ切るのは勇気がいる。
迷っていたら、雷が鳴った。
キャーと言って美人部長が先輩に抱きついた。

最悪。

二人のキスまで見た。

第四七〇話「名言だな！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四七〇話「名言だな！」

二十歳過ぎて居酒屋でバイトを始めた。
「いらっしゃいませ～」
この声が威勢よく出ないと先輩に叱られた。
毎日、挨拶を特訓された。
おかげで、中学時代の先生が見たらひっくり返るような応対ができるようになった。
昔は何か聞かれると「うるせー」「ウザい」「別に」しか言わなかった。
あの頃の心の無い言葉が恥ずかしい。

今では飲みに行って無愛想な店員がいると
「ブルータス、お前もか」
と言いたくなる。
俺も大人になったものだ。

第四七一話「つらされちゃうわ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四七一話「つらされちゃうわ」

男の子が教室で一人残されて宿題をしている。
「明日は持って来るから」
「だめ、そう言い続けて一週間でしょ」
「うーんと、あのね、昨日は熱、おとといはお腹が痛かった。その前はおばあちゃんが具合が悪くて……」
「そんなこと言ってると、ピーターと狼のお話みたいになっちゃうわよ」
「あーあ、つまんないなあ」
「早くやろうね」
「先生は子どものころから真面目だった？」
話し好きのいたずらっ子。

結局は終わらないのよ、宿題が。

第四七二話「忘れていたよ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四七二話「忘れていたよ」

空を見上げていると涙がこぼれそうだ。
いつの間にかあいつ、すごく泳力伸ばしてた。
練習だって僕と同じ。
スイミングの先生も同じ。
なんで負けたのかよく分からない。
軽い練習の時も僕が速かった。
それがスタートした時からまるでロケットのようだった。

いつもは一緒に帰るけど、会場から出てきたよ。

「待って」
振り向くとあいつだった。
「今日、母さんの命日だったんだ」

忘れてた。
去年、泣いて泳いでいたね。

やっぱり僕の負けだ。

第四七三話「パパったら」（前書き）

＞i11769―573＜

第四七三話「パパったら」

冷やしソーメンを作りましょう。
「美子さん、ミョウガも入れましょうね」
「お母様金糸卵をお願いします」
「はいはい」
そこへ息子がやって来た。
「僕は厚焼き卵がいいなあ」
「ソーメンだから、厚焼き卵をのせるとちょっとねえ」
「だって、卵焼き大好きなんだもん」
「それじゃ、あなただけ厚焼き卵にしましょうかね」

厚焼き卵入りソーメンは一つ。

やがて居間から泣き声。
「パパが食べた～！」
「俺も卵好きなの！」
呆れるお母様と私。

第四七四話「魔女？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四七四話「魔女？」

野菜用の土を買いにホームセンターへ行く。
今日は日用雑貨も安い。
ティッシュも洗剤も安いわね。
風呂場の床洗いモップも買いたいし、そう言えば除湿剤も水が貯まっていた。
あれもこれもと買ってカートに山盛り。
駐車場まで来て気がついた。

「しまった！　車じゃないんだった」

どうしよう。
ママチャリなのに。

土や洗剤は荷台にくくりつけ、前のかごにティッシュ。
背中には除湿剤。
モップをサドルの下に。

これじゃ、まるで魔女だわね。

第四七五話「やめられない　とまらない」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四七五話「やめられない　とまらない」

ママとお出かけだよ。
「おもちゃは今日は買わないからね」
「うん、わかった」
「ママも要らないものは買わないから」
「約束だよ」
でも、この約束ってすぐ破られる。
「ちょっと待って、ママの欲しかったバッグが安い」
「今日は買わないんでしょう？」
「でも、半額よ。いつもは三割引きにしかならないのに」
「ずるいなあ、ママだけ？」
「しょうがないわね。じゃ、千円までよ、おもちゃも」

ママと買い物はこれだから止められないのさ。

第四七六話「人生の苦悩」（前書き）

＞i11769―573＜

第四七六話「人生の苦悩」

『どうしたのか。
この頃、顎が痛い。
何が原因なのかよく分からない。
いけない病気になったのかもしれない。
そう言えば、テレビでガンの話もしていたな。
思えば楽しいことは何もなかった』

覗いてみた。
息子の日記。
世の中のすべての苦悩を引き受けたかのような日記。
いつものことよ。
長期の休みの最後の日はこんな日記ばっかり。
顎が痛い？
それはね、カラオケのし過ぎでしょ？
四時間歌い続けてきたんでしょ？

「早く宿題しなさい！」

第四七七話「もうおしまいよ！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四七七話「もうおしまいよ！」

いつもの場所で待ち合わせ。
もう十五分待ってるけど、来ない。
雨も降って来た。
傘がない。
なんで渋谷のハチ公前なの。

やがて、雨は本降りに。
テナントの前で待つ。

三十分過ぎた。
まだ来ない。
ケータイ電話はつながらない。
怒りより不安な気持ちがむくむくと。

一時間、そして二時間。

「ごめん。新幹線が止まって。お腹もすいただろ」
「ケータイは？」
「電池切れ」
顔を見てホッとした。

遠距離恋愛、もうおしまい。

明日、結婚式です。

第四七八話「バットマンも怖いの？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四七八話「バットマンも怖いの？」

台風が来るって言うから、雨戸を閉める。
バサバサってすごい音。
見るとコウモリが入って来た。
「ぎゃーっ！」
すると、コウモリもタンスの上からじっとこちらを見ている。
眩しいのだろうか。
「お母様、コウモリが入って来ました！」
「えっ！」
お母様が慌ててやって来る。
「あら、今時珍しいわね」
「でも、睨んでる気がします」
「本物のバットマンね。でも、おびえてるみたいよ」
「あら、オスなのかしら」
思わず顔を見合わせる二人。

第四七九話「可哀そうな僕？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四七九話「可哀そうな僕？」

二学期の始業式に夏休みの工作を持って行った。
見ると、すごい力作ぞろい。
絵は波しぶきまで描けちゃってる。
一年生でこの絵はどうだよ！
「しのちゃん、その絵すごいよ」
「うん、パパが凝り過ぎなの」
「工作は？」
「ママがやった」
見ると美しい貯金箱。
「ドリルは？」
「お兄ちゃんがしたよ」
「じゃ、しのちゃんは何したの？」
「ジュースやおやつを買いに行ったよ」
「しんちゃんは？」
「全部自分でやったよ」

僕って不幸な子なんだ。

第四八〇話「意味が分からない」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四八〇話「意味が分からない」

今日もサッカーで泥まみれの息子が帰って来た。
「ちょっと待って」
「なんで」
「そこで脱いで。泥を家に入れないで」
「面倒だな」
「文句言わずに風呂へ」
そして、そのまま風呂場に直行させる。
「ぎゃー！　お兄ちゃんのバカ！」
しまった、妹が風呂に入ってたっけ。
「母さん！　どういう気だよ！　あいつがまだ入ってるじゃん！」
「ごめんごめん。忘れてた」
その妹五才。
しかも、裸で出てきて居間で服を着ている。
恥ずかしがる意味がない。

第四八一話「買ってよ！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四八一話「買ってよ！」

友だちのパパがアメリカに出張でお土産を買って来たらしい。
羨ましいような話だ。
アメリカのおもちゃやお菓子だって。
うちのパパも昨日から出張だ。
僕は必ずお土産買ってきてと言ったんだ。
何を買って来てくれるかなあ。

夜になってパパが帰って来た。
「お帰りなさい。お土産は？」
「ほら」
差し出された袋にはタオル、石鹸、歯ブラシ、髭剃り、シャワーキャップ。
煎餅も一枚。

「これいくら？」
「７９８０円」
「それホテル代でしょ」

第四八二話「散歩？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四八二話「散歩？」

「ジョン、散歩よ」
僕の飼い主は六十二歳のメタボな女性。
ちょっと歩くと、すぐ近所の奥さんと立ち話。
「あら、お散歩ですか」
「ええ、毎日大変だわ」
嘘だーい！　僕の方こそメタボになっちゃうよ。もっと歩いてよ。
「ところで、奥さんご存じ？」
「なあに？」
「あそこの家のご主人、浮気してるんですって」
「えーっ……」
延々続くとりとめのない不毛な会話。
四十分後。
「さ、帰りましょ」
「ワン（いや）」
五〇メートルも歩いてない！

第四八三話「どこだったかなあ？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四八三話「どこだったかなあ？」

「あなた、囲碁のお友達が見えたわよ」
小学二年生の進君。
「おじいちゃん、こんにちは」
「こんにちは進君。母さん、お菓子は？」
「はいはい、今お持ちしますよ」
徐に碁石を置く進君。
初めは私が教える側だったのに、最近は互角の腕前になった。
ムムム、そこに置かれるとまずい。
「あ、進君、お菓子をどうぞ」
気を紛らせたい。
そっちもいかん。
「ジュースもどうぞ」

進君は次の一手を忘れないが、私はどこが危ないか忘れてしまった。

第四八四話「つまんないよ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四八四話「つまんないよ」

ピンポーン。
「はーい」
ドアを開けると綺麗なお姉さん。
「あ、何か？」
「はい、この地区担当の掃除モップレンタルです」
「あ、僕は別にいいです」
「今、お試し期間ですから」
「えっ、無料？」
「はい、ちょっと使ってみませんか。二週間で無料です」
「じゃ使ってみます」
あの綺麗なお姉さんに会えると思って、せっせと使う。

ピンポーン。
「モップのレンタルです」
「はーい」
喜んで開けるとアラカンのおばさんが一人。
黙って返した。

第四八五話「事実は言わなきゃ」（前書き）

＞i11769―573＜

第四八五話「事実は言わなきゃ」

夜の十時過ぎだというのに、娘の部屋からひそひそ声。
どうも電話をしているらしい。
「母さん、もう切るように言えよ」
「嫌ですよ、お父さんが言えば？」
「こういうことは母親が言うもんだろ！」
「また、嫌われることを私にさせるんだから。いいじゃないの電話ぐらい」
「こんな遅くに電話なんて、勉強に差し支える」
ノックする母親。
「なあに？」
「お父さんが電話をもう切りなさいって」
慌てる父親。
「母さんズルイよ」
「事実です」

第四八六話「見ないでおきましょう」（前書き）

＞i11769―573＜

第四八六話「見ないでおきましょう」

朝から庭の草むしり。
涼しくなってきたから草を引く気になった。
今まで放ったらかしだったから、芝生も花壇も雑草がいっぱい。
「美子さん、液体肥料を花にやってちょうだい」
「はーいお母様、その芝生に生えてきた雑草、薬でも撒いてみます？」
「うーん、薬はやめときましょう。子どもが外で遊ぶし」
「そうですね」
「涼しくなれば、小まめに引くでしょう」
あれから一週間。
また暑さが戻ってきた。

二人共庭を見ないことにしている。

第四八七話「誰に似たの？」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四八七話「誰に似たの？」

秋の運動会に備え毎日練習が始まった。
「ママ、ボクね、いつも一等だよ」
「あら、すごいじゃない。楽しみだわ」
その夜、ママとパパの会話。
「俺に似たんだな。足の速いのは」
「ううん、私はいつもリレーで選手だったわ」
そして、運動会当日。
パパとママはゴール近くで陣取る。
期待したかけっこ。

ヨーイ、ドン。

「おい、息子はビリだぞ」
「ホント、遅いわね。あなたに似たのかしら」
「お前だろ」

次はパン食い競争。

ダントツの一等。

第四八八話「ついつい、すみません」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四八八話「ついつい、すみません」

洗濯物を一杯干した途端に雨が降って来た。
「あー、折角干したのに」
はっきりしない天気。
節電中だから乾燥機は使いたくない。
雨がやんだ。
それっとばかり、軒下から竿を出そうとする。
そこへ電話が鳴る。
振り向いた拍子に、ハンガーが一つ落ちる。
「ああ、洗ったブラウスが汚れた～」
拾いながら電話に出る。
「もしもし！　河ですけど！」
思わず不機嫌になる。
「担任の小坂井ですけど」
「ああ、どうもすみません」
声が裏返っちゃう。

第四八九話「それはないでしょ！」（前書き）

＞i11769―573＜

第四八九話「それはないでしょ！」

放課後に校舎の裏で部長と約束。
「こんなところで待っててなんて、みんなに見られちゃうよ」
呟きながらも期待度百パーセント。
「待たせてごめん」
「ううん、なんでしょうか」
知っていながらこのセリフ。
告白されるのかあ。
「みんなの前では言いにくいから」
来た！
やっぱり告白だ。
「今度の地区予選メンバーに君は入れないことになった」
「えっ？」
「ごめん、ストーリー性重視で木村さんになった」
県のマンガ大会、出たかったのに。

第四九〇話「いつまで続くかな」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九〇話「いつまで続くかな」

電気代が一万八千円。

夏休みにみんなが帰って来るのはいいけど、光熱費が跳ね上がる。

「どうした、母さん」

「ええ、お父さん、子どもが帰ってくるとホラこんなに」

家計簿を見せるお母さん。

「ほーっ、すごいな！」

「子どもは家だとどんどん使うから」

「ハハハ、向こうでは電気代も節約してるんだから、いいじゃないか」

「帰りにガソリン代もカンパしましたよ」

「至れり尽くせりだな」

「老後も金を送るのはこちらかもしれませんね」

第四九一話「僕の宝物」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九一話「僕の宝物」

僕の大事なネコが見当たらない。
一週間公園の裏で餌をあげていた。
箱に入ってた子ネコ。
学校の行き帰りに会いに行ってた。
今日は給食のパンをこっそり持って帰って来たのに。
悲しくて涙がこぼれそう。

家に帰ると、おばあちゃんが僕を呼ぶ。
「ただいまー。なあに？」
「ネコを拾ったの」
「えっ？」
おばあちゃんの後ろから僕のネコ。
赤いリボンに鈴付けて。
みゃあ～。
「僕のネコ」
「この頃お菓子や缶詰がなくなるから」
大事にするよ。

第四九二話「あなたという子は！」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九二話「あなたという子は！」

雨が降ってきたから学校へ傘を届けましょう。
今日は会社も休みだし、それぐらいしてあげましょ。
靴箱のところに置いておこうかしら。
でも、折角来たから教室まで行ってみようっと。
「ひろしくん！」
先生に名前を呼ばれてるわ。
答えられるかしら。
そっと後ろから見る。
「どうして、宿題を毎日忘れるの？」
「昨日はママが病気で」
えっ、ひろしったら。
血が頭に上ってきた。
ここは帰るしかない。
傘まで持って帰って来た。

許しません！

第四九三話「今日は暇だから」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九三話「今日は暇だから」

「もしもし、こちらはマンションをお手頃な値段で販売してます」
「そんな、手頃って言われても千円じゃないでしょ」
「奥様、お安いですから。家賃収入はバイトよりいい値段ですよ」
今日の私は暇なの。
ちょっとこういう話に付き合ってみることに。
「あら、私のバイト代いくらか知ってるの？」
「えっ」
こういう切り返しは経験ないようで口ごもる。
「ここがどの組なのか知ってる？」
「あ、失礼しました！」
あら、もう切れちゃったわ。

第四九四話「師だった人が」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九四話「師だった人が」

実力テストなんだから実力でやる、などと言ってたら散々な結果が出た。
「だから、実力の無いものがそんなこと言っても無駄！」
「でも、それなら普通のテストとおんなじじゃないですか」
「そう、ひたすら勉強しろ！」
「つまんないなあ」
担任は大学出たばかりの先生。
気安くて何でも話せた。
卒業は辛くて泣いた。
こんな先生になりたくて教育学部へ。
どんな悩みも聞いてくれた。
教員試験に合格して二年。

明日はこの人の妻になります。

第四九五話「天使の頬ずり」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九五話「天使の頬ずり」

「ねえ、先生いる？」
小学校の保健室。
「はい、どうしたの」
「あのね、お腹が痛いの」
「朝はうんこ出たの？」
「うん」
「ここに座ってごらん」
保健室の長椅子に座らせる。
一年生のアイ子ちゃん。
ときどきやって来る。
春に離婚したお母さんはまだ赤ちゃんの妹を連れていった。
この子はお父さんと二人きり。
お腹をさすってあげていると治ったって。

「この手は魔法が使えるのよ。握手しよう」

私の手に頬ずりするアイちゃん。

がんばれ。

第四九六話「立場が……」（前書き）

＞i11769―573＜

第四九六話「立場が……」

授業中遊んでばかりいるいたずらっ子。
「廊下で立ってなさい」
すると、彼は先生に向かってこう言う。
「廊下に立たせるのは体罰だよ。そんなことしていいの？」
う、忘れてた。
教育を受けさせる権利を奪ってはいけないのだ。
「じゃ、これ」
「なに？」
渡されたのは小さなホワイトボード。
「君はそこでこの問題を解きなさい」
「えーっ、椅子は？」
「持って行きなさい！」
椅子にふんぞり返って黒板を見る彼。
何だか指導教官みたいだな。

第四九七話「恋の炎は」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九七話「恋の炎は」

秋風が肌に心地よい。
風呂上がりに浴衣を着て彼が出るのを待つ。
初めて来た温泉旅行。
これから部屋でビールでもいただこうかしら。
いつまで経っても出てこない彼。
「どうしたのかしら」
すると、男風呂から顔が出た。
「あら？」
「服が盗まれた」
「えっ？」
「宿の主人を呼んでくれ」
「うん」
急いで宿の主人を呼んではきたけど、桶で隠しながら話をする彼に恋の炎はドン冷え。
「おい、服を持ってきて」
何だか裸男に指図されたくない。

第四九八話「初めてです」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九八話「初めてです」

今日は体育祭。
学ラン姿の彼に胸がキュン。
私だって、放送部として頑張ったわ。
最後の対抗リレーでアンカーとして出た彼。
自慢の足でごぼう抜きよ。
優勝は青チーム。
思わずみんなで号泣したわ。

そして、キャンプファイヤー。
初めて彼と踊る私。
もう死んでもいいくらい感激。
繋ぐ手と手が震える。

さらに、三年青チームは彼の家で打ち上げ。
調子に乗ってついビールを飲んだ。

翌日、校内から青チームの姿が消えた。

停学三日間ですの。

第四九九話「悲恋」（前書き）

＞ｉ１１７６９―５７３＜

第四九九話「悲恋」

秋の風が吹いている。
彼岸花も揺れている。
あなたと歩いたこの堤防の道。
今日は一人で歩いている。
いつか、必ずお嫁さんにしてくれるって言ったのに。
どうしてこうなっちゃったんだろう。

私は、五年の間、本気で待っていたのに。
駅で見かけたあなたは都会の匂いがしたわ。

「二郎ちゃん、えらい変わったなあ」

村の人がみんな集まって言ってたわ。
私もその美しい彼の姿に唖然としたわ。

「二郎ちゃん、随分グラマーな女になったのね」

第五〇〇話「憧れの生活」（前書き）

>i11769―573<

第五〇〇話「憧れの生活」

広告のチラシを散らかしている一年生の娘。
「何をしているの」
「ママ、お店屋さんごっこしない？」
「だって何もないでしょう」
「だから、このチラシよ」
鋏を持ってきてせっせと切る娘。
「ふーん、何屋さんなの？」
「ケーキ屋さん」
ケーキの写真を切り抜いている。
ちょっと楽しそう。

「じゃ、ブティックにしようかなあ」

「これください」
「二万円です」
「高いケーキ」

いくらでも作って渡せるチラシのお金。

こんな生活をしたいなあ。

第五〇一話「遺書」（前書き）

＞i11769―573＜

第五〇一話「遺書」

「ねえ、この字はなあに」
一年生の息子が遺書って書いている。
「どういう意味？」
「死ぬ前に伝えたいことを書き遺すのよ」
「そう。おばあちゃんの部屋にこの字を書いた封筒があったよ」
慌ててお母様の部屋に。
「お母様！」
「はい？」
「遺書の封筒があるって言うから」
「あるわよ、ほら」
笑いながら見せるお母様。
「へ？」
「書いておかないともめるってテレビで言ってたから」
「なんだー」
「私は殺されても死にませんよ」

納得です。

第五〇二話「仲が悪かったのか」（前書き）

＞i11769―573＜

第五〇二話「仲が悪かったのか」

体育祭の櫓を作るのは三年生の仕事。
受験に向かう少しの間、発散させるという狙いなのか昔からの伝統だ。

あれは四十年前。
私もその中の一人だった。
六チームある中で観客の目を奪ったのは赤チーム。
彼らは校長をモデルにした大仏像を仕上げた。
それだけでも大受けだったのに、午後になると顔を挿げ替えた。
スルスルとベールが外された。
出てきたのは赤ら顔の教頭だった。
しかも、なぜか赤フン姿に。
一番受けていたのが校長だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4641l/

２００文字小説集「風のささやき」

2011年9月27日13時29分発行